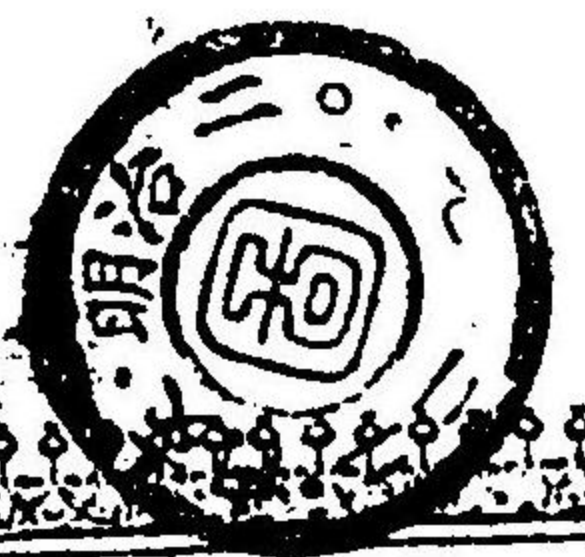


東京報知新聞社

西辭先生答案
吉田熹六先生記事

CUSTOMS
OF
EUROPE.
社會進化
歐洲之風俗

大阪碩學紳士合評
磯々菴佐藤雄治先生編纂

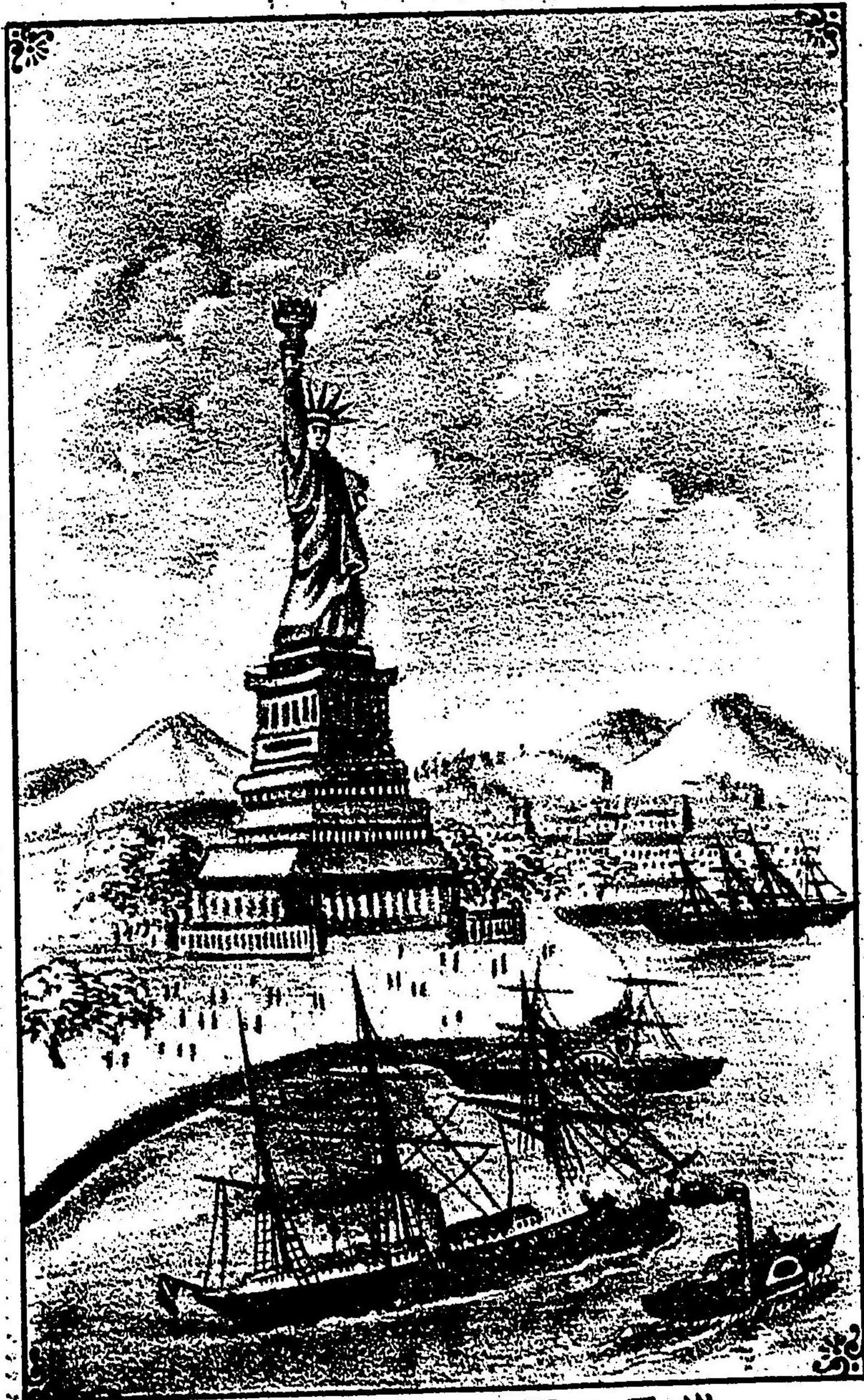


第一ノ高塔

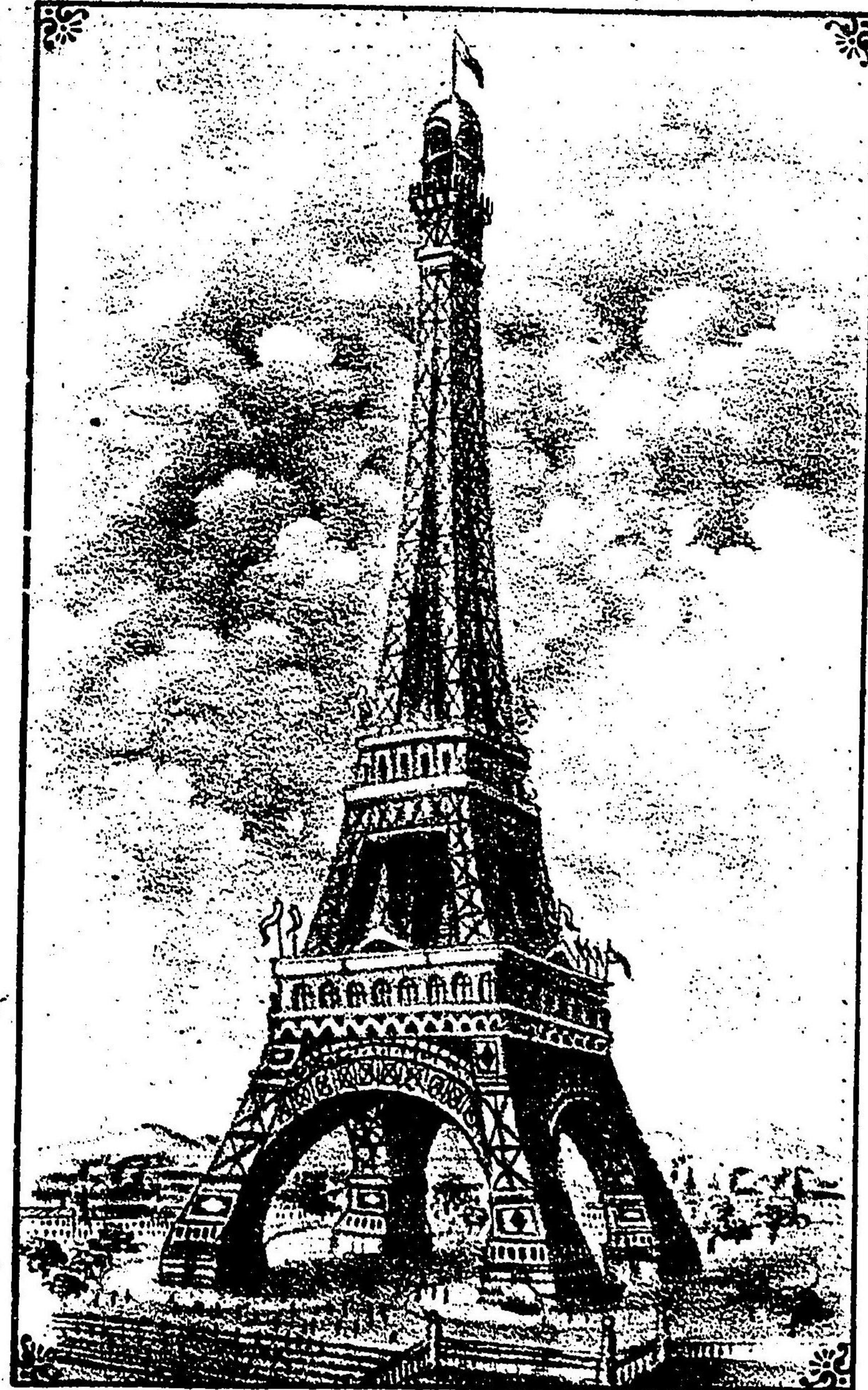
是來明治二十三年... 高塔ニシテ發見者「エ... 高塔ニシテ發見者「エ... 高塔ニシテ發見者「エ...

104823 毎日録

Handwritten notes on the right page, including numbers like 10, 90, 80, 70, 60, 50, 40, 30, 20, 10, 0.



世々照ヲスラ自由ノ神像



天下第一高塔

世界ヲ照ラス自由ノ神像

此度米國紐育ベドロース島ニ建テタル佛國ヨリ寄贈ノ自由ノ大像ノ異常ニ巨大ナル事ハ支那ノ長城伊太利ノサンメートル寺院等ト並ベ稱シテ世界壯觀ノ名勝中ニ算ユ可キ者ニシテ其全体ノ高サ無慮十五丈一尺アリ彼ノ右手ニ差上ケタル燈器コン其ノ焰ノ中ニ二十五人ヲ安坐セシム可シト云ヘル廣サノ者ニシテ又タ彼ノ頭コン上ニ四十人ヲ安坐セシムルニ足ルト云ヘル者ニシテ彼ノ古代世界七不思議ノ一ニ算ユラレシ希臘日神ノ大像スヲ尙ホ之ニ及ハサルヲ四丈六尺ナリ又日本ニテ巨大ナル者ノ喩ニ引カル、奈良ノ大佛ヲ自山ノ大像ニ較ナル時ハ僅ニ其三分ノ一ニ足ル足ラズトイフ以テ其巨大ナルヲ想像スベキナリ

歐洲之風俗目次

●西洋にて衣服帽子靴杯の有様の事	一	●舞臺飾付の事	二七
●日耳曼の英佛と趣を異にする事	五	●所作事に付我邦の芝居と異なる事	二九
●食事の工合の事	六	●芝居にて慘酷の所作を慎み避る事	三三
●西洋常用の茶の事	一〇	●役者舞臺の有様の事	三三
●西洋役者の身分の事	一一	●芝居の馬杯の事	三六
●芝居とナベラとの區別の事	一四	●芝居の趣向に付我邦と異同ある事	三八
●日本の俄と申す様のものゝ有る事	一八	●英國杯の一般行儀の事	四二
●小屋掛り舞臺機敷杯の有様の事	二一	●吉凶の時衣服の様子	四八
●樂器障方幕の工合の事	二三	●下女の有様の事	五一
●東京芝居と西洋芝居と比較の事	二四	●西洋人の相貌骨格の事	五三
●機敷敷物等の事	二五	●西洋諸國にて碧眼を貴ぶ事	五八
●平土間の事	二五	●婦人の毛髮の事	六〇
●烽火の工合の事	二六	●西洋諸國男女の髮の流行の事	六二

次 目

- 男子口髭の模様的事 六三
- 彼岸の團子亥猪萩餅の事 六六
- 正月並にクリストマスの事 六八
- 日曜日の有様の事 七一
- 公園の有様の事 七六
- 鐵道馬車乗合馬車の事 八三
- 寄席落語手品輕業等の事 八八
- 辻馬車牛車の事 九〇
- 音樂場躍所作事の事 九六
- 家屋の有様屋根瓦の事 九九
- 道路の有様の事 一〇三
- 家屋の規模窓の有様の事 一〇七
- 窓飾ガラス戸の事 一〇九
- 戸敵並曳鉤の事 一一三

- 居酒屋並同手代の事 一一六
- 菓子屋婚禮菓子の事 一二三
- 魚類の事 一三四
- 野菜の事 一二七
- 湯屋の有様の事 一二七
- パノラマの事 一三二
- 毎朝八百屋杯の來る事 一三六
- 競馬並に英國タルヒーレースの有様の事 一四三
- 西洋諸國新聞紙体裁の事 一四八
- 伊太利國風俗の英國と異なる事 一五二
- 外套蠅蠅傘種類の事 一五五
- 鳥の種類並同風味の事 一六〇
- 佛國巴里グランドホテル並諸國ホ

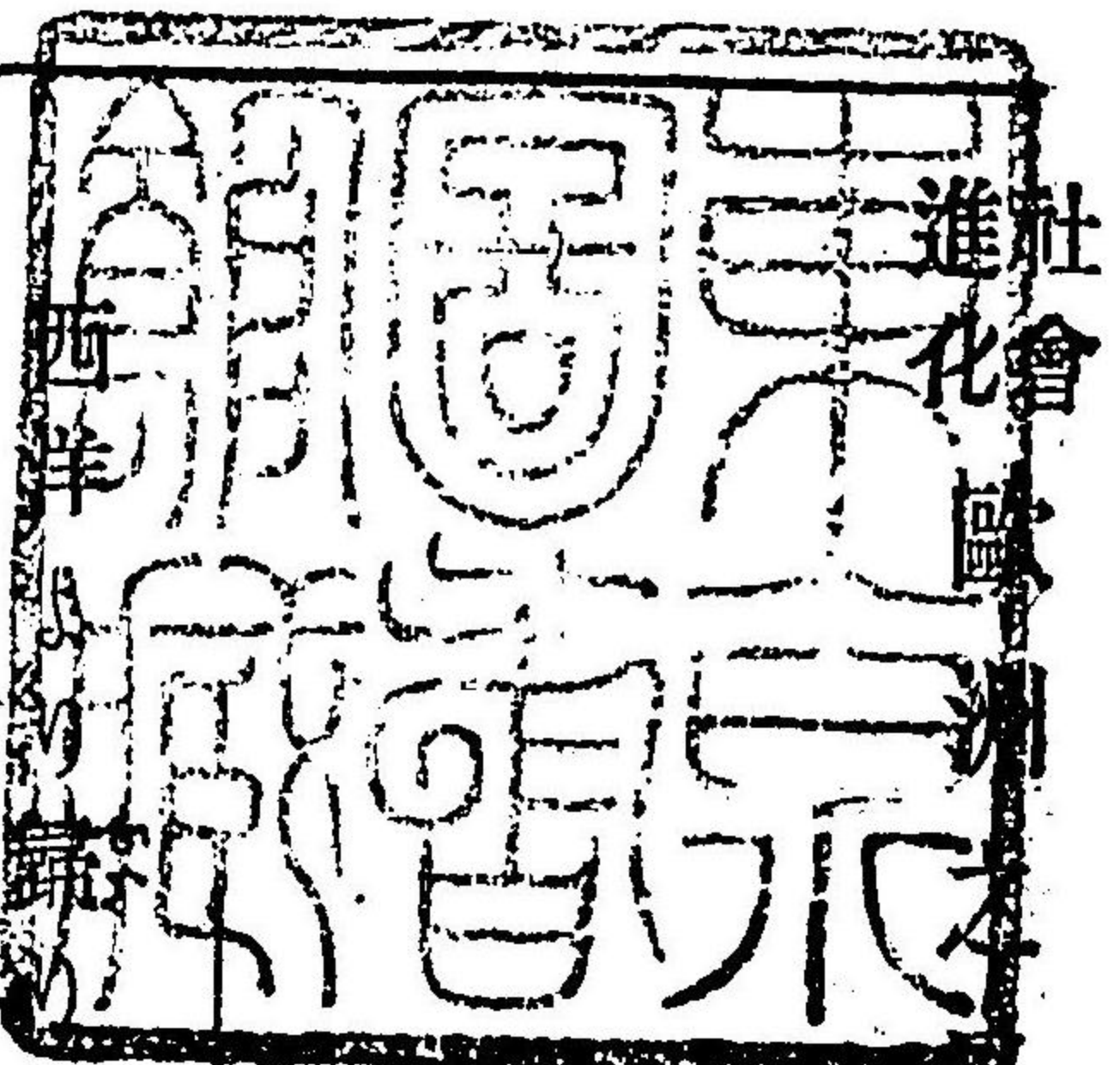
次 目

- テルの有様の事 一六五
- アルプス山の景色の事 一七四
- 倫敦氣候の事 一七七
- 花候の景色氣象の事 一八一
- 人家に近き禽類の事 一八四
- 自轉車並自轉車藝の事 一八七
- 米國にてモルモン宗徒の開きたる
- ソート、レーキ、シターの有様の事 一九一
- モルモン宗の奇談の事 一九四
- 新聞紙上の日本と異なる事 一九八
- 一夫多妻の有様の事 二〇六
- 歳暮年始の儀式並クリストマスの
- 景況の事 二一三
- 通例物品の贈答の事 二一四

- 伊太利國衣服家屋の有様の事 二一七
- 羅馬府の有様同名所の事 二二一
- 伊太利國闘獸場及古蹟の事 二二九
- 英國にて議員大改撰の節改進黨
- 守兩黨の勝敗を争ふ有様の事 二三三
- チヤムベルライイン氏の演説並其
- 他大改撰の景況の事 二三五
- 撰舉人投票手續其他の有様の事 二四二
- 大改選總体の有様の事 二四五
- メスメリズムと稱へ奇術を施す事 二五〇
- メスメリズム施術の有様並之を
- 試験せし筋書の事 二六二
- 煙草を嗜む事 二六五

回航紀事目次

次	目	頁
●	倫敦カリバプール港迄紀行の事	二六九
●	歴的瀾洋渡航の事	二七四
●	西班牙人を日本人と見異へし事	二七五
●	紐育着前船中にて訣別會の事	二七七
●	米陸着港の事	二八三
●	下宿屋の事	二八七
●	高架鐵道の事	二九四
●	新聞社の景況の事	二九八
●	グランド將軍の墓の事	三〇七
●	土耳其湯露西亞湯の事	三〇九
●	嶺軍中新聞紙の事	三一三
●	靴投げ米撒きの事	三一五
●	初旅の西洋浴堂の事	三一八
●	石瓦其他古兵器の事	三二二
●	半解の英語の事	三二四
●	電氣饅頭鳥象等の事	三二六
●	壁燄燄夏期の飾の事	三三〇
●	大陸の山川と島國の山川と異同の事	三三三
●	始めて昇降室に乗りし者の事	三三八
●	呼鐘の事	三四〇
●	伯林行きの荷物の事	三四三
●	犬猫の肉の事	三四七
●	世界三奇觀の一なるナイヤガラ瀑布の事	三四九
●	壁鏡の事	三五五
	目次終	



社會進化 歐洲本風俗

郵便報知新聞社員 西遊先生 答案
 全 阪 吉田熹六先生 紀事
 大 諸名士合評
 備 後 佐藤雄治 編纂

遂軒曰風
 儀習俗乃
 是政治法
 律所由而
 生此一言
 直然

西洋の土産話せよと責めらるれと政治法律杯の事柄と違ひ際
 限なき浮世話の何より始めん何を先きにせんと云ふ次
 第も立ちかぬれば先つ御尋ねに任せて御話申さんと返
 答するを常とせり今日の日本人に就て西洋の事物に味
 らき最も重なる關點を數ふれば政治法律杯學問道理
 にて求め得らるゝ所のものには在らずして却て風儀習

俗の細事に在るなり而して其風儀習俗の細事は取りも直さず政治なり法律なりの由りて生ずる所の原素とならざるものなれば苟も國の眞との根を看んとするには細事と見ゆる風儀習俗こそ却て大切なる意味あるものなるなれ左れば朋友故舊間一時の間答も或は今日の關點を補ふて西洋風俗の一端を知らしむる便りになる事もやと續々之を掲るととなせり

◎問 西洋にて衣服帽子靴杯の様子は如何に候や其着様格好は如何に候や

○答 私共が始て巴里に到着し亦た倫敦に参りたる時第一に目立ちて覺へたるは町中往來の人の帽子に候凡そ中以上と見ゆる人々の皆な日本にて禮帽と稱なへ居る高き絹の帽子を冠り辻々に屯せる馬車夫までも派出を貴ぶ連中皆な同様又ハ之に履せたる塗物の高帽を戴けり日本にて尋

邊軒日今
日誤ノ其
用法者豈
已哉
特帽子而

常冠り候低き羅紗の丸帽子ハ牛乳配八百屋荷車曳等より下ハ乞食まで都て先つ手足を働かす中以下の人の冠物に候尤も旅行杯致す時に遠路の處職然と高帽を簪かし詰め參るも窮屈なれの輕便なる右の羅紗帽子を着るを多しとす左れと凡へて應對向杯にハ高帽と云へる者紳士の常装となり居る事なれの大抵身元ある人の旅行するにも別に之を箱に入れて携帶する習なり日本より初て参りたる者か郷に入てハ郷に従へト心穩やかならぬ面色し乍ら餘義なく彼の高帽を冠り買物に出掛けたるに前日ハ「エ」とか「イ、エ」とか答へ放しなりし煙草屋の亭主が今日ハ急に「ヘー旦那、エ旦那」と忽ち旦那の尊号を加へし杯の笑話ハ甚た多きとなり倫敦杯にて中以下の家の息子様おに在りてハ早く算筆に達して商館の手代にても住込み絹の高帽を冠り見度との一少年少中第一の大望に候衣服ハ先づ倫敦を以て申さハ通例半マントルモ、ニング、コートを着るとに候中にハフロック、コートを着るもあれと甚た少し尤も上衣直衣をハ黒地にシズボンにハ何か縞物を用ると尋常の取合せとする事ハマントルも

味々居士
曰以下人
知我邦人
之無識位
鳴咽欲入
遂軒日此
事歸朝人
之往々所
體之真醜

コートも同様なり上下共に眞黒なる出立ちなるも全くなきにあらぬ
と極めて稀なり附け襟の今日日本にも流行居る立襟にて襟飾の「又」の字形の
懸飾を多しとす黒色蝶形の結飾の老人用にて少壯の人へ着けぬ方なり尤
も「又」の字形の懸飾にの必ず留針を挿すへき規則なり日本にて針無しに之
を懸け歩く向も折々見受る様なるが失体なるべし西洋に在りて日本仕立
の洋服の際立ちて變体に覺るの第一上衣直衣とも異常に上長き事第二全
体に「グ」くとして身に合はざる様見ゆる事第三ズボンの下口上部と一
様に甚た廣く水夫のダン袋に似たる事第四肩行短くして白襦袢の抽口露
いれ過ぎる事等なり其他胸の明け方の大小襟の折返し之の廣狹等の時々の
流行によりて始終移變りもある由なれは強て言はざるへし唯た何分にも
丈の高く双の肩の頸の付け根より両手よかけ「」の字形に削り落したる如
き優形をなせる柔和槐偉の身体に寸分のダリヒズミなくシツクリと適な
ふたる衣服を着けさせたる事なれの其格好誠に都雅に立上りて見ゆる事
なり偶々其中に日本人が丈の低く肩の四角張りたる上に「グ」くとした

遂軒日此
嘲亦是所
不可避然
今日之士
人往々脱
多此強者
人意

るものを着て立交るときは何か無下に見劣りして我れ乍ら慚づかしき心
地するなり三四年前或る英人か日本に遊びたる時の紀行に日本の官員の
皆な借着したる様なる衣服にて云々と再三記しつけたるを見不平に堪へ
ざりしか成程西洋人の目にて遠慮なく悪口云への左もあらん歟と嘆息致
したる次第に候

◎問 日耳曼、英佛杯より些と趣の異なりたる所も多か
るへく存候如何

○答 御承知の如く日耳曼の元と許多の國々を併合して今の帝國となり
居るものなれの其舊の國々の分ちによりて一々に吟味せし千差萬別なる
べく候へ共先つ私共伯林近傍を旅行致したる通りかゝりの目を以て申せ
の伯林邊の巴里倫敦に異なるの物事都へて質素に田舎びて見ゆる事に候衣
服の半マントルよりもフロックコートを着たる方多き位に候へ共巴里杯
の如く綺麗にのなく殊に其帽子の高帽の極て希れにして丸帽の方十の八
九なり甚しきの麥藁帽子を冠りたる者さへ少からず立交りて相見へ候尤

亦是一奇

も伊太利杯にては丸帽隨分多けれども日耳曼程にのなし唯た日耳曼にて
綺麗に派出やかに見受けたるの軍人の装束なり流石の武を以て國を建つ
る處丈に軍人の装束の水際立ちて花々しく帽子杯の兜形の黒地に白磨さ
の銀鍔うち頂きの中央に獨鈷形の立物したる有様四下眩燐ばかりなり
此邊の如何なる譯にや人の丈様々にて軍人こそ皆な一様に揃ひ居れ其他
往來の人を見わたせの高さの余等より乳以上も高さあれの低さの余等の
目の下なるもあり参差不同實に甚しく候是の南北人雜りし故斯く不揃な
るとにや日耳曼中にては普西亞に限り斯く人の長短参差なる由縁のあり
候事にてや其邊の未得調へす候へ共兎に角目に立つ事に候

◎問 西洋にて食事の工合ハ如何に候や日本にて食べる
通りの西洋料理を毎日三度々々繰返すのみの事に候や
○答 西洋の朝の起き方通例餘まり早からず故に朝飯(ブレックファースト)
の大抵九時前後に候夫より一時二時之間に晝飯(ランチヨン)七時八時之間
に夕飯(ディナー)か通例に候此外に夜食(サッパー)と申すを十時頃に用る事

送軒曰我
國所謂八
時茶之類
東西同一
概亦奇

送軒曰乃
我國之茶
演

送軒曰我
國之俗大
抵朝夕爲
供養饌者

もあり又近來佛國より始まり來りたる風なりとて五時の茶と申す事大分
に流行し今の中等の家まで多く之を用ひ候是の晝飯と夕飯との間五時
に茶を飲むとにて腹加減に恰好の處なり但し是の茶を用る時の少々心
して夕飯を延のすの臺所の作畧にあり世帯持ちの婦人同士にありては是
の五時の茶の折を指して相訪問れ共に茶を飲み乍ら四方山の話なす
杯の工合尤も妙なり扱て其食事の献立の朝食が先づ鹽漬の豚を煎りつけ
たるにウデ玉子、麵包、バター、茶若くはカフヒ一等なり或は豚の代りに乾魚を
用るともあり又た胃の工合によりては茶と焼麵包、ウデ玉子、位にて肉食せ
ざる事もあり晝飯の大抵昨日の夕飯に残りたるロールズ、ビーフ(焼牛肉)の
冷たさに馬鈴薯のウデたる位を添ふるを常とし然らざれば何か魚の天麩羅
(フライド、フッシュ)でも用るかなり此外は例の麵包にバターにて是處茶なし
飲めは先づ水なり或は時としては橙皮を砂糖煮にしたる者又はヂャムと稱
しイチゴ杯の類を砂糖にて煮詰めてトロくにしたる者又はゼリーと稱
し右のヂャムを一層精製して滑らかにしたる者恰もヂャムは日本の粒餡にて

所異

ゼリーハ渡館なり等を添へ置く事あり是等は皆なバター同様各自隨意に
麵包に塗りて食へるものなり五時の茶は茶請として麵包を薄く切りたる
にバターを塗りたるをあしらふ位にて左したるものなし或は之にビスケット
を加へデラム又はゼリー杯を添るとも否とも其は臺處の所存次第なり夕飯
は一日中第一の馳走にて羹汁、ビーフステーキ、羊の切身、焼牛肉、焼鳥杯の類
を二三品と馬鈴薯、胡蘿、葡萄、蕪菁、葱、其他其時々の野菜を二三品宛添て之に
しらふ事なり麵包バターは申すまでもなし是等を食べ了はりたる處にて何
か一二品甘い物を出す例へば玉子を碎きたるに牛乳砂糖を交せて煮たる
者、林檎の身を小さく切りたるを砂糖に混じ其上に小麦の粉の衣をかけた
るを蒸焼にしたる者、小麦の粉を日本のホウロク焼様に焼き之にレモンの
酢をかけ砂糖をふりて食へる者等是の類色々あり左り乍ら是の夕飯中に
ありて常ねに第一位を占むるは焼牛肉、ローズト、ビーフとウデ、諸なり焼牛
肉は大塊の牛肉を遠火にて炙りたるものにて必しも其時に食べ盡すに
はあらず前に云へる如く残りハ仕舞置きて翌日の晝飯に用るとなり日本

遂軒曰其
注意可感

送軒曰内外
元發嬌内
豈一食特飲
食一事而
已可察者
有不可感
可不可感
可不可感
碌々居人
日大食夫
之不足怪
比之於日
本男之蓋
意者之偶
已感食而

にて申せは冷飯の儲をなし置くと同様にて不意に食事振れ舞ふべき來人
杯ありて料理の用意も十分手廻りかぬる時は懇意の間柄には是の冷牛肉
を出しても目前の間は合ふとなり即ちお茶漬と申す場合なり又馬鈴薯
のウデ方は英國自慢の鹽梅のあるもの、中にて晝も夕も善く膳の上に現
はれ出るなり純粹英人のはエスキと云ふは是の焼牛肉とウデ、諸とを兎に
角に夥しく食へる事なり英人の大食は歐羅巴の名取にて佛國杯に参りて
も英人なりと申せは何は扱置き一番に焼牛肉とウデ、諸とを山の如くに持
て來るを常とすとは英人が自身に語りて打笑ふ所なり是は男子のみなら
ず婦人にては随分の大食にて彼の世界の美人の標準に支那の足、伊太利の
髮、佛國の愛嬌、英國の唇と並らべ稱さる程唇薄く口元愛らしく生れつき乍
ら其愛らしき口元にて食へるはく、大抵の日本男子は逆も叶い染めぬ程
に候夜食は通例茶と麵包バターのみにて濟ませ候或は全く之を用ひざる者
も少からず候是は寢しな事故成るへく胃に物の溜らざる様致すよりの
事なり尤も以上は唯た中等人の處を申したるものにて貧富に應じては其

摸樣色々相變るものなる事を御合點あり度候又日曜日は大抵皆な寺院に參詣の都合もあれは是の日丈は夕飯の馳走を晝に繰上げ午後茶を飲みたる計りにて寺院に參詣し夜分歸宅したる處にて尋常飯の料理を食べると申すが多く候

◎問 近來ハ日本の茶追々輸出の途相開けたるにや承候西洋にて日本茶御見かけの事あり候や西洋常用の茶ハ如何なる工合のものに候や

○答 日本茶の少々宛る輸出あるは米國へ向ての事にて西洋にはあらず米國にては宿屋杯にて日本茶を出したる處も少からず候へ共西洋にては好事奇癖の人は知らず常人の處にては日本茶の顔さへ見かくるとなし西洋常用の茶は謂はゆる紅茶にて之に牛乳と砂糖とを混ぜて飲む事なり故に茶とさへ申せは必ず牛乳砂糖を調合せねはならぬものと心得余等は偶々日本茶を入れると杯あれは下女は毎も牛乳は如何砂糖は如何と尋ぬる之常例にて牛乳も砂糖も不要と云へは何か不審氣な面色に候茶は平均し

送軒曰此
誤非決無
理我國人
而爲是等
類似者
尤多可笑

送軒曰此
獨當茶酒
茶當茶酒
獨當茶酒
之名於今
日亦非無
理界亦非

たる處英國が一番上等の物を用る様相見候佛國は名代のカフヒー飲みにてカフヒーの佳しきの佛國第一なるべく英國より参りたる余等に向ての佛人の毎も英國でい逆も斯るカフヒーの召上られまじと自慢する位又た眞に英國の及ばぬなり左り乍ら斯くカフヒーの方を重むに用ゆる丈に茶の頗る疎まるゝ方にて物体に上等の物を用ひぬ様なり又茶世界にて下々と申すハ日耳曼なり日耳曼の聞ゆる麥酒の名所にて例の甘口にして軟らかなる一種の麥酒を醸出す處なり斯く甘口に軟らかにして酔ふと鮮さが上に其の價も他國の例にすれハ異常に賤く日本の目安を以て一寸概算したる處先つ一合一錢内外が通例なり故に血氣の少壯男子ハ勿論年寄も子供も又た婦女兒も悉く皆な麥酒を嗜み飲み水の代りにも麥酒の代りにも麥酒と一切の飲料ハ麥酒の一手に持切られたる有様なり故に家内杯にて茶を用ると云ふと極少きと見へ偶々に用るを見れハ誠に言語同斷の惡茶なり余等の宿まりたる宿屋ハ毎つも大抵其地にて二どの下らぬ家なりし故茶杯ハ皆な相應のものを出したたりしか伯林逗留中中どろよ

り下宿を致したりしに茶の悪き事、形容にも話にもならぬ程かに二口三口飲みたるのみにて置きたり然るに悪酒の一杯と雖も立どころに効験を頭痛に顯ゆすか如く僅かに二口三口の悪茶直ちに其効験を顯ゆして當夜の余等兩人共夜半を過る比まで睡ると能はざりき翌日の早々に町に往き自から茶を求め來たりしが第一茶を賣る店を見出すとすら餘程苦勞なりしなり漸くにして其店を見出し求め來りし店にて最上飛切と申せる分にてありしが矢張余等の口には上げず堪ざりし又伯林第一のカフヒー店と云へるに往きて茶を試みたりしが是も先づ飲むこそ出來たれ中々に倫敦常用の茶に及ぶべくもあらざりし尤も廣き國中の事なれ日耳曼とて我々の未だ得味ありぬ程の上茶を用ひ居る人も之れ無しとも申されねど兎に角概したる所にて日耳曼の茶を用ひぬ國と申て宜しかるべく候

◎問 西洋の芝居に參るを憚らざる程に芝居の品位高く從て役者の身分も立上りて取扱はる、様候如何

送軒日近
日論或所
主張或如
有反此何
官者如何

破々居士
日劇爲之
演劇之爲
可惡其弊
乎可惡其
又曰徒衆
吾人笑之
觀者之輕

○答 大間違に候芝居の西洋とて日本とて孰れも同じく衆人の觀せ物に致候ものにて其座主の心持は是の興行にて何卒澤山儲け度と思ひ在官作者の心持は是の書下にて何卒見物に面白がられて報酬を滿ツチり貰い度と思ひ役者の心持は何卒是の役にて見物に悦ばれ給金の昇る様爲し度と思ひ皆な歸する所の金儲けにある有様の誠に簡單無造作罪も偽もなき處にて西洋も日本も毫しも異もなく候役者の中に随分心掛宜しく材藝も研き品行も正しく士君子の間に容れらるる者も一二のなきにあらざ候へ共是の其者の心掛宜しき故の事にて役者ならずとも材藝品行兼備のりたる者何とて人に賤まるゝとあらんや是等の別段の話にて先づ概したる所の役者の正當の者との認められぬ方なり西洋の女役は女役者にて務め男役の男役者にて務め芝居の都べて男女入雜りなり左るに是の女役者なるもの恰も日本の藝妓と申す形ありて陰に種々媚を獻し嬌を呈することを耻ぢず貴族富豪杯の少年子弟の之がため身を持ちくづすの少からぬ事に候又男役者の方にありても色々不始末不身持の行迹を致すもの多く凡そ

家風正しき士君子又ハ年若かき娘ある家杯にてハ役者を近づけ候事ハ一切嚴禁と致すにて荷るめにも役者を近づけ又ハ之を出入り致させ候杯の樽相立つ事ハ尋常の良家にてハ甚だ不面目と致す事に候なり前にも申す如く元が紅粉粧ひ聲色を弄そびて衆人の觀せ物慰み物と相成候者の何とて立上がりたる身分として珍重さるゝ道理あるべきや又た王公貴人の參るを憚らぬと申すハオペラ(假りに能と譯すべし)の事にて尋常の芝居シヤター)にハ決して其様の事之れなく候尋常の芝居ハ隨分夫れ相應に卑陋の事共も少からず無論王公の覽に供ゆべき品位のものにハ之れ無く候

◎問 芝居とオペラとハ如何なる差違のある者に候やオペラハ王公貴人の見物をも忝けなふする程の品位のもの候や

○答 芝居ハ日本の芝居と同様なる事ハ前にも申去たる通りの次第尤も其仕組セリフの工合又ハ道具立の有様小屋掛りの造万等に至りてハ流石に文化の異なる丈に異なりたる處色々之れあり候へ共大体の上ハ矢張り

芝居にハ紛ぎれ隠れなく候オペラの方ハ先づ假りに日本に引當て見なハ能と申す處なり役者の舞臺にて述べ候セリフハ一々歌となり居り音な嚇し方の難しつれて之を唱ふ事なり故に悲去き處ハ沈みたる細き調子をなして文句をも長く引き怒りたる處ハ揚りたる太き調子をなして文句を短く促みかる杯聲韻に種々の加減上下ハわれども兎に角一切悠々なる歌唱を以て問答應對する事なれハ從て手足の動かし方杯仕打萬端尋常の芝居との遙かに異りたる趣をなす事に候日本の能ガセリフハ謠譜にて述べ手拍子足拍子共一種の舞の態をなすと善く相似たるものなり左れと先づ其オペラと能との相殊りたる重なる個條を舉れハオペラにハ脚色の様子によりてハ幾人もハの役者一時に舞臺に現れ出でハ彼此交々セリフを唱へ立てる事尋常の芝居に異ならず能の役者のシテとリキとに限りたるか如きに非す又た舞臺の書割飾付尤も念入にて山なれハ山城なれハ城座敷ハ座敷町中ハ町中と恰も眞物を見るか如き精巧なる道具立を用ると尋常の芝居に異ならず又た役者の扮粧衣服に至りても務めて花々しく

綺麗びやかなるを用ひ皇后一人現のれ出れの其装束につける金銀珠玉指
 指輪鎧鎧よて舞臺一面燈やさわたり又た一場の朝廷を描き出せの百官有司
 の立て連たる冠の秋の夜の星の一時に天降りたるかと怪まるる許なる杯
 都へて派出くしきと能舞臺の備古様茂なるの比に非す左れとオペラに
 演ずる世界の謡譜の如くに幾番と云へる番組こそなけれ其作者の皆な昔
 時の大家にして前に古人なく後に來者なしと申す揮振さの名人か心を凝
 したる中の又た傑作と稱せる者のみにして中々に近今の文人が一時漫然
 筆を執りたれいどて之をオペラ舞臺に演せらるるものに非す茲等が西洋
 にてオペラと芝居との大差違ある所にて芝居にの新作者新作物代々のあ
 り候へ共オペラの昔より傳へ來るの世界の外新作物の侵入するを許さず
 是れ恰も日本にて芝居にの近松並木の後に世々河竹あるを得れとも能の
 二内外二百番の上が一番を増し得ぬと同様に候のさや又脚色セリフに
 就て申候もオペラの芝居の書下の如くに卑陋なる事野鄙なる事淺蕪なる
 事淺猿しき事の類の甚た少く均しく男女の間柄を描し候にも今の俗世界

送軒曰判
 別阿者來
 歌然太明

を今の儘に寫したるものと異なり候が故、只た優にやさしくして何となく
 氣韻の高き心持致し又た同し憤懣の詞を吐くにも恨むか如く訴ふるか如
 く自然に餘味を存する杯のオペラ擅場の處と覺へられ候其品位格式の高
 さとの亦た恰も日本の能が芝居に於けると善く相似たるに候のさやオペ
 ラの斯く品格の高きものに候故是こそ王公貴人の覽に供ゆるも耻しから
 せ王公貴人も之に臨て物体の下ると申す程にのなき事に候左れ、西洋に
 ての現に宮廷附屬のオペラ舞臺ある國々少からせ徳川氏の時芝居の河原
 者と申せとお能の朝觀會同の燕にも備へ置きたると同様の譯なり又た世
 界日光とも申すへき綺麗第一を誇こる巴里の大オペラ舞臺の那翁三世が
 列國王公貴人の遊び處とせんため念に念を入れて普請したる者にして今
 に於き毎年佛國政府より幾何の補存補助費を給する所に候又た伯林にて
 王宮の直ぐ並らびに小さなオペラ舞臺あり今の維廉の常に屢々之に臨
 む由に承候是の如き次第にて王公貴人のオペラに参るとい表面に
 關すると毫も之れなく公然見物致す事に候尤も芝居とても國中第一と申

す大芝居にて平生より品格も極々上流に置かれたる者への間々王公貴人の見物もなきに候ぬは是の希有の事にて且何れかと申せの物体にも宜しからぬ方にして先づ通例の王公貴人の目を樂ましむるのオペラと定りたるものに候

◎問 日本 能の變体たる狂言と申すが如き類は西洋には之れなく候や

○答 西洋にオペラコミックと申すがあり候滑稽オペラの謂にして一寸能と狂言との如き關係を有し居候へ共是の滑稽オペラの頗る下りたるものにして新作物も勝手に出來一体の様子向き何とか鄙しく覺へ候成程セリフの大抵歌唱よて述へ身振の多く踊りの態又致す杯オペラの變体とい見受けらるれども日本の狂言の如くに名人の傑作を選びて番組を立あるが様なる品格への參ら老候先づ目前花々しく賑やかに女子供の悦やうなる工合に拵へたる者に候

◎問 日本 俳と申す様なるものは之れなく候や

碌々居士
爲吾國
狂言者
之活
須三
讀活

○答 西洋にも滑稽芝居と申すがありて尋常の芝居の前幕に一寸一ト切出し候事多くあり左れども東京にて致す俄茶番大阪にて致す俄狂言杯の如く扮粧を異様にし厭ふへき身振仕打をなし見物を強迫して無理に笑ちへくと責め立てる同様な拙劣の譯のものへの御坐なく又た故さらに嬉りが間敷事厚顔しき事を述べ立て並べ立て見物の憫笑乾笑を買はんとするが様なる身陋なるものにも御坐なく一寸見たる所にて仕打杯も何の事なくサテくと爲て了けるが如く裝束逆も別段に格外異様のものを着けたるにもあらぬと只た之を觀るうちに自然腹を捧へる様に相成るなり例へば庵卒かしき男が或る娘を尋ねたる處にて其娘の氣に叶ふ様面白がる様なる話なさんとて頻りに手を振廻りし乍ら睨り立て居るうち鈕の留め方や悪しかりけん左りのカフス(白襦袢の袖口)蒙ふせある飾りなり(スボリ)と抜けて膝下に飛散るを忙しく拾ふてテーブルの下にて娘に見へぬ様に嵌める是時其男の話の調子を變へて娘に悟られざる様との心配心急ぐ儘なかくにカフス嵌まらずして益々氣の焦燥つ工合氣焦燥に従

ひ頻に手を擗きて身体甚た穩やかならぬ格好、別れに其男が妙に變な身振を長々となすにもあらざ、只た拾ふて二三度嵌め損なふ僅々四半分が廿秒かの間の所作なれども、鈕の歪がみたるも失禮とする作法、嚴しき園にありて婦人の前にて、別して行儀を正くする習なるに、殊に是男別に詞や色にこそ出さぬ、是娘に懸想せる趣の疑ふ可らず、左るに我か属意の婦人の前にて其氣に叶へんと勉強して話す折も折とて是始末なれ、其心中の周章、狼狽推量るへく思はず、噴き出さざるを得ざるなり、是の唯た一ト幕の内の一事を擧げたるものなれども、同じく男女の間柄の模様を種子とするにも其趣の立上がりて品よきと是の如し、以て其他の事共を御類推なさるべく候、又彼の談下手の人、可笑しき事柄を談すに、己れ先づ啞々と自ら笑ひ乍ら談しかざれども、談したる處にて聽者には存外可笑しくなく、又た上手の人、地味に徐々と談せども、聽く者の願を解す杯の相違、乃ち日本の俄と西洋の滑稽芝居との模様異なる所と覺へられ候故に、第一に品の上下第二に技の功拙と是の二ツの相違の彼此の間に存することを御合點なさる

可く候

◎問 芝居オペラ等惣体小屋掛り舞臺機敷杯の有様如何に候や

碌々居士
曰三四之
形容
得妙矣

○答 小屋掛りの大体よりお話申せ、四角なるもあり三角なるもあり、外廊の形、其塙處の廣狹、近旁の家、建込方によりて一定せ、候舞臺機敷の位置の概略皆な一定にて、舞臺の正面に「一」の字形に横たへり、機敷の舞臺の雨端の付け根より半月の形を成して、連なり對し居候、茲に絃極めて短く、弓幹極めて長さ弓ありと假定むべし、絃の即ち舞臺にて弓幹の即ち機敷なり、舞臺の日本の様に幅廣くして、奥行狭く、矩冊を横にしたる如きと異が、幅と奥行と相似て、恰も式紙を置きたるか如くに候、機敷の四層乃至六七層も重なりて、段々になり居り、恰も柵の如くに候、是の半月形の機敷と「一」の字形の舞臺との間の廣く平にて、日本にて申す平土間の處に當り、申候一寸見たる所にて、第一に日本と相違するの舞臺に花道の無き事と、嚙方の平土間の最前(大阪邊にて、咳附と稱する處)に控居る事となり、平土間の中央よ

り後ろの半分ハピットストールとて極賤すき處なれ共其前の半分ハストールとて甚だ貴き處なり是のストールの前即ち舞臺の床の付け根の處を一區畫丈け仕切て離方の茲に見物を背にし舞臺に向ふて陣取れり尤も地の堀凹ばめありて離方の頭ハ皆な床よりも低くなる様になしあれハ見物の目障りになる事ハなけれ共ストールの最前に坐せる見物の最後に坐せる離方へ手の届くまでの近くに相接せるとの接し居候

◎問 離し方の外に床の淨瑠璃又は呼出しの蔭歌杯申す類は之れなく候や

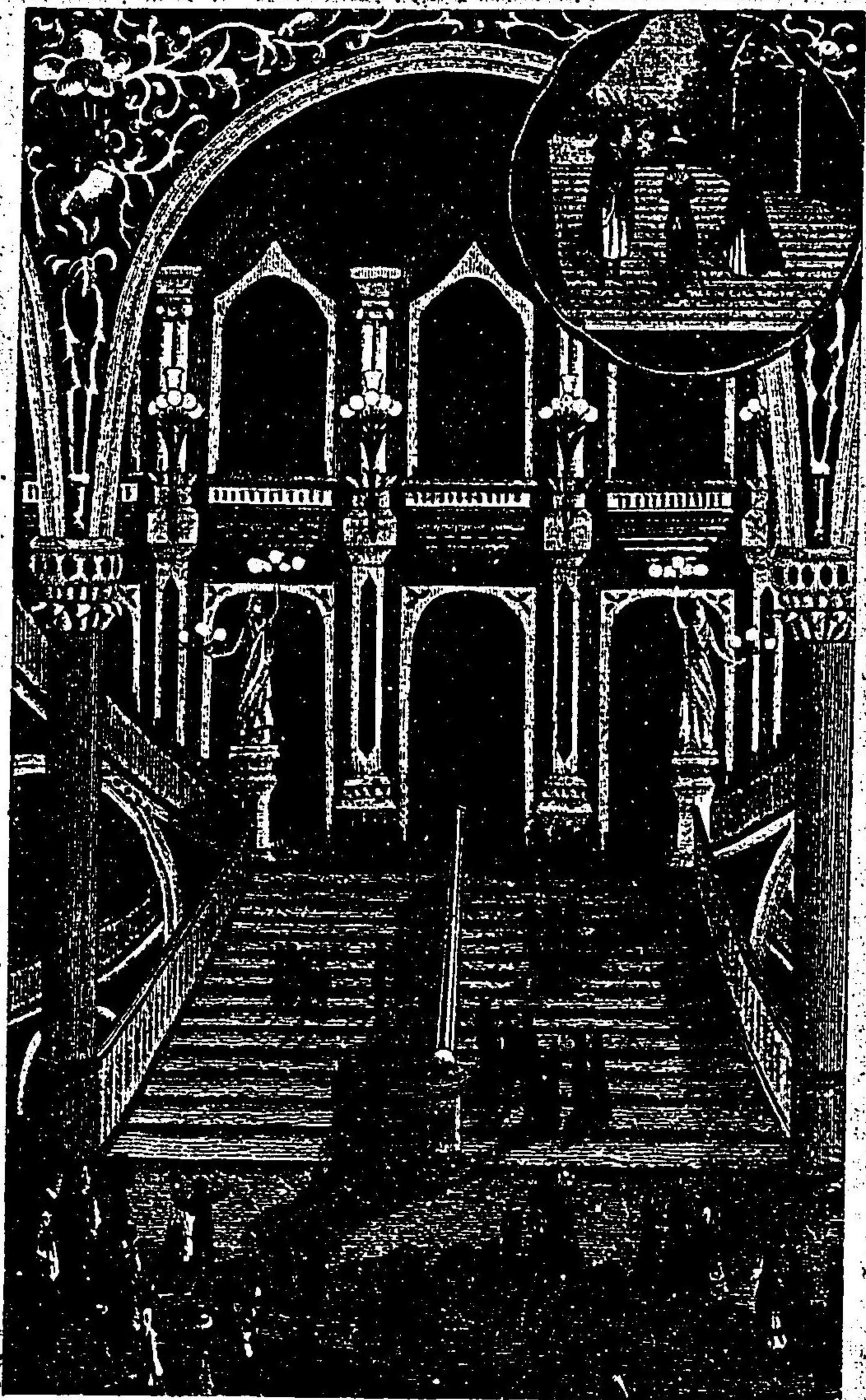
○答 左様之れなく候

◎問 然らば唯た樂器にて離立候のみに候や

○答 左様

◎問 然らば前面に坐せる離方一と組の外は何もなく候や

○答 否時ありて幽かに悠遠なる響の風々として地底より湧出るが如く



演劇場内之景圖

聞こゆるとあり是時前面の囃方の一同に手を斂めて静まり居候是れ床下
か或ハ舞臺の背にて奏る事と存せられ候但し是ハ常に有る事に之れな
く候

◎問 幕の工合は如何に候や西洋にても矢張最負連より
幕を送る杯の事あり候や

○答 幕ハ皆な釣上げ釣下ろす事に候西洋の舞臺ハ天井甚だ高くして舞
臺の幅ハ割合に廣からむ故に釣上げ釣下ろす方便宜にて曳く方の不便に
候尤も曳き幕を用ひざるハ必しも舞臺の幅に關する譯に候ハねど打見
たる所の体裁より申すも左様に候又幕ハ其座附の幕一張あるのみにて他
より贈る杯の事の之れなく候

◎問 然らば役者杯最負なる者は如何にして己れの最負
を示し候や

○答 示すにも及ばぬ事に候最負なれの履々其芝居を見物に參るべく候
又た強て其意を先方に通じ度ハ手紙を遣はすも宜し公衆に觸れ度ハ新聞

に投書して其旨を吹聴するも宜し尤も貴族富豪の子弟が愛顧の女役者を
招聘する杯へ又た別種の事柄に候倫敦巴里杯にて所作事の終りたる處に
て見物より薬玉の如くに囀るめ飾りたる花を即座に其女役者に贈りたる
を見し事の折々之れあり候是等か眞に花を持たせたる者とも申すべき歟
但し是連大芝居にてハ餘り見掛けたる事御坐なく候又男役者の貫ひしを
も見掛けたる事の御座なく候

◎問 近來は東京も芝居小屋段々宜敷相成り候新富座千
歳座杯は随分美事なるものに候はどや西洋と比較致した
る所にて如何に御考相成候や

送軒曰立
隔之其其
亦宜乎不

○答 誠に残念乍ら比較にも割合にも掛り申さぞ候餘りに懸隔方の甚敷
候故何よりお話し致さんかと立迷候先づ其方より御尋下さらハ之に應し
て御答申すべく候

◎問 棧敷には矢張ケツトでも敷きあり候や

○答 敷物を敷きたりと申すより一切錦日本にて云ハハを以て纏ふたり

送軒曰立
隔之其其
亦宜乎不

と申す方適當なるべく候大抵赤色の極厚き毛氈を以て一切包み廻ハし柱
も凭欄も椅子も悉皆同様同色なり何處に觸ハるもフクフクとしてシナヤ
カなる事何か手近く嘘へて申さハ左様く先づ別製の人力車の内張りの
如きものと御承知あらハ捷徑なるべく候又芝居によりてハ上等の處にハ
綾の幔幕を垂れたるも之れあり候

◎問 平土間は如何に候や

○答 棧敷の外ハ皆な一人腰掛の椅子を平一面に並べたるものに候敷の
方ハ素より一ト間々々仕切ありて其中に備へある椅子ハ一個宛何處へ
なりとも移し動かすと自在に候へ共平土間杯の椅子ハ一人宛に分別こそ
致しあれ跟脚ハ一聯一串にて作り付けに候故に平土間に並び居候者共を
上より眺むるときハ小學校の子供等か教場に坐ハり居る時の工合ハ似た
る者と御會得なさるべく候

◎問 其平土間の椅子は少しは綺麗に候や

○答 少し處ハ御坐なく異常に綺麗に候蒲團ハ皆なバ子入り脇掛ハ皆

な小枕付きにて其切地の極厚き毛氈又の綾の類に御座候

◎問 日本にて土間の前を低くし後を高くし惣体に勾排と着けたるは見物に便利なる仕組に候何れ西洋にては斯く致しあると存候如何

○答 左様に候西洋にては土間の外棧敷の區畫の致方にも氣の利きたる事を致居候御承知の如く日本にては棧敷の間の仕切の只た低き馬堰板を入れたるのみの事に候へ共西洋の棧敷の悉皆別室の如くに隔て了りたる者に候故若し日本の通りに舞臺と平行線に仕切りては少し後邊に坐入り候ものゝ様々の壁に障へられて馬車の馬同様に己れの對面を一直線に視るより外何も視能ぬ事と相ひなるべし故に之を避くるため東西兩側の棧敷の皆な舞臺に向ふて斜めに仕切りあり候恰も矢の羽が兩側より鐵の方に斜めに向ひ居候と同様の狀に候是等も初めて見たる私共の目には異様に覺へたる一個條に候

送軒曰立
見其注意
之處

◎問 燈火の工合は如何に候や

遊軒曰非
僅々照燭
以誇不
夜城之比

○答 燈火の電氣瓦斯等種々交じへ用ひ候通例小屋の中央に天井より下げある大燈火などの數千誇張の數にのらぞの蠟燭形の瓦斯火(瓦斯の火)口を蠟燭の形に致したる者が團々と相聚りて大きく椎實狀に相成り居り其間に球様の電氣燈を交じへ挿さみたる工合黄色白色の火相映して陸離彩を成し明かるき事も甚だ明かるけれの美しくしき事亦た極て美しく候是の椎實狀の大燈火の建物全体の廣狹によりて無論大小のあるとに候得共大きな分にて其最も太とき處の直徑二間以上あり候

◎問 舞臺廻はりの燈火は如何

○答 尤も妙を覺候の舞臺の前端即ち雨落の處の燈火に候雨落の處を少し斜に前の端の方框内まで切下げて是の窪處に燈火を仰むけ置くとに候故に明るみの十分舞臺に照りわたり乍ら見物の目には框が障となりて直接に燈火の光体を認むるとなし左れの蠟燭の如く見物に眼花となく又たブリキの蔽をつけたるが如く目ざわりとも相成らぬ事に候一寸したる事乍ら氣の利きたるものに候はずや

◎問 舞臺の飾付ハ如何に候や

○答 斯く申してハ何か些と繪畫論の領分に踏み込む様に候へ共全体繪畫の巧拙の差ハ無論の事として扱置くも西洋の繪畫ハ彩色に富み居候ゆへ同じ雲の色を描き候にも崑の彩を點し候にも如何にも眞物を面のあたりに見る様に覺へ候加るに例の燈火の使ひ方甚だ巧みにして借とへハ森谷の場を現出し候ときハ前の方に群樹交錯の狀を描き樹身樹柯樹葉の外をハ皆悉切り抜き恰も眞物の如くにせるを飾付け其背後に又た種々木石を掛置しある上に天井より斜に緑色の燈火一線を差して是の群樹と背後の木石との間の空隙を照らすか故恰も太陽の光の鬱茂せる枝々をくぐりて蒼然の色を成せるか如くに見ゆる事に候又た其道具ハ一切上に釣上げるか下に線下ろすかの二ツにて其仕掛も至て整ひ居候故幕の間に槌釘相觸るゝ響丁々として常に人耳を亂たす様の騒動之れなきハ亦た快き事に候

◎問 尙ほ所作事等に付き彼地と我國との芝居の異同ハ

如何

○答 我國にて所作事とか稱する妙なる身振りハ彼方よてハ幾んど之なきものなり畢竟なるに所作事物語杯ハ傍らより意味を説明する淨瑠璃に合せて出來したるものなるべければ淨瑠璃なき彼國に所作事なきも亦た當然の次第なるべし初め彼地の風俗に慣れざる問ハ芝居の所作も尋常人の動作も差して違ふことなく彼地の芝居ハ言語動作與もに幾んど平常の有様に同じと思ひ居たることなりしが少しく土地慣れて其の一般の言語動作を呑込むに付け始めて芝居ハ矢張り芝居にて其の言語動作ハ又た一種の振合あり世間平常の言語動作とハ大なる相違あることを知るを得たり何れの國も芝居ハ芝居にて子供だましの如きものなれば普通一般の言語動作にてハ面白からず隨つて是非とも一種格段なる振合を生せねばならぬ筈なり去り乍ら若し之れを日本の芝居の言語動作か尋常一般の言語動作に對する懸隔に比すれば彼地の方ハ尙ほ兩者の間の相ひ近き方なり彼地にてハ芝居風の身振聲色とて笑ひ評する詞に用る程のことなり如

何に眞に近く見ゆればとて芝居の自から一種の芝居風あるものなり
 但だ我に在て彼になきもの足拍子の一事なり則ち拍子木にて一と足二
 た足の足に合せカタ／＼と板を敲く一事なり斯る事の彼地の芝居にては
 一向に之を見しことなし我が右の拍子木に慣れし目を以て彼地の芝居を
 見る時の大に拍子抜けして面白からぬことあり然れば日本にては右の
 拍子木も存し用ひて可なるべき場合も之あるべし就中立廻りとか唱へて
 争闘を爲す場合杯に力足の拍子なくて面白からざる芝居學に拙き余等
 の考よりするも場合に因ては矢張り拍子木の離しある方然るべく又た斯
 る離しの用法あるも進歩の一に算ふべきものなるべしと思ひる昇平の長
 く續く一般に文學の事をば進歩せしむるものなるが徳川氏三百年の昇
 平の芝居の進歩に非常なる助を與へたるものなり幕府三百年の治世中
 何物か最も抄りしやと問へば蓋し芝居程著しく進歩改良せるものあり
 さるべし然れば今日我國に用ふる所のもの一概に不都合なるものあり
 への非すと知るべし

送軒曰往我
 國演劇者
 一而遠人
 類其見真
 者甚多可
 謂可感中

日著者其
 是而論非
 乎抱使非
 可抱鳴者
 却可感中
 矣在感中

立廻りとか稱へて斬り合組み合杯の事を比較するに我方の飾り多く彼方
 の飾り少く彼の眞に近く我の如何にも餘りにウツ／＼敷思ひるゝなり例
 せば彼方にては劍を抜いて打ち合ふも二た打ち三打ちにて直ちに勝敗の
 定ること多きに我方にてはナカ／＼二た打ち三打ちのことに非ざるも
 のの五十合百合にも至ること少なからず然れば孰れが眞に近きと問へば
 彼にして我に非ず然れども芝居の元と是れ芝居なれば若し芝居として眺
 めんにハ肝腎なる人物が只二た打ち三打ちにて勝負を定むるの餘り本意
 なく見へて面白からぬ場合もあり然れば我方の立合ひの間の長さも亦た
 一興と云ふべし兎に角芝居の芝居にて慰み物なれば眞偽を問ふに及ばざ
 りた場合に因て面白ければそれにて宜し餘り猥褻の事少き様注意し又
 た惨酷の事なき様に慎むならば先づ議論の其處までなり其れより以て往
 只だ見物人の興に入るを勉むれば最早や芝居の役目の濟みたるものなり
 何も六ヶ敷く云ふにも及ばざるべし然れば立合ひの長短も飾り多きも飾
 り少きも兎に角に見物人の目に面白さが然るべき歟

◎問 彼地の芝居にて慘酷の所作をハ慎んで避るとの事ハ如何

○答 彼方にてハ上等の芝居程慘酷の事をハ甚だ慎み之を見物人の目に現ハさるなり例せハ然るべき人物が打合て一方ハ小腹を突かるハ体ありとせんに其の突れたる方ハタチくくどヨロメキテ傍の柱壁杯にも寄り掛る拍子にバタリと倒れ其の柱の蔭になりて最早や姿ハ見へぬなり苦痛し乍ら死する有様杯ハ多く見物人ハ觀せぬことなり又た餘義なく血の出でしを現ハす時にても只白シャツ杯に一二點の血痕を示す迄なり從來日本の芝居にて最後の時赤色の眞綿杯が腰の邊より垂れ下り又た其口中よりハ血を噴くなどに比すれば實に雲泥の相違あるなり總体に彼地の社會ハ行儀正しく猥褻慘酷のことハ言語にさへ慎しむ程の世の中なれハ芝居杯も斯くあるべきハ怪しむに足らざ又た日本の社會の都て無作法不行儀にして士君子と雖も衆人廣座の中にて直ちに歌舞の物語りを爲す等の不取締りなる世の中にてハ芝居も夫れ相應に無作法千萬なること

遂軒曰 如不處而 之秘訣事 世不萬亦 無不劇然 然則不失 定觀復其 足觀也 我邦劇然 之狀一野 暴露呈々 無敢所出 竟其所出 皆者其妙 是者其妙

日同感々 味々居士

多きも亦た餘義なき次第なり但た後來ハ今少し改良したきものと思ハるゝなり又た彼の芝居にハ日本にて云ハハ花道なるものなし只た舞臺の左右なる兩角の口より出入を爲すのみなり日本の芝居學者中にハ花道の事に付て大議論ありとか聞しが右の花道も一種の物にて是も徳川氏昇平中に我芝居の進歩したる一證なるへし遠方さして去る有様或ハ遠方より來る有様杯形容するにハ此の花道の有ると無さとの大なる興味の淺深あることなり然れハ我々の不巧者ながら他日然るべき大なる劇場の出來することあるも此の花道の日本の芝居に一種固有の物として存し置くこそ却て外客などの目にハ賞美せらるゝことなるべしと思ふ

◎問 彼地の役者舞臺等の有様は如何

○答 日本にてハ女ハ女のみ一座男ハ男のみ一座にて一座を興行することなれども彼地にてハ一と芝居に男女混淆して男役ハ男役ハ女にて之を務むる故人情を寫すにハ甚だ都合好きこと多し去り乍ら女役者と云ハる者の随分世間の風儀を亂ることにて女役者の爲めにハ種々の事を惹起

遂軒曰一利得遂
利得遂軒曰一
所論不男故勢
今各男女
其優劣之利
害相半曰
利相半曰
已爲利害
知半利害
用女半利害
爲勝也
日男居士
不於風
況於混
者之混
不乎混
設不混
可混

遂軒曰亦
泥是地雲

したること彼地に澤山之あるなり然かし是も強て答ひべきことにも
非ざるべま若ま後來我國の居芝に男女を打混ずること爲せばそれにて
も宜しかるべし年老ひたる男か如何に粧ふとも女の身振りを爲す處杯の
餘り見好きものに非ず歟れと云へば女の役の女役者の勤むること與ある
べま其初めの我國にては男女打雜りの由なりしが女役者の風儀を亂るこ
と甚しきより幕府の爲に禁制せられ遂に今日の如く男子のみの世界とい
變じたりと云へり左もありしならんと思へる
何事に限らま芝居の世界にて彼地の方便れること多き中にも先づ劇場の
建築結構の綺麗なるの勿論其の舞臺道具立萬端の行届きたるの又更らに
美事なり日本の畫に比すれば西洋風の油繪の殊に眞に迫るの摸稜あるの
世人の知る所なるが其の油繪にて妙技を盡きて描きたるもの多ければ具
物よりも一層場合宜しく思へるなり一寸見受る所にては家屋杯の如き
もの其の骨組の木或は鐵にして其の上を切地にて張り之に油繪にて壁
の壁の如く彫刻物の彫刻物の如く描きたるもの多し又た樹木杯の其の幹

だけの眞物を用ひ其の枝葉を切地に描きソを切り抜きて着たるもの多
し是の造作もなきことながら大に趣を添ゆるものにて粗末千万なる造り
細工の枝葉が見苦しき迄に幹にブラ下かり居る杯に比すれば寧ろ枝葉を
描きたるものを切り抜きて着けある方甚た視勝さりせるなり
道具立の變る時の仕掛の色々あり或は左右にキリ／＼と開きて改むるも
のあり又は都て空中に引揚げて景色を改むるものもあり蓋し是等の仕掛
の其建物の大小性質にも關することなるべし
嘗て一たび廣狹を記載するに方り彼地の大なる芝居にては其の正面の
廣さの新富座の劇場程あるまじと記し置きしが今日より考ふれば大なる
誤りにて彼地の物の何に因らま規模宏大なるが故に狭しと見へたるもの
も其の實の甚だ廣きことにて歸朝後篇と彼我の事物を考合し比較し直す
時の最初の想像と相違すること少からま舞臺の如きも則ち其一にて少し
大なる舞臺の正面の廣さのナカ／＼新富座杯よりも遙かに廣きことなる
べしと思へる眞物に違はぬ二頭率さの大馬車或は荷車杯がサツ／＼と何

の障りもなく舞臺を往來するを見れば餘程廣大なるものなり

◎問 彼の芝居の馬杯は如何又た其他の事にて我との異同、如何

送軒曰非
馬脚忽露
者之比阿
々々

○答 馬にても車にても通例の先づ眞物を用ひざることなし馬杯も定め
て善く馴らしあるものと見へたり去り乍ら孰れの芝居にても舞臺に接近
して見る時の其舞臺の上の穢きに驚きたり他の部分の先づ飾り粧ふか
故に左程にもあらされども只た舞臺の上のみは始んど地面同様の有様な
り蓋し我方にては舞臺の上に坐りもなせぬ腕つきもなす次第なるか爲
に自から之に注意して光澤あるまでに拂拭も行届き居る譯なれども彼方
にては元より斯る事なきが故に斯くの汚れ居るものなるへし然れども兎
に角に他の万事に比較して其の穢なきに驚きたり
佛蘭西伊太利の境にて千戸計りの小都邑に宿せしことありしが別に知人
とてもなく客窓蕭索甚た無聊に堪へせ折しも宿屋の主人の話に今夜の芝
居興行あることなれば田舎芝居を一見するも面白からんとて心に輕

送軒曰是
等出表
之在表
國之往々
有之

蔑しながら其の場所にと赴きたり云の、一山村にて勿論繁華の地と稱す
る處にもあらぬなれども尙は其の舞臺のナカノくに美事なるものにして
新宮座杯の企て及ぶへき所に非ず其他の事も万端之に應じて一切整ひ居
たりしに誠に案外せる程なりしか但た田舎廻の役者のことなれば其所作
の感服せざることも多かりしか中にも下程古も不十分なるか故往々セリフ
を忘るものと見へ傍らより之を教ふる者附き添ひ居ることなり一寸正面
より見たる所の舞臺框の中央の處に恰も日本にて子供を寝かすに用ふる
母衣敷帳と云へる者の如き黒く圓く西瓜を半截して伏せたる形の蒲鉾な
りの物あり其高さ二尺計り廣さ三四尺もあるべき乎此の蒲鉾なりの物の
見物人に向へる方の圓くなりて役者に面せる方の切り落しになり居ると
見へ彼のセリフを教ふる者の此の蔭より口上を述べると役者の之を口に移
して舞臺よて動くなり尤も伊太利語なれば余に其義の一々解し難かり
しかども兎に角に女役者杯が何かセリフを述べへき順序の時に先づ例の
蒲鉾なりの中より低音にて物言ふ聲漏れ役者の之を辿りて述ふるさま頗

選軒曰其
減然乎

る見苦しく覺へたり去り乍ら日本の黒坊が背後に付き居るに比すれば或
の寧ろ此の方を優れりとすべき乎後ちに聞合すれば舞臺の上に右の蒲鉾
なりの物あるの佛國にての珍らしからぬことなりと云へり然れども倫敦
杯にての通例の芝居にて一向見掛けざる事共なりしなり

◎問 一体の芝居の趣向、彼地と日本との異同如何

○答 芝居の種類の数多き故に其の趣向筋書を比較するも亦た甚だ容易
ならざる嘗て粗は申せし如く芝居の種類にも色々あり其の言語都て歌を以
て演ること日本の能の如きものをオメラと名付く又た言語其他のセリフ
の歌の如くせずして通常の辭の如くするものをシエターと稱す右二派に
属するものにして種類の異なるもの甚だ多し又た芝居のシエターの中にも
純正のものと滑稽のものとあり左れは日本にて演ずる芝居の種類は彼地
の種類多きに及りざるものと云ふべし

◎問 あらゆる種類の芝居を籠め其の中にて最も面白く
思はれたる芝居の有様を承りたし

○答 余等の甚だ芝居の事に拙く日本にて三四年に一度見物するかせ
ぬの人物なれば甚だ不案内ながら最も短くして最も面白かりしと感じた
るは左の如き筋の芝居なり尤も左の芝居は只た一と幕ものにて有名な
る女優某の爲に當時英國にて有名なる作者ギルベルドか之を組立しもの
と由今其の大要を畧記せん但し其の筋は都て歐洲の中世の有様にて佛國
に起りたる事柄と知る可し

幕開く時の美事なる上等社會の住居にて宏大なる一と間あり椅子、卓子、
勿論窓掛其外一切の飾り付けの幾んど貴族かとも思はるゝ程にて何不
由なき暮しと見へたり偕て奥より一個の美人盛飾して出で来る此の女子
の當家の主人にて當時世に時めきて持てはやさるゝ有名なる女優なり衣
裳より腕輪、髪飾りに至る迄一切善を盡し美を極め金にあかして飾り立たる
姿なり此時又た一人の女子出て來り一二の問答あり此女子の主人の妹に
て姉上の技藝の世人に賞翫さるゝより何不足なく暮すにかへて加へて毎
夜の如く當佛國の許多の貴公子此家に來遊せらるゝ此の上なき榮華

と云ふべし云々との口上あり其時主人なる女優の「好き事もあり悪き事も
あり殊に數多き貴公子の中も御身の知らるゝ彼の貴族某氏の如きの我身
に定まれる夫あるを知り乍ら情を通せんとして附き纏ふ蒼蠅さよ去り乍
ら若し一旦に之を拒絶せし盛威ある彼の悪貴族の忽ちに我身に仇し不幸
を來すも料られぬと今日迄の毎夜の如く其の機嫌を損せざる様操りて過
するものゝ吾が心中の苦しみの御身も推量し玉ふべし餘處外より之を見
ば吾が身の上を榮華なりと羨む者もあるべけれど裏と表の相違ありて
苦しきことも多かるものと思ひ獨り嘆息す其時妹の「今夜も亦た來賓
あるべし坐敷の用意を爲し置かんと二階へ昇る暫くして引違へに入來る
の女優の夫某なり其妻なる女優に向ひ御身も定めて疾く知りつらんが今
朝些かの事よりして衆人稠座の其中にて彼の御身に戀慕する悪貴族の爲
め言ふ可からざる非常の辱めを受けたれの我の即座に對手を打果し耻を
雪んとも思ひしか對手の名に負ふ貴族にて左右従者も多ければ逆も本意
を達する能はじ若かじ機會を待たんにいと無念なから涙を吞て歸りしぞ

遂軒曰叙
來者則已
一覽而已
然其況已
出如目擊
可視之妙不

渠と一とたひ決闘して此怨を露らさきての我の以後世間に立つべき面目
なし今は早や死を決して彼人を打果さんと覺悟せり思ひ合たる二人が中
も早や哀別の時至れりと覺ゆるぞかしとて涙を含み物語れば之を聞くよ
り女優の打發れて力なく考へ居る此時其の夫の復た女優に向ひ察する所
今夜も亦た彼の悪貴族の此家に来り遊ぶべし然れば御身何卒して我に
引合せ呉れよ我より決闘の所望を爲さん只た肝要なるの渠が多數の従者
をして決闘の場所に近つかしめすして只た兩人雌雄を決するにあり吾が
手續の勝ぐれずとも人雜せむせず戦ひの本意を達する事もやあらん此義
を御身能くすべき歎と聞いて女優の思ひ込みたる氣色にて左様なる事の
ありと早く知らば無事に計らふ手段もあるべきに今となりての最早や詮
なし止め參らすともよも聽き入れ玉ふまじ左らば潔よく勝負を試み死生
の運を天に任せ玉へ我身も畢生の力を盡し何とか思慮を運らして彼の貴
族の従者をば其の主人より引離す様に工夫せん」と意を決して答ふるうち
にも愁然たる有様の面に顯れて掩ふ可らき見ゆ

碌々居士
此數節
以活眼
而活讀

遂軒曰此
一節尤見
歐州文
之程度
反復了
明者去
明者去

碌々居士
曰可以
紳以畫

遂軒曰我
邦人未明
程度未進
往野見是

◎問 日本より西洋に御出の上にて第一に目と駭るがす

程に目立ち候ハ何等の事柄に候や

○答 先つ人事に就て申さば英國杯の世間の行儀一般によく行届き萬端の事一切に規則にて律りた程に作法整なひたるに候右ハ日本杯と較ぶれハ實に際つきて目立ち候程の相違之あり例へハ他人に不沙汰見舞をなすが如きも自づから一定の時間ありて至急の用事にあらざれハ通例ハ午後二時半より四時半迄の間に限るとに候左れハ故なきに早朝或ハ夜分或ハ食事頃に人を訪問ねて先方を煩らハす如き事ハ決して之れなく候又婦人杯の前にてハ又た別して遠慮強く少しにても醜なき事穢なき事に涉たる詞杯ハ士君子の決して用ひざるに候例へハ裸體と申詞を出だすも最早既に不作法者の如く見へ口に出すを憚かる事に候是の一事にて其他ハ推して知るべし又少し醜なき話に及ばんとすれハ其座にある婦人ハ聽かぬ真似し又ハ其話を外事に轉するか如き程の事に候又殊に感心なるハ食事の節杯臂と臂と相接する位に並び居るも隣席の人に飲食せる唇の音の

聞へぬ様に慎しむの一事是れなり始めて日本より赴む者ハ是の事に氣つかず多くのピチャムシヤムシヤと大なる聲を立て甚だ卑陋野蠻に見ゆるとなり是の一事ハ最も著るしきとにて日本に歸る後他に招かれ或ハ同席にて食する内にて人困りてハ二三間隔りても聞ゆべき程にゾロムシヤムシヤと犬猫の食ふ如き大なる音を出すも希れならざるが如く相見候是等の飲食の中に著しき野卑の相を現しすものなり左れハ外國人杯と共に共に會食する時にハ是の一事ハ少しく注意せねハ實に彼等に不行為不作法を見下げらるハの恐れあるべし内地雜居も最早遠からざるにハ外國人との交際も必らず廣く始まるべきとなれば些末のとながら言の序に御話し致し置く事に候

又日本人に極めて多くして西洋にてハ餘り見受けざる一事ハ頻りに懷中より時計を出して見ると是れなり凡そ他人に招かれ饗宴に赴くとさハ主人に對して其待遇の手厚さため心面白く思ハせ長坐爲すと云ふやうにす

風之痕跡
一語之下
不覺滿背
滴漉

四十四

るが禮儀に適ふ譯なり然るに何か忙がし氣に懷中より時計を出して眺む
るの甚だ失禮千萬の譯に候はずや定まれる宴會の席杯にて人の前をも憚
からず時計を出して公然と眺める者杯の殆ど見掛けざるに候然るに日
本にての上等の士君子の地位を有ちながら斯ることを爲すものも稀に見
受るが如し是の時計を所持する風俗の日本に入りしと猶は淺きが故に自
然是に付ての行儀も定まらぬとに考へらる其他英國杯にての士君子の間
の談話に下掛りたる醜なき話と云ふもの殆んど其口頭より洩す者なき
位に候尤も斯る下掛りたる話をなさぬならぬ餘義なき場合あるときハ
兎に角及ぶ限りの皆な慎みて之を避るに候然るに日本にての士君子の
間にも不遠慮に故さらしに下掛りたる醜なき話を衆人廣座の中にて喋々と
聲高く述へ立て、愧る色のなき向も往々之れあるやう見受け候是等も甚
た目立ち候やうに覺へらる當時の惡疫流行の際なれハ別て其邊の話多き
やハ知らされとも話さず濟むべきとなれハ話さぬ方宜し又話すにも話し
様のあるべきと存候

遂軒曰是
亦純然士
君子之風
可欽

又其内行のいざ知らず外面儀式の上より云へハ西洋にての士君子婦人の
間に於てハ娼妓杯と申すとの一切之を口頭に出す者なく之を語るさへ恥
辱なりとする程にてある世の中なるに日本ハ大に是と異ハ偶々籠絡杯す
る者の中にも輸出品の内にて華魁とか唱ふる者の姿杯を籠出し或ハ描き
出し之を美術中の一つの飾同様になし置く者ありて西洋の婦人より之ハ
如何なる種類の婦人なるやとの問を受け之を娼妓と答へハ國の恥辱にて
娼妓の如き者を斯く品物に迄描付け或ハ籠付けるならハ其風俗の紊れ儀
式の崩れ居る國なりと見下けらるゝとの愧かしさに遂に之を娼妓なりと
答ゆると出來ずして是ハ日本古代の然るべき婦人なりと胡麻化したる人
もある程のとに候
右ハ中等一と通りの行儀を云ふものにて夫れすらも猶は斯くの如し上等
社會の人に至りてハ尙更らるとに候唯ハ其下等社會のものにハ随分不行
儀不作法をなす者も少くなからざるを乍ら夫れすらも日本に比較する時
ハ異常に割合の少くなさるとに如何なる下賤の者と雖も其仲間の婦人に

四十五

送軒曰我邦人宜讀之而猛省

送軒曰一物之知可以推知其他

殊々居士曰問得妙矣

送軒曰是等之處只是外無復他言

向ひ下掛りたる話杯をなすもの殆んどなき程に憚り居候尤も西洋逆も其行儀の上への緩急の差別ありて其都びたるを云へば佛國の萬事英國に立ちこへ英國の方の甚た鄙びて見ゆるに候左り乍ら又事に因て佛國の方の甚た鄙びなるともあり婦人杯の行儀に至りては上等の其摸範を佛國に取るとなから中等以下の行儀に至りては却て英國の方嚴重なりとの評判に候又日耳曼に至れり其行儀も少し緩かにて婦人の前にて遠慮するとも英國に比すれり稍や輕き方なりと見ゆる然るも其行儀よきとの中々に日本の比にあらざ例への男子に向ふては或の帽を脱がずして禮をなす場合もあれども婦人に向ふて禮をなすに一切必ず其帽を脱ぐが如き類に候

英國の他國に比して一層行儀の六ヶ敷處柄にて嘗て或人の話にも英國にて下女に向てさへ先方が女なるが故に便所の所在を問ひかねる心地すと聞きたれ共當初の内よも夫れ程のよあるまじと思ひ居しに少しく土地馴るゝに従ひ實に其言の虚ならざるを知り候如何にも英國の摸様に

て下女に向てさへ下掛りたる場所の所在を問ひ難く又下女が餘義なく之に返答する場合に其顔を赧らめて窺やかに知らせ呉れる程の有様に候左れり其他の事も亦御推量なさるべく候

◎問 甚た卑陋なる事を尋致す様なれと便所を問ふと下女にさへも遠慮致さねはならぬ様にては場合によりては随分御困却の事も多かるべく候

○答 故に先つ大抵の自分の機轉にて何處かと探がし出す事に候家の内なれり間取建方何れも凡そ相似居るかゆる大抵見當相付候又芝居小屋杯にては凡そ見當の邊を獨りにて彷徨ひ居れり番附賣りの女杯が先方より氣を利かま黙して指ざし教へ呉候又ステーションとか宿屋とかにては左様に長らく彷徨居る暇もなき事多く候ゆる其處に居る鐵道の役人又ハ部屋附の小使杯の耳の處に行き内所にて殿達セントルメンの何處なりやと問ふとに候是ハ男子の便所にハ皆な殿達との一語を記したる標札掲げある故に候尤も斯く申えて問ひたれりとして其問題が既に卑陋なる事柄

去仔有我等而得而得中邦服遂
細用邦記己只色揚其或部之軒
閱的人事故僅者一有人制曰衣
要尤在是々然有班知士我

なるか故到底行儀宜しき方への之れなく候へ共先づ旅行中の事急卒中の事として相互に其不作法を恕する丈の事に候

◎問 西洋にて吉事凶事の時の衣服の様子と何度候

○答 吉事の婚儀を以て大祝と致候へ先づ婚儀の装束より御話致すべく候男子の方の皆な通例の燕尾服なり女子の方も亦た尋常の禮服なれども是の皆な白き色の絹を用ゆ是の點のよく日本に似よりたりとも申すべし且つ婚儀の時の女子の必ず被を頭より蒙ふり首の周邊に長く寛くシホく垂るゝなり是の被も矢張白き色の極薄き絹にて紗の如き類のものなり打かつぎたる所にて顔の透とはりて見ゆる工合甚た品の宜しきものなり是も亦た善く日本の花嫁の綿帽子と相似たるものと云ふへし又花嫁に必ず侍女(ブライドメイド)と申すが一名或の数名相添て其式に参る事なるか是の皆な成る可く其親族中の娘の年頃十三四より五六の間なるを擇びて之に仕立つるが定りなり是も亦た支那諸侯の婚儀に同姓の國の姪姉を以て花嫁の媵とすると申すに相似たる趣なり婚儀の時に限りて

花嫁の被を蒙りたるのみにて帽子を冠らず但た橙の花と葉とを綺麗に取合したるを髪に挿み置く事に候尤も是の花葉の何れも剪綴ものに候又凶事の時の衣服の先づ都べて黒き色と申すか悲哀の心を表はすと相見候男子なれの通例の燕尾服なれども襟飾に黒き色を用る事なり元來燕尾服の時の白き色の結飾を着けるが一般の定りなるに凶事の時に亦た必き之を黒色に致すが定りなり又た女子なれの同じく黒色の禮服を着るとなり其喪を服する間の男子なれの常に彼の絹帽子の胴を黒色の切地に幅廣く纏ひ置くなり又絹帽子を冠る程のものにあらせして羅紗帽子を着る方の社會なれの左右何れか片手の袖の二の腕の處に一吋五分乃至二寸許の黒色の切地を縫ひ付け置くなり是等の切地の矢張紗の襟なるものにて特に喪の時の用のために出來居るものなり女子に至りては喪を服する間黒色の外決して他の色易りの装束を着けるとなし黒色の衣服の平日も善く着るゝにて喪の間にあらざれは黒色の衣服の着られずとの定めありあらざれども黒色の衣服にあらざれは喪の間に着られずとの亦た定

りたる作法なり又た其夫を喪なへる婦人の必ず髪かみの背後うしろに黒色の薄き紗さの如き切地きれぢを懸かけ流なががせり髻まげの處にて一寸髪かみ褶ひだをとりて狭せまめ下した一尺許ばかりも垂たれ居るなり是こゝの舊もととウエイルウエイル蒙面かほかくしとて譯すへき歟や彼の女子むすめの面かほに蒙かふる薄絹うすきぬなり)にて顔かほを蔽おほふ様に前に垂たれ居たる譯わけのものなりしに世よの推移うつかりと共に其制せいも變へんじ今いまの斯いかく意氣いきなる姿すがたのものになりしなりと云ふ寡あはれ婦むすめに限りての必かならずき其帽子ぼうしに色花いろはなの飾かざりを着きつせ何か黒色の切地きれぢにて結むすひ置おく歟や或あるの飾かざりりめきたるものをバ一いちも挿さまぬ歟や若わか夫たつとある婦人むすめの年とし長ながけて老境らうきやうに入りたる後のちまでも猶なほは帽子ぼうしに色花いろはなの飾かざりを着きける事に候まゐり又また喪さうの事に付つ西洋せいやうの風俗ふうぞくのおかしさの其衣服いふくの色いろ杯はの右みぎの如ごとくに嚴重げんじゆうにてあり乍はなら其喪服さうふくを着きたる者が無遠慮むえんりよに芝居寄席しばいよせ杯は遊觀ゆうくわんの場ば處ちよに立入た入りるとなり日本にっぽんなれの喪さうに居るの衣服いふく杯はこそ確たしかとしたる定さだりなけれ喪さうの間ま凡たゞべて謹愼きんしんを旨めがとし成る可べくの戸外こゝろに出でつるとをも遠慮えんりよするが一般いぱんの習なるに西洋せいやうにて芝居寄席しばいよせ杯はに至いたり見れの男子おとこ女子むすめとも喪服さうふくを着きたる儘まま平氣へいきにて棧敷せきぢ杯はに坐まわり居るが稀まれれならさるの甚いただ奇異きいに覺おぼへらるゝ事に候まゐ

◎問 西洋にて下女の有様は如何に候や

○答 倫敦ロンドン杯はに居あるゝに従したがひ人情にんじやうの何處いづこも同おなしきに思當おもたる事こと共とも甚いたた多おほし下女しやにやうの事こと杯はも即すなはち其その一いつに候まゐ倫敦ロンドンにて世帶持せたいちの婦人むすめ杯はの話わすを聞きけの倫敦ロンドンの者ものの何分なんぶんに使つかひにくしとて態わざ々々近在きんざいのものものを召寄めいよせて使つかふことなり又またた年若としわかき下女しやにやうが蔭かげにて囁ささやくを聽きけの内うちの女主人むすめの毎ごとつもお前まへの年としが行いかぬから氣きが付つかぬゝと叱しれと云い々々又またた年長としながけたる下女しやにやうと年若としわかき下女しやにやうと兩人同居にんごんきゆうする處ところにて其年若としわかき方かたの常つねに年長としながけたる方かたのために凌しのぎ壓へらるゝとて不平ふへい絶たへす双方ふたうの口論くちろんの末すえに年若としわかき方かたが泣なく事ことも屢しばしば々々あるなり或あるの座敷ざしきを掃除そうじゆに來きたりたる身みに棚たなの上うへの菓子かしを一いち寸すん撮とみ食くふ杯は申ます者ものも問ま々々之これある次第しだいに候まゐ下女しやにやうの仕度しどの甚いただ簡單かんたんにて尋常じんじやうの衣服いふくの衣服いふくなれとも眞まに上うと下したと揃そろふたりと云いふまでなり肌はだにの只ただ襦袢じゆばん一枚まいを着きけ其その上うに更紗さら襟えりの筒袖つうそで袴はかまを着き被かたるのみなるが多おほし冬分ふゆぶん杯はの寒さむさも頗すこる嚴きしきに唯ただた是これれのみにて能あたくも堪たへたる者ものなりと想おもふ程ほどに候まゐ其立働たちどの間まの胸むねより膝ひざの邊へらにかけ白しろ

或之鋪道當固置日碌
有掃理時不之加々
之食士身口足捕下
亦食子裝設告食婢
士

送軒日東
西同一風

レースの腹掛と膝掛とを繋ぎ合したる様なる一種の蔽を當て居れり即ち
 日本の前垂と云ふ處なり其使杯に出行く折の前垂をの脱づし白きレース
 を巻き付たる小さき帽子を一寸冠ふるなり佛國にての下女が細長きレ
 ースを以て背鉢巻の形にし其結ひ餘りの尾をの一尺許りもヒラ／＼と下
 げ居る様些細の事乍ら至て派出やかに見ゆるなり日耳曼旅行中も屢々下
 女の是の仕度をなせるを見たり日耳曼に近來佛國の流行風次第／＼に
 浸潤こむ由なれは是等も其一ツなるべし唯た伯林にて目立ちて見苦しく
 覺へたるの露頭の婦人の折々叻中を往來し居る一事なり一寸眺めたる所
 下女とも見へぬの亦た身分高き婦人とも見へず只た其邊の中等以下の家
 の細君か近處歩行したる者との見ゆれと何分にも倫敦杯にての見受けん
 と欲するも見受ると出來さる不行儀なる事共なり倫敦杯にての下女に至
 るまでも必ず帽子を冠らされの決て戶外にの出行かず殊に日曜日に女主
 人に連れられて寺院に參詣する時杯の衣服も晴着に改ため帽子も平日の
 レース巻付の分にのあらずして通例のボンチットを冠る等大に觀を更た



西 洋 婚 儀

ひる事に候之を總ぶるに通例下女の仕度の家内立働の時が更紗様の衣服に例の前垂なり是の上に冠ふれの彼の白のレース帽子なり此外黒色の衣服一ト襲是の臺處にて被居る時もあると大抵の外出の分なり唯た下女にて仕度の仰山なるの伊太利に及ふのなからん伊太利にての身元ある家の夫婦杯か其幼孩兒を連れて外出するときに其兒に別段異常の華美をも装ひしむると能はざるか故其代りに是兒を抱きたる守女を飾り立て綾織の絹衣裳に胸のあたりに何か金線杯を閃めかしたる杯花やしき出立をなさせしめたるが多く候随分一種の風俗と存候

◎問 西洋人の相貌骨格は如何に候や各國に就て夫々特有のケ條も之れあるべく存候如何

○答 先づ英國より申さし私共倫敦に到着の第一に快からざ感したるの自分等の身材の矮くき事に候町中にて行き違ふ人もすれ違ふ人も皆な己れより二三寸乃至四五寸高さにあらざるのなく向ふより小さな子供上がるの若者が來居れは是こそ我よりの低かるべしとすれ違ひさまに肩

を較べ見れハ矢張先方の乳までしかなし見わたしたる處先方の人々の想
 体に打揃ふて丈け高きか故一寸眺めたるのみにてハ左して高き様にも思
 はず自分と較べ視るに及びて始て其異常に(余等より云へハ)長大なる事を
 悟るなり余等の日本にて割合すれの率高き部分に属する方なれとも倫敦
 杯にてハ中人よりも平均二寸許低く覺候又其次に如何にも殘念なるハ先
 方の人々の血色の實に際立て壯健去氣に亦た綺麗なるとなり飽まで白き
 底に紅味を持ちて一種の桃色をなせるを通例とし其紅味の勝ちたる方の
 面より首筋にかけ恰も赫を塗れるか如く襟元よりの湯氣にても立ちのせ
 るやと疑はるゝ計り丈夫相に見ゆるあれハ又ハ白勝の方ハ直に玉子の蛋
 白の如くに玲瓏れり余等平日打寄りてハ學問技藝の及ハざる事ハ勉強し
 て之を學べハ到底追付かれぬと云ふ道理ハなし唯た勉強にも能ハぬハ身
 材等の事なりせめてハ身材だけにてハ彼等の上にてハあり度ものならずや相
 互に對坐して話をなすにも彼等の常に俯し語り己等の常に仰き聽くの体
 勢をなさぬハならぬハ殘念なる次第のものなり或る西洋歸りの人に御旅

送軒曰是亦實際之謂

送軒曰英骨之相實如佛人得格然有前觀之

行中何が一番御愉快に候ひしやと尋ねたるに私より身材の低きものに出
 逢ふたる時が一番嬉しく候と答へたる由の話を聞き居しが成程尤もなる
 事に覺へらるゝと且つ笑ひ且つ嘆じたる事屢々に候

英人の顔立ハ豐潤にしてノンベリと温厚しき方なり髪の色ハ黃又ハコゲ
 茶々通例なり眸子の色ハ碧を貴ひて黒をハ賤むと申す傾きなり或る統計
 家の説に英國にてハ碧眼の方次第に割合増加し黒眼の方次第に割合減少
 するの實迹あり是れ男女とも碧眼の者を愛して黒眼の者を賤んするより
 其愛せられ悦はるゝ者の常に増加すると云ふ進化の大法に因て斯の差異
 を生ずものなりと云へり同し英國中にてハ蘇蘭の人ハ身材一層長大く又
 た髪の色も赤チヤケて殆ど棕栝の毛の如きをなせる者少からず又ハ瓦爾
 斯ハ稍や白勝ちの血色のもの多き方なり之を要するに英人の特有の點ハ
 身材スリッと高く双の肩ハ有るか無きか迄に撫でるしになり居るの處
 にあり候
 一韋帶水を隔てたる中なれとも佛國に參れハ相貌骨格共に又ハ宛然別物

に相成候佛國にて平均したる處身材左して高からず日本人を少し長大にしたる位の者なり或は振んで、高さも之れあり候へ共其工合スラリツと高さにも異なり何れかと申さのズンズ短き格の躰の長さ者と申す方なり顔立の英人よりもキツと引まらしたる處ありて云は、氣の利きたる方なり英人の顔立の其末流れてダラリとして締りなさに至るの憂あり佛人の顔立の其末流れてイカツキシカめる險惡の相に赴くの憂あり先づ是の二國人杯の善く其國柄人柄を其顔に顯したる者と云ふへし一方の鈍く濃厚しくして其内に鷹揚なる處あり又一方の鋭く賢くして一寸と氣の利きたる工合杯其顔の即ち恰好其國柄人柄の寫具なり佛國にの髪の色稍や黒き者随分あり又伊太利にの更に黒色の髪多き様に見受けたり伊太利人の身材杯の先づ佛國と似たり寄たりなり顔立の佛國よりも少し濃厚なしき方と覺ゆ日耳曼の通り掛りに見わたせる處にては顔立身材共に參差不同にて茲そ日耳曼人の特有の點なりと申す處の一寸捉らへ難かりし但た肩の何れも角立ちて張出たり左れとも南部の方の大抵人の身材揃ひ

深人見細人達
注記者密審軒
之其最稱美

居りて英佛の間に立つ位のもので覺しく北部の方の高さの看上くる計り低さの看下す様なるもの打混し居るの差異ある様なり之を要するに日耳曼人の想体に相貌武骨にて英佛の如くに品よき處稍や乏しき方なるかに疑候
婦人の平均したる所にては英國が一番不同なく揃ひ居る様なり佛國の婦人の物体に甚た愛嬌よしとの公論なれども其顔立の上より云へは甚た不同多くして英國の如くに揃て器量よからず躰の態度杯に至りては概して適かに英國に譲る様なり尤も二國絶頂の美人同士を比らへなは佛國の方婀娜の致を以て勝さるとの評もあれど其の既に人々の嗜癖に沿れは別論なり又伊太利にの婦人に大理石様の白(マーブルホワイト)とて一種特有の色あり英國杯の如くに底に紅味を帯びざる純粹の白色なり其末の寧ろ稍や青味を帯ひる向に流るゝ方なり日耳曼の婦人も種々にて一定の事を品し難し然れども通例の稍や鄙びて見ゆる様にも思候
人種の異なりたる程争はれぬものもなく候歐州にて金も一番上手に溜め

れに世にも一番擧げさるる彼猶太人の若き一見して其特有の處相分り候其特有の處に他にあらず鼻なり猶太人の惣体に鼻甚だ太とく又た大抵の乙の字形の釣鼻なり左れの西洋にて草紙の敵役と同様の鼻にて且つ甚だ太とさきものを見れり皆な之を猶太人と思ふても宜敷程なり是れ尤も明白なる個處と見へ猶太人の祖なるモセスを畫きたる繪を看れりモセスをバ毎つも是非太とさき釣鼻に畫きあるが通例の定りに候

◎問 西洋諸國にてハ碧眼を貴ふとのとを承りしか果して立派に見ゆる者に候や

○答 如何にも日本にて碧眼の西洋人を見れり左程立派とも思はれぬ様に見ゆれども彼地にて見る時の其方に團扇を揚る心地致すと候東洋人の面色少し黒みたるが故に毛髪も黒く眼晴も黒く茶色なる方自から世間の好みも適するとなるべきが洋人の白く赤らげたる面色なるが故に之に黄金色の茶の毛を添へ輕淡なる相貌に一双の碧眼を點する時の實に稱すべき色の取合せとなるにて最初余輩の目にも思ひさりしか少

遂軒曰俄習爲性古到東西何州皆然歐人而巳唯々居士答曰辭句之妙

通軒曰描寫技巧

しく土地馴るるに従ひ成程斯る顔色と斯る毛髪の色との間にハ斯る色の眼晴こそ色の取合せ佳きものと氣付き候程の時に候右の専ら英國を申すにて歐洲全躰の上より申せり隨分國々にて少々の好みにも異同あるべく又同じ洋人の内にても人に因て好む所の同しからざるものなり例せば婦人の相を記載するにも青黒の毛髪大理石様の白の顔色漆の如き眼晴を痛く賞讃せるものもあり又薔薇の如き淡白輕紅の顔色に黃碧の二色を合したる眼晴を取合はするを賞賛する者もあり然れり人々に因て其好みも一樣にハ勿論行かぬとながら先づ英國杯にてハ碧眼にして淡紅薔薇の顔色を賞すると普通之にあり候先づ大躰の處より云ハ小説及び芝居杯にてハ黒色の毛髪漆眼の婦人の通例其性活潑にして其弊ハ猛惡なる者の様に人相を描く多し又柔和にして情け深き婦人の相を描くにハ多く濃茶色の毛髪と灰碧の眼晴とを用ふると通例なり又芝居にて男子の惡人の動もすれハ黒髪の者多く輕茶色の者少なし是等の東洋人なる余等の常に甚だ不平に思ひて打笑ひたるの一事なり又輕茶色の人種の世界にてハ黒髪

藥々居士
曰比喩之
奇而妙能
使聞者悟
其美矣感
服々々

の者出る時ハ何か性質活潑猛烈なるが如き様に見ゆるハ是も亦一奇と云ふべし昔しの諺にも一ツ眼の人種のみ棲める島ありとて其人種を捕へ來り見世物になさんとて日本人が其島に出掛けしに一ツ眼の人種等ハ大に怪みて世にハ二眼の人もある者かな我等見世物にして呉れんと之を捕へて興行したりと云へり如何にも顔色毛髪眼睛の様々の色の中にて孰れが好しとか悪しとか云ふも多數と少數との相違もあるべし東洋人の中に一二の西洋人を交ゆれば甚だ異様見へ又西洋人の中に一二の東洋人を交ゆれば變態に見ゆるも同様のとなるべきか是れ等の東西の異同ハ左して是非する所なけれども唯だ男女に限らず日本人の身材が常に西洋人に劣るハ如何にも残念なるに候

◎問 西洋の婦人の毛髪巻き縮れ居る者多き様に見ゆ右は自然のものにや

○答 英國を以て申さハ婦人の毛髪ハ決して天然に甚だしく巻き縮れ居る者多しと見へざるなり尤も東洋人に比すれば彼地の人の毛髪ハ細く

緻やかにして多く生へ東洋人の毛髪ハ同し面積に數少うして太き毛髪生するが故に彼地の人の毛髪ハ長くなるに従て少しく浪の如く糾れ縮れる傾きの之あるとなり右ハ大体を申すものにて間に甚だしく巻き縮れたるものもあり西洋人の目には隱かに大形に巻き縮れたるハ一種の飾りとして之を賞美するとなり其證ハ希臘羅馬の古蹟に傳へるものより今日に至るまでの彫刻の諸像を見るべし男女共に大佛の如くチリチリと小さく渦まきて巻き縮みたるを好むにハあらで皆な大形に巻き縮れたるを好むとなり英國の女子も通例年若き人の日本の束髪そまげの形の如く其前髪を切り下る者なるが額際を飾らんとて是の切り下げたる前髪を大形に巻き縮らしめてフサフサと垂らし置くなり左れハ天然の儘にてハ通例斯く巻き縮れ居る者なきが故に態々之を巻き縮ましむるに盡力するとなり之を爲すに二様の仕方あり其一ハ鏡の箆の如き張り居る物を火にて炙り此温鏡を以て好む程に毛髪をクルクルと巻き縮め暫くする後ハ毛ハ其儘に締め居るとなり是ハ最も簡易なる法にて鬘屋の店頭ハ必す此道具を賣

り居るを以て其用ひの廣きを知るべし去りなから温鏡を用ふれハ毛を傷
 ひるとして他の一種の仕方を用ふるとなり亦以て東西共に婦人の其毛髪を
 大切に知るを知るに足るべし他の仕方とハ一種の紙を用ふるとにて此紙
 に毛を添へもちて一と振つゝ糾をかけ數時間縛り置くとなり然る後之を
 解き紙を捨去れハ髪ハ其儘縮れ居るとなり中等以上の婦人の多く之を用
 ふる由に候

左りなから右兩襟共に一度巻き縮むれハとて五日も十日も永く保つべき
 に非らず大抵ハ隔日或ハ二三日其髪ハ質の剛柔次第にて各々適宜に之を
 なすと作り左れハ天然の儘にて格好能く縮み居るものハ先つ少き方と云
 て可なるに候

◎問 當節西洋諸國の男女の髪ハ流行ハ如何に候や

○答 中以下一般の風を申せハ先つ五分刈七分刈位の所に候右ハ英國の
 みならず日ヲ曼亞米利加ヲも通り掛りに見たる所にてハ同様に相見ハ候
 唯佛國にてハ左様に甚たましく短くハあらざりし様に相見ハ候洋人の其頭

頗大なるが故に斯く短く頭髪を刈るも甚だ格好よけれども後頭の小なる
 人種の東洋人加之に倣ふて短く刈る時ハ其頭誠に小さく見ハ甚だ不格好
 のと多く候

又頭髪を巻き縮ましむるとハ獨り婦人のみならず男子にてハ佛國杯にハ
 随分之を致すもの多し故ハ巴里杯にて大抵の髪床に至り之を注文すれハ
 必らず丁寧に捲き縮まし呉るゝとなり物の試めしなれハとて余等も一兩
 度試したることありしが如何にも善く巻き縮まりて出来るなり唯だ茲に
 必要の用心ハ髪を洗ハさる一事なり若し巻き縮ませて歸りたる後迂濶と
 水にて洗ふと杯ある時ハ直ちに故の如く眞直になりて仕舞ふ若し之を試
 みんと欲する人の之を洗ハされハ兩三日間ハ保つなり英國の髪床にてハ
 相應の家ならんにハ之を注文すれハ直ちに需めに應じて巻き縮ませ呉る
 るれども大抵ハ其手際甚だ悪しき様に思ハれたり右ハ實驗の説にて問津
 之なきに候

◎問 男子の口髭の工合ハ如何様なるもの多く之あり候

や
 ○答 是も英國と佛國にての少しの違ひ之あり當時佛國にて年若き人の中に鼻下の髭を左右に「八」の字に分け又下唇の際よりぱつりと▼形に残して其狀恰も「八」の下に一點を加へたるか如くし他の鬚總躰の鬚を剃り居る者多し右の定めて同國が本家なるとなるべし英國にては此風餘り行われず唯た時として之をなし居る者を見るときなり總選舉其他有名の人の集會演説等に至り見れり然るべき身元の人に斯の如き風を爲し居る者の幾んど之なきなり又中以下の叢の群聚する繁華の塲所にて注意するも此風の人の甚た少く候英國にては年若き人の通例鼻の下を「八字髭にするのみにて頰頤の毛の剃り居るを通例とす老人に至れり頰頤の毛をも併せて穩なしく一躰に延し「八字髭」のみになさざるを通例なり去り乍ら是も佛國に至れり相違ありて老人の中にも「八字髭」のみの人多く候又佛國にては一種の鬚付を用ひて鬚髭を行儀よく堅め髭先をびんと反ね居らしむる者も鮮なからず英國の髮床にては時として余等の髭に鬚

漢語初行字曰
 國史社行字
 近來漸次會
 波及于紳士
 士紳無不
 見所無不
 者流無不

其得色以
 是亦次明
 程進之飾
 上平將以
 侯外將飾
 其者於當
 實者即當
 世者即當
 人者即當
 乎增加者

付を付けんと欲せし者あり左れの英國にては之を用ふる者もあること見へたり唯全躰の處英國の髭の形「八字髭」にては稍や隠なしき方と云ふべく候又英國にては男女共に顔に刀剃を當てさると見へたり但し男子の「八字髭」のある者頰頤を剃るのハ格別其の以上の部分を少しも剃らざること見ゆ故に近寄て顔を眺めれり濃かなる生毛線のもの一面に生へたり男子ハ格別なれども女子杯ハ少く相應しからぬ様に思はる去り乍ら彼地の者ハ此を以て一種の飾りとなし居るやも知れず唯困却するハ余等の如き東洋人の願より頰へかけ黒き毛所々に生へ額際眉毛の間にハ見若しき生毛の長ゆることなるが英佛孰れの髮床に赴くも之を剃り呉れたることなし又他の日本人杯も同様と見へ出會ふて其頭を眺むれり生毛の蒙茸と長へ居るが通例にて時としてハ話し合ひ笑ふとも度々に候斯く生毛を飾り居ると思へり甚た異様く聞ゆれども何とも云へぬ譯なり其仔細ハ兩三年前佛國よりの流行にて英國の婦人杯も髪を上に乗ねて結

び上ると流行し居りしに同し髪を束ね上るとなれは襟際より額際に掛け
てはつれ毛おくれ毛なき迄に搔き上げて之を束ねる方サツパリとして東
洋人の目にハ跡よく見ゆるとなるに彼地の人の故さらに襟及ハ耳の邊の
毛を一線通り束ね残し顔及首筋と頭との界にハ短かきはをつとしたるは
つれ毛おくれ毛を澤山置て縁を取るとなり是ハ一切の毛を悉皆束ね上る
時の坊主襟の如く髪と他の肉面との間餘り見盛なき故に斯く態々短かく
毛を切りて顔及首筋と髪との界に短かくふやりとしたる毛を置き縁を取
らしむるとなり是等ハ日本杯にてハ決して飾りとも思ハざるべく却て見
苦しさ跡なるが彼地にてハ則ち飾りとなるの趣あり是も亦我風俗を以て
彼の風俗を是非し難き一事なり兎にも角にも顔の上部の生毛をハ一切其
儘にして少しも剃らす毛深き人に至りてハ双の眉相連なりて幾ど弦なき
弓幹を仰け横たへたるが如くに相成居る杯ハ實に不思議に候
◎問 彼岸の團子、立猪、萩餅、杯と申す様の事、西洋にも之れ
あり候や

○答 之れあり候十二月廿五日ハ教祖耶穌の誕生日にてクリスマスと
稱し一年中の大祝日なり是日にハ例としてクリスマストマスノ盛物(アデー
ング)と申すを家々にて拵らゆる事に候是の盛物の製法中々に喧ましく先
つ試に其大畧を申さハ第一に乳葡萄一磅半を切り碎き之に覆盆子半磅を
加へ又た凝脂一磅、麵包を碎きたる粉一磅、橙及ハレモンの皮一磅、麵粉一磅、
其他玉子、砂糖、ブランドー等を調合し之を善く混ぜて長らくの間煮つめる
なり之を混ぜるにハ又た緑義のある事にて手づから之れを混ぜたるもの
ハ一年中仕合宜ろしとて家内中が皆な寄りて集かりて銘々一度宛ハ之を
搔き廻ハす事に候余等も下女の勤めに遣て一度宛ハ之をクルクルと搔き
廻はしたる仲間なり扱て之を煮つめたる上よて平なる皿の上に圓く頂尖
りたる富士の山形に盛り立て其周邊にブランドーを注ぎかけ之に火を黙
けて卓子の中央に持來る是時卓子を圍みて坐わり居る者の皆なホラー、
と叫びて之を喝采するなりブランドーのバチ、と燃へる音皆本の喝采
の聲相交りて聞こゆる其響きの裏に於て卓子に上席せる主人ハ一々之を

碌々居士 曰蘇未 味耶之供 生既知之 物既知之 中矢子其 柚餅乎其 甘味乎其 思垂延々 膝而濡其

分ち盛りて同席の人々に頼かつ主人の直ぐの隣に坐わり居るもの杯の
尙だ青き炎のチヨロ〜と立ち昇り居るを匙にてすくひ食べるなり左れ
とも酒精火なれの火傷杯するとの決て之れなし是の盛物の本名ブラム
ツディングなれどもクリスマスに附物として拵しらゆる故にクリスマス
スプディングと通稱し候是の英國が別して得意と見へ子供杯の是の盛物
を樂み待設けると恰も日本の正月餅と同様なり風味の一寸備中矢掛の柚
餅子に似たる所あり英人の例の大食と申し又た殊に是の盛物を嗜む方な
れの昨年のクリスマス杯に倫敦にて或る大家の娘が之を食べ過ぎた
るがために頓死せる話あり氣樂なる某新聞の此話を切論して一日の社説
を填めたる事之れあり候

◎問 正月をも盛に祝ひ候や

○答 英國にての正月の至て淋しく候右のクリスマスが日本の正月と
申す程の賑やかさにて是の祝ひ日に座敷臺處等所々の壁又の天井に青
葉を吊し懸くると猶ほ日本のメ飾りと云ふがとし平日の各自渡世の業に

忙しくして親子兄弟皆な離れ〜に住まへる者も是日に一家に打寄
りて共々に一ツ卓子に坐りて夕飯を喫べ或のピアノを弄そ或の歌ふ等
甚だ打解けて睦み遊ぶ事なり又た親しき間柄にのクリスマス贈物と
て種々の品を遣り取りすると日本の歳暮歳玉に等しクリスマスより正
月にかけての引續きたる休日にて皆な平日に異なりたる日と致しあり殊
に一月一日の別に新年の日と稱して取りわけ大切に致すとなれども前
のクリスマスの方主となりて一日の左して賑ふ程のとなさか通例な
りクリスマスの日及び新年の日には知人の間同士にてカルタを贈答す
る禮あり是のカルタに種々綺麗なる繪を書き又た金字銀字等にて色
々の詩歌又の經文中の語又の名言杯を記しありて是のクリスマスの前
より各小間物店にて賣捌き居れり之にの樂しきクリスマスを祝申候と
か愛たき新年を賀申候とか書するが通例なるが或は是も繪と共に板にて
摺りあるもあり其中にの樂しきクリスマスを祝し併て愛たき新年を賀
申候とて双方を一所にしてクリスマス日に贈答するも少なからず候

送軒日與
邦新其
則各遊
他物種
起以爲
樂時亦
與彼耶
前降景
署同景
況日耶

是等も新年の餘り珍重されぬ一證と申すべく候

◎問 クリストマスの前後に何か別段の芝居を致す由承候如何と候や

○答 其のバントマイムの事と存せられ候バントマイムの本と仕方身振の謂にて元來の無言の筈の義の語なり左れどもクリストマスの頃より倫敦にて常例として多く相催すバントマイム(仕方芝居)の語義に違がふて皆な喋り立つる事に候是の唯た年若き娘又の子供の喜び観るものにて唯た扮装を華美にし滑稽を旨とし目先きを悦ばすのみの芝居なり左れの外題も毎年々々大抵定り居てお化物語(フイリール)亞刺比夜話(アラビヤナイト)等子供の常に翫そふ桃太郎カチノ山の如き類の中より又た尤も普通なる話を撰ひて之を演ずるなり左れ筋の最早人の飽つる程承知せる事なれ別れに其邊にセリフを細やかにするにも及んぞ只た華美に賑やかにして面白かしく致すのみの事に候例とへい亞刺比夜話の中の不思議ランプの話を演せし彼のランプに属せる魔王が神通力を以て

古來よりの美人を見せると申すに托して歴史上に有名なる美人を集め女役者一人宛を其美人に打扮せ其時代々の流行に従ひたる種々の飾り方造り方の馬又の車又の乗物等に乘せ又之に其時代の風俗に従がひ色々の仕度の侍女衛士等を附け一組宛次第に舞臺練り出し皆な揃ふたる處にて又た百有餘の踊り子出て大舞踏始まる等金銀錦繡燦爛て目を奪ふ計り花々しき處が是の芝居の精采に候

◎問 日曜日は休業日の事なれば町の有様も常に異はりたる所之れあるべく存候如何

○答 倫敦にて旅人のために日曜日程ジョサイのなき日ひなきなり又た西洋諸國まで倫敦程日曜日を嚴重に致す處ひなきなり倫敦にて日曜日に有りとし有らゆる品物仕事一切死に果てる事に候先つ雨日風日の別なく人事に最も大切なる人の往來なり其往來に最も必要なる市中の輿車なり其輿車も日曜日に午前通行を相休み午後に至りて始めて徐々之を聞くなり通行を開きたる上にて平日よりの發着の度敷を少く

送軒日與
邦新其
則各遊
他物種
起以爲
樂時亦
與彼耶
前降景
署同景
況日耶

し候又た何時を限りとなく人事に缺き難き凶吉凶存問其他贈答の通信なり其通信に第一肝腎なるハ電報郵便なり其電報郵便も重立ちたる或る個處々を除きたる外日曜日ハ各々局を切りて取扱を相休み郵便局の投書函丈ハ開きあれども之に手紙を投し置きたれハとて其日の配達をなさるるか故唯た其明朝一番の配達に間に合ふを樂むのみの事に候瀟車電報郵便杯一瞬一刻を争ふ緊要のものすら斯る次第なれハ以て其有様を推量すへし町の家と申す家店と申す店悉皆戸を卸し錠を止め表ハ唯た錠前と木戸の外何も見る所なし昔し彌衡が座人を罵りて皆な行るる屍走しる肉也と申したるハ一時の狂語ながら倫敦の日曜日ハ町ハ都べて生息のなき空房計りなりとも形容致すへき歟是の日の有らゆる賣物一切休みと相成候が故世帯持の婦人組ハ皆な其前夕即ち土曜日の晩に臺處物万端の仕入に出つる習にて少し賣物店の多き通り筋の土曜日の晩の賑やかさハ平日に倍して雑沓するなり麵包屋肉屋八百屋荒物屋小間物屋等日用の品物を賣き候店々に平日ハ大抵午後九時限りに店を仕舞ふか常なるに土曜

日の晩ハ十一二時の頃までも瓦斯電氣ランプ等の燈火を眼花までに燃やし立て景氣よく取引をなし其前をハ夫々相應に身なりを取繕らふたる婦人又ハ之に随伴へる娘子供亭主或ハ只た是の景氣につれて散歩さする若者共思ひ々に隊を成し伍をなし三々五々打連れ立ちて引きも切りも往來する杯一寸田舎の夜祭東京の縁日と云へる様の氣味あり左るに是れより僅か五六時間を隔てて翌朝と相成なれハ町の蕭然として人の往來さへ少く時々戶外に聞こゆるハ行歌して錢を乞ふ貧巧手練にて鳴る樂器を鳴らして物貰らひする盲人なり左れハ日曜日にハ博物館繪畫館植物苑等平日見物遊覽に供ゆる場所々も皆な閉ちて人を納れず滞留の旅人ハ往くへき所も觀るへき所もなくして徒らに無聊を嘆するのみ余等の發足の少し前に上院にて博物館繪畫館等の日曜日にても相開く様致さんとの議可決せるを聞き未だ實施にハ至らざりしかども日本人仲間ハ皆な打喜ひたる程の事なりしなり是にて其他を推量すへく候

◎問 新聞紙も無論休刊致すへく候如何

碌々居士
日比居
容絶妙
非筆者
不能笑
服々々

送軒日日
隨日景況
巧出一々
不獨機毫

○答 クリストマスの日にも一月一日にも其他如何なる祝日祭日にも一
つも休刊なき新聞紙なれ共日曜日にも皆な休刊致候

七十四

◎問 彼地の人は如何にして日曜日と暮らし候や

○答 家に黙坐致す歟朋輩を尋ねる歟其他の寺院に参詣致す歟の事に候
へ共日曜日に一番繁昌致すの公園なり平日の朝起きると火點す頃まで市
區(シテイ)にある商館商店に通ひ務めするに間なき手代伴頭杯は是日の一
週中の骨休めに各々衣紋を飾るふて例の紺帽子を笠やかし細き筋子を挾
さみシャツと公園を往きつ来りつ歩るさ居れの下女守女杯の又た主家
の子供に附添ふて衣服の垢の引立つにも構はず洗ひたての眞白き附襟を
押し立ててアチヲコチヲと逍遙し貧家の娘と見へて母の靴を借り来りし
と覺しき足にも適はぬ大靴を引掛けて飛ひ廻り戯れ居るあれの同しく兄
弟にや朋輩にや十三四の子供が古びたれとも只た破れ裂けぬを珍重し父
のマントルを袖長踞長に着下レテグググし乍ら走り行く杯其他日雇稼の
職人仕事師又の婦人皆な最寄りの公園に出で遊ぶ事に候尤も是の重

もに中等以下の社會の者共が多く候

◎問 日曜日には終日一軒も店を開く處なく候や

○答 只た一軒あるの煙草屋なり是の平日通り居候又た居酒屋ハ午
後に至りて皆な相開き候料理屋の店々によりて早晩の差ハあれとも午後
より夕方の間に皆な相開き候是の寺院に参詣に出行くが大抵の習なる
故参詣の歸りに是から内て冷飯を食へるも旨くなしとの心持より料理屋
に寄りて夕飯致す者も希れならざれハ之を當込む都合ありての事に候

◎問 他の國々にて日曜日の有様は如何に候や

○答 巴里にてハ重立ちたる大家大店の倫敦同様に商ひを相休めとも其
外の中等以下の店に至りてハ營業致し居るもの甚だ多し又た日耳曼にて
ハ私共の見たる所にてハ朝の間の店を開き午後より相休む様相見へ候左
り乍ら何れも倫敦町中一体思ひ揃ふて嚴重に休業する處ハなき様覺へ候
伯林にて英人と同寓せる人の話に日曜日にハ休業日の事なれハ皆々ハ寄
りて骨牌遊びをなせとも英人のみの決まて之に交じらす此方より骨牌を

七十五

弄るばずや」と云へる必ず「今日否」と答ふ「何故」と問へる又必ず「日曜日なり」と返辞する由物語りて笑居れり如何にも英人の自國にて日曜日の骨牌遊びをさへなさぬが習なれの例の自から重んじ自から敬する性質よりの外國に至りては猶ほ獨り其習を守りて之を易へぬと思ひれたり米國に渡りし時紐育にて日曜日に邂逅しが店の矢張大抵悉皆閉ち居たる様見受けしが倫敦の如くに木戸を叩し切らず賣物の矢張飾り付並べ立てたる儘に置きてガラス障子より見へ透く様なし居たるが多かりし故に同しく一体に休業せるとの休業せる乍らに店の有様丈の平日に異ならず従て町も倫敦程俄かに淋しくなりて見ゆると申す事なかりし様覺へ候尤も人の往來の均しく平日より減して相見候

◎問 公園の有様は如何に候や倫敦には公園の數甚た多き由に承候が如何

○答 御尋の如く倫敦に到着の始めにの至る所として公園を見ざるのなき様覺へ甚た珍らしく感ずる事に候彼の名高き「ハイドパーク」を首めとし

送軒曰此
言非
能知此言
能知此言

「グリーンパーク」「セントセームスパーク」「リゼントパーク」「フェンスベリトパーク」等某バトク「某パーク」と申す者甚た多し「パーク」の即ち公園の謂なり其の他「某ソルカス」「某キャヴェンディッシュ」等廣小路隙地杯の名を以て一二丁乃至四五丁四方を囲ひ其中に樹木を藝へ腰掛を排べ一寸人の休息所となる様なしある者亦た極て夥しく候「ハイドパーク」の「南ケンシントン苑」と相續き唯た間に一つの溜水あるのみにして別々仕切もなき事なれの名の二つになり居れども實の一も同様なり故に是の周圍幾里と申す程廣く候廣さにて其次に位する「リゼントパーク」にては外邊を一通りせバ凡そ二里許之れあり日本より参りたる目への如何にしては故郷自慢の心持勝て容易に彼地の山川の優處の見へぬがちなるの自分乍ら可笑しき程の事多し現に先般歸朝の時まではテムズ河にせよライン河にせよ處によりて廣狹のあれと概したる所我が隈田川淀川位の者なりと固く信じ我れも思へば人にも語り居しが歸朝の上始て兩國橋を渡りし時に實に其狭さに案外しモソトの廣き筈なりしがと自から感ふたる計なりし是の二つにの彼地の

家屋橋梁坏の都へて大形なるが故物同士の比較より廣き河も割合に狭く見ゆる事なるべきが又た一つに心底に日本貴しと思込居るが其原因なるべし左れの余が始て「ハイドパーク」に往きし時生憎霧深き日に十分眼光の達かぬとも達かぬなりしが是の日比谷の練兵場を二つ合せたる位もあらんと云て同伴せる日本人に絶倒されたるともあり尤も斯る類の負けぬ氣の何國の人にもあり内と見へ倫敦の寓處にて一日夕飯の時主婦が此間巴里より歸りしと云ふ英人に向ひ如何です巴里の賑綺麗にもあり廣くもあるでせうと話しかけたるに彼の英人の澄ましたる顔色にて「左様丁度リセントパーク位あるでせう」と挨拶したるに同じ卓子に坐わり居たる余等の殆ど噴飯さんとしたりし是れ英人が常に倫敦の大なるを誇こり巴里の華美なれども小なりと申し居る平生の口癖に過ぎざれ共亦た以て「リセントパーク」の廣さを併せ知る可く候

倫敦にて市區内と稱する中央の町筋にての往來せる人の皆な軀を斜めにし頭の足より二三寸先に行き居るが如き姿にて早く云の趨りに走り

居ると申すも可ならん其中にの茫然とイみて店の品物を眺め居る者又の左も要事無氣に「フ」〜と致し居る者等も無論少からぬ事なるが兎に角に車輪の響馬蹄の音人足の蹇然たるを相混して絶ゆる間もなく喧しき中なれの實の要事もなくして是の間を彷徨て居られぬなり故に身に定めらる仕事なさん仕事の閑を得たる人又の子供子供の守する者等のために何か往來の繁からぬ少し油断すれの直ちに人に衝當る杯の心配なき逍遙處休息所の必ず欲しき者なり右の「パーク」「ソールカス」「キッペンディッシュ」等のこのために出來たる者なり又た常に塵埃のために撲たるゝ眼の時々緑色のものを見て其疲を展ふる所なければ叶ぬが理窟にもあり人情にもあれの折々公園なり隙地なりに往きて陣を放ち樹木の鬱蒼たるを眺むる事の眼の方より云ふも自然必要なり左れの公園類の設けの町筋の極て騒々しく緑色のもの迎の幾と希なる倫敦の如き處にて益々其必要あるものなり日本にありての上野に往くも増上寺に往くも幾分か快く感する事の感する乍ら左程打て變りて快よしと迄の思はず之を倫敦にて偶々公園に

送軒曰外
國之公園
實安樂園
也愉快鄉
世非我國
人所可夢
想得者也

八十一
這入りたる時の心持に比すれぬ甚だしき相違あるを覺ふなり公園に貴
賤男女打混して這入るか故彼の邊に輕車肥馬に駕して坦路を驅り居る
者われ此の邊に手空きの日雇男が樹下に臥して晝寝せるもあり或
小舟に乗りて手づから櫂を鼓乍ら湖水に泛べる年若き男女われ或
を投げ合て競を走しる子供あり其趣色を様々なり例のシーズン(期節)と稱
し夫々の身分に應し各種の交際交遊の會を催して相往來し歡娛む一年中
一番陽氣の期節なる春夏の頃にハイドパークの馬車道の午後四時比よ
り身分元の高き婦人の馬車にて打續くなり各自思ひくりに着飾りて皆
な茲に來り園内を馳騁りて遊ぶとなり尤も園内に抱への馬車の外辻馬
車の入るを許さすとの制なれに荷めにも公園の内を驅り居る者なけれ
ば男女を問はず相應の身分なることを知るべし故に倫敦の社會にありて
先づ公園の内を馬車にて乘廻はす以上に達らねば餘り面白からぬものと
存せられ候

◎問 乗物ハ重きに氣車馬車の二種なる趣は承知致居候

日本にて一寸人力車にて出掛ると申す場合に如何なる
振合に致候や

日實不背士
倫教其名
雖有不飲
飲者哉

○答 御承知の如く倫敦にてハ市中の氣車の仕組善く行届き大抵の處
是にて便宜相足るなり先づ地上を走る尋常の仕組の鐵道と又た其及のさ
る所を補なふための地下鐵道との二ツあり是等の鐵道の固より市中の往
來のために出來居るものなれに概ね毎十丁内外の處にステーションあり
て上り下り自在なり尤も是の市中鐵道の始て出來掛けたるハ今より幾か
に四十年許前の事にて夫より次第に支分れ長延び遂に目下の如くに盛ん
なるものとなりし者の由殊に地下鐵道の方へ別して新らしく其預圖の計
畫丈の線路を布き了りたるハ只た昨春頃の話なり市中鐵道の始て出來掛
りし時の乗客も尙だ不馴れの事なれに善く間違失錯多かりし趣にて余等
の知れる或る老婦人の物語に是の老婦人が花嫁の頃が恰も市中鐵道の出
來初めなりしが或る時夕飯會を催さんとして前以て友達に案内狀杯出し置
き扱て其日の午後に至り一寸膳後の菓物を整へ來らんとて新夫打つれて

菓物市まで出掛けたり往復共満車の事なれの手間の取らじとの積にて左して時の餘裕も見計らひを立いでしが如何にしけん返りに線路を乗りちかへ途方もなき向に走せ去りたり心付て其邊のステーションに下り又た後戻りして更に乗替る杯家に歸りし時の既に二時間もおくれ座敷に這入りければ客人の皆々顔を並べて只た欠くびせぬの色なりしと今日仕組萬端十分整頓して便宜此上なく且つ車室も上中下の別ありて左して身分賤しき者共と同坐せぬのならぬ氣遣ひなければ大抵の人迄多く之に乗るなり尤も銀行休みの日杯と申す祝ひ日に下等社會の者が公園等に遊びに往きたる復りかけに落ちつとふ時杯の多勢の群衆の事なれば下等中等共に彌が上に押詰まり其溢れたる者共が發車のマギワに突然ドカ〜と上等室に推込來るとあり鐵道役人の制統も届かばこそ其儘にステーション一二個處をば通り過る事も多し故に斯る類の日に少し身分を構ふるもの中人にても先つ用心して乗らぬなり兎に角に上下推なべて多く乗るの市中満車なるべく存せられ候此より上に參れは辻馬車此より下に參

蓬軒日我
邦今日之
鐵道亦一
種是也
各時此被
事異與彼
邦同

れの鐵道馬車乗合馬車と存候是等の諸馬車の振合の更たためて詳細を相述申すべく候

◎問 鐵道馬車乗合馬車の趣は如何に候や

○答 鐵道馬車の現に我邦に行われ居るものと其振合左して異なりたる所も之なく候佛國にての車中の腰掛一人宛に仕切りありて定りたる人員の外に腰掛る事相成らざるものあれども英國の方の通例一人宛の仕切なき故乗客の多き時の随分賑ひみて詰込まる事も少からむ又英國にての乗車の切符を呉るふとさ例の小さき圓き穴を斷り抜く鉄に仕掛ありて一ツ斷る毎にチーンと云ふ音するなりかねて鐵道馬車會社の規則として乗客の此のチーン音を聽きたる上ならで其切符を受取り吳間敷の事なり則ち車掌が一枚の切符を再用する弊を防ぎたる一法と見ゆ斯くして斷り抜きたる穴の部分に當る小さき圓き切符の紙片のボツリと抜けたる儘鉄の中に殘る様仕掛あり跡にて此の紙片をさへ指定すれば切符機杖を賣りたりとの事の明白に相分る仕組なり是も亦た切符の賣高を偽はる

この得ならぬ様にしたる者なるへ去乗合馬車の鐵道馬車より幾分か品格を遜づるやの氣味もあれど我邦にて二者の間に逕庭ある程にあらぬ様なり(我邦にて圓太郎馬車と稱する種類の彼地になさの無論に候乗合馬車の第一に我邦に異なるの皆な天井の上にて又一層腰掛ありて此にも客を乗する事なり明治七八年の頃と覺ゆ銀座より淺草の間を往來する二階馬車なるものありしが其動もすれの怪我失錯の多きにより出來る間もなく差止められし事ありき即ち此の二階馬車こそ西洋諸國にて多く見受る乗合馬車の典型を摸たる者なりしならぬ乗合馬車の皆夫々白青黃赤茶褐等の色分けありて白の車の何處の間を往復する者青の車の何處の向に去來する者等線路に従て色を殊にせり左れの乗客の近寄りて何處へ行どの標札を見るに先さだちて先づ其色を遠見して大体を識別る便宜あり又其賃錢の受取方の様々にて鐵道馬車の如く何處どの區域を誌したる切符を渡すもあれど此の切符も鐵道の分の如く堅紙質のものにあらざして薄さペロ／＼したる一葉紙なり鉄にて穴を斷り抜く造作もなければ只た幾

千枚となく長く續けるを巻物の様に巻きある内より一枚分宛裂き取りて賃錢引替に渡す丈なり又其中に一切渡さぬ仕組の車もあり此の仕組によれの客が乗込むとき何處迄どの行先を話せの車掌の其區域に従ひ二錢分一人とか四錢分一人とか覺書の紙に記し置き其客の下りる時定めの賃錢を受取るなり此の仕組に賃錢の受取り渡しに証據物なき故其手違を避るため乗客の必ず下車の時ならでの賃錢を拂呉れ間敷との會社の口上車中に掲げあり又た車によりての只た繁華の場所若干の間のみを往來せるものあり是れの一吋乗るも端から端に行くも都て賃錢の一片なり左れの此の車に別れ賃錢受取方の人を置かず只た車中の一方に一個の錢箱を備付け箱の上に小さき質を穿けあり客の乗込みたる時之に一片宛抛り込む事なり左すれの此箱の一方の御車に面せる邊のガラス張りとなり居るか故御者の目にて今ま幾人乗込たり幾片抛り込たりとの事相分る仕掛に候

鐵道馬車乗合馬車ともに總体の大きさと我國の分に比すれの遙かに大きく

遂軒曰歐
州之馬
偉壯
人所
習之
亦素
在也

雖曰
歐州
之馬
亦素
在也

亦其綺麗なる事も遙に綺麗に候左れと馬車に就て一番目立つ其馬の異
常に魁偉なる事に候亞刺比馬と申す分の大きななるの大きななる乍ら品よく
優形なる方にて銘々乗の馬車を駕す時の飾り馬に多く之を用れとも鐵
道馬車乗合馬車又の荷車等に使ふの又た別に一種の大馬ある事に候丈の
高き事の例の亞刺比馬に過るとも及のさることなかるべし其脊の一番低
き處にても通例余等の腦蓋と相齊しく蹄抹の宛然益を覆せたるか如し左
れの其方も従て強健くして我邦の馬車を倍にせる重量のあるべく想はる
とを只た二匹立にて牽き居れり且つ同しく牽く乍らも我邦の馬の如く動
もすれの踰跟しつゝ首低れもて喘ぎながら行くと違ひ馬の勇さみたるを
形容せる彼の躍るとか怒ると云へる語に適し昂然としてドン／＼と行く
様なり概したる所日本馬の西洋にて稱する駒位の大ささしかなき様想の
るゝなり西洋の諺は其國の貧富を知らんと欲せの先づ其馬の肥瘠を見よ
と云ふことあり西洋人抔が日本に來りて始めて日本馬を見れば果て如何の感
を興すべさ乎殘念なる次第なり去乍ら是の種の方普養法一つによるもの

送軒曰歐
州之馬
偉壯
人所
習之
亦素
在也

にて歐洲の馬とて昔より斯く魁偉強健ものにはあらずりしか中世の頃武
邊盛に行のれて戦争とか決闘とかさへ云へる武士の皆な自身にての歩行
のならぬ程の重き甲冑を着用し之に應じたる重き械仗を提げて馬に跨が
ることなれの尋常のへ口／＼馬の皆な乗潰ぶされて物の用に爲せ従て一
世の人悉く魁偉なる馬を強健き馬をト求むるより種も選へる蓄養法も工
夫し此時より歐洲の馬世界に一紀元を成して進化の道を開きたる由に聞
及候左れの日本の馬とて現時の小弱なるを唯た嘆息して己むべきものに
の之れなくと存候

◎間 日本の寄席の類は之なく候や

○答 英國にて音樂場(ミニオン)と申すが日本の寄席に善く似た
るものと存せられ候音樂場の大なるもわり小なるもわり又左程に參らぬ
もわりて一線に行かされとも其演する所の躍所作事歌番手品輕業等
にて何を一色に演すると云ふ事もなく先づ種々の藝を入り代り立ち代り
て一ト切り宛務める事に候其藝人も常に次さ／＼に廻りて務むるものと

見へ甲の寄席にて曾て見たりし藝人を復た乙の寄席にて見る杯の事ハ展
々に候

◎問 落し話と申す類も出て候や

○答 純粹の日本の落し話の如きものハ之なき様に候へ共時々妙な滑稽
演説をなすものハ現はれ出候是の滑稽演説者の顔をバ眞黒に塗り其他の
様子も都べて黒人に擬ねて打扮たるが多く候

◎問 手品輕業等は別に異はりし所も之れなく候や

○答 先つ似たり寄たりと申すへきものハ候へとも手際の鮮やかなる
ことハ彼地の方遙かに打ち優りたるやに覺ふ試みに其一例を申せハ一寸
したる前藝に手品遣ハ右の手に一尺立方位の小鳥の籠を持ちてシツク
と舞臺の前に出て一ト通りの口上を述へて又た舞臺より下り見物の中央
に進み茲にて己れの身体をあらため籠を調ふる事杯ありたる末彼の小鳥
籠を左の手に載せ右の手にて籠の上を提けたる儘見物のマツタウ中に
立して忽ちヤット叫ぶと思へハ如何にまけん彼の籠ハ今で上下飛翔居た

品類通我奇違
之歐者是邦亦
奇州豈夢亦妙
成手特妙有然亦

る小鳥を籠めたるまゝ雲ともつかす煙ともつかす何處に逝さしか影だに
留めず是時手品遣の前後左右ハ悉く見物にして頭上に照れるハ赫灼たる
電氣燈瓦斯燈のみ又た今ま一例を申さハ舞臺の中央に一枚の新聞紙を展
べ布さ其上に一脚の椅子を置き此の椅子に年頃十六七歳の娘を腰掛けさ
せ娘の頭より紫緞子の大袂を蒙ふせて全身残るくまなく蔽ひ了るなり斯
く蔽ひ了りたる處にて一寸口上を述へ彼の椅子の傍に近づく是時紫の袂
ハ娘の全身を其形儘に罩み居れハ娘が少し小ゆるぎするまで袂の波だつ
工合にて明白に分かる斯くて手品遣ハ其傍に近づきて其左肩の處に立ち
姑く呼吸を計りて彼の娘の頭に手をかけつゝヤット叫ぶや電光石火袂も
娘も消へ亡せて残るハ例の新聞紙を踏みてイめる一脚の椅子のみなり是
等ハ眞に有りふれたる手品にて奇にもあらぬハ妙にもなければ同し事本
がら之を日本の繩拔杯に比すれハ品よく手綺麗に覺ゆる事に候尤も其中
ハハ鳩杯の小鳥を使ふて車を曳かせ字を讀ます等日本の山雀使ハ其細
を同ふするもあれと兎に角に器械仕掛の巧みなる或ハ手品に色々の巧も

出来ることと存せられ候又た輕業も其身体のヨナシ熱練の日本と左して
甲乙もあらぬやに相見へ候共道具立ての宜きかため自然見優りする心地
あるを免れす尤も身体の働きに就て申すも日本の輕業師の何となく身分
に不安心氣なる面色危ぶみ苦勞する氣なる態度をなすこと多く見物をし
て動もすれの一種の快からぬ感を作さしむること少からざるに彼地の輕
業師の常に顔を怡らけ坦然として左も平氣そらなる風をなし居るの大に
看よき心地致候

◎問 辻馬車の趣は如何に候や

○答 英國辻馬車の立派なるの初遊の余等にて甚た目に留りて覺へたる
事に候辻馬車に二様あり一は四輪附の者にて我邦の勅任官杯の多く用
る箱馬車と同様なり前後相對すれの四人の坐ること出来る様なり居る
もあれば又た通例の正面に一人か又の二人双坐と申すを常とし二人以上
となるるとき其以上の人が馬と背合せに坐るべき方の腰掛の常にの上
に疊みあけてあり入用の時ならて其棚を仰るさる様せるもあり第二

の二輪附の者にてハンソムと稱する一種異体の形なり是に御者の座が
尋常の馬車の如く前面熱馬の後邊にのめらぎして人の乘坐する箱の背邊
にあり箱の背邊の上部に瘤に似たる小さき四角なる梓つき居り御者の茲
に車の天井と己れの頭と平行せるくらゐの位置をもて腰掛居るなり左れ
の手綱の馬の轡より御者の手まで恰も乗客の頭上を越して通じ居れり箱
の入口も尋常の如く横側にいつき居らすして前面に開き戸あり其開き戸
の乗客の膝頭より少し高き位の半扉にて乗客の乳以上の開けはなしなり
故に坐り乍らにして前面を見はらすこと出来るなり尤も四輪附の方な
りとして前面に當る處の上部をガラス窓になしあるが故必しも眸を放つこ
とのならぬにのめらねども一段高くなりたる御者の座杯の陰ありて随分
鬱陶しと云への鬱陶し故に此點を申さばハンソムの方大に騎目の快わ
りとすべし要するにハンソム形の一寸輕便の輕便なからに零式に屬する
方にて辻待の分の外抱への馬車杯にの見受けることなき様なり元來此の
形の昔し英國のハンソムと云へる男創めて之を工夫し出したるより即ち

其人名を冒せて斯くの呼ぶ位にて英國が本家なり左れの倫敦にて尤も多
 く此の形を見る事に候
 巴里の流石に華奢の都だけありて辻馬車までも夏冬によりて其差あり冬
 分の箱馬車を用る處を夏時にい重めに母衣馬車に易ゆるなり母衣馬車の
 御承知の如く後邊より母衣立ちかより居り前半の打開き其狀恰も扇なき
 籠の如きなり之に年若き婦人杯流行を競ひし盛裝をこらして端坐し彼の
 シヤゼリーゼの廣大通りを馳騁すさまの一段の觀物なり巴里にての公
 園の規則倫敦と異がひ辻馬車をも勝手に其内に乗入るゝこと出來るが故
 空暖かさ氣節となれの夕方よりの抱馬車辻馬車相混して老少男女を打載
 せつゝ彼のポアドブローンの公園に越むくものシヤンゼリーゼの大通り
 より絡繰さて引ぬ絶らき有名なる凱旋門の恰も此の道筋の衢に當りて巍
 かく立ち居るが故試に凱旋門上を攀登りて門の高さの直立一百五十二英
 尺畧は我が三十間許りなり屹と向を見ぬたせの幾百となき許多の馬車の
 相駢びて四行五行となり各行又た首尾相接して陸續と公園の入口を指し

倫敦

て進み行く有様の恰も糖塊を臭きて聚まり來る蟻の群を視るか如きなり
 他處にての餘り看難き景色と存候
 伯林にて一寸異様に覺へたるの母衣馬車に上下の二々通りありて下の方
 の物体に武骨にて綺麗ならず又た其品位を分つためよや前面の窓ガラス
 (前後の母衣合せたるとき窓となり疊みたるときは御者と客座との界板と
 なる)上等の方の色無し下等の方の色付となり居りし事に候
 日耳曼旅行中フランクフルト(南部日耳曼中第一繁昌せる商賣地)の近在に
 ての牛に荷車を牽かせる者を段々見受けたり其牛の使ひ方の日本の如く
 鼻孔に「ハナグリ」を貫せる所の法に異なりて單に双角の根を約なり其綱
 を執りて操縦をなすなり大抵の二頭立ちにせるが多かりしが一本の棒を
 横たへて之に二頭の角の根を結ひ付け以て按控の事をなせり又た此の邊
 の田舎に這入りしに或る處にて犬に車を牽かせるを見受たり是の往々あ
 る事の由にて後ち伯林の町中にては幾度か之を目撃たり犬の事なれは固
 より大きな車を得牽く筈もなし只た小さな車に小さな物を載せて牽き

行く其傍らにの必ず又た一人附添ふて行くなり日本にて云はゞ丁稚小僧が袱包を之に牽せて用達しに出掛ると申す位の處なり何分に馬の勿論牛にせよ犬にせよ身体魁偉して強健く色々の働さに堪へることの出来るの羨むべき事と存候

◎問 御話しの音楽場の建物は如何に候や

○答 早く云ひ劇場を小さく致したるが如く仍復正面に舞臺ありて其の両端より半月形に輪づくりて見物の席あり劇場と異ひ候の劇場の如くに棧敷幾段もく重なり居らす尤も其場の大小によりて色々不同もある事ながら先づ棧敷の二三層しかなさか通例に候劇場の壯麗なるの申すまでもなき事なれ共是の奇席なる音楽場にて少し場處柄に至れり其華奢なる事初遊の者の目を聳かすことなり一寸致したる事ながら場中の廊下に致せ一切厚きブク／＼したる敷物を布きありて如何に下品なる靴を穿きて這入る者も決して歩行くにつれてキウ／＼ギシ／＼と音の發する心配なし物事不紊内なる時の妙なる間違も起り勝ちなるものにて明治の初年洋服の

味々居士
日我人
之好奇甚
矣哉

味々居士
日何等漢
見何事漢
戲何事漢

流行はじめ頃如何に誤りけん靴の歩行くにつれて音の發するを善しと致し鳴革杯と稱し態々一種の革を底に嵌めて迄も音を發さんと勉めたるものなり現時の固より斯る事もなけれと誠に顛倒したる話にて彼地の作法にて靴の音の致すの甚好まぬ所なり佛人の物語と覺ふ嘗て日本に遊び去に最初本船よりハシケに移りて陸に近づきたる時日本なる國を始めて目撃する共に第一に奇異不思議に感したるの岸上を往來致し居る男女が都て歩行につれ其の脚底にて一種の音楽を奏しながら徘徊せる一事なりさこの話あり成程靴にてさへ其音が發つの上品の禮とせざる風俗の中より來りて彼の立派なる婦人君子の遠慮もなく駒下駄足駄の類をカラ／＼コロ／＼と曳き鳴し往來するを見ない驚きたるも無理からぬ事と存候

音楽場の類の何れの國にも之れあることなれとも右の重みに英國を申したるものなり又倫敦に水族館(アクウ、リヤム)と云ひ聞こへたる人寄せ場あり是の元と字面の通り水族を養ひ貯へて公衆に觀する所にて水族館と稱するの他の博物、展畫等の諸館同様各國の都會／＼にも固より多く之れあり

る事なるが倫敦の分り獨り其趣を異にし其建物も至て廣大なれり其振合も宛然別にて肝腎の水族の唯た斯の廣大なる建物の内述の一方の壁際に一ト通り陳べあるのみにて其の中央の豁然と打開きたる大廣庭なり其正面の中央に一舞臺を構へて仍復音樂場同様種々の藝を演し居れり是の藝の水族館の附物としありて別段に機數を取るにあらざるより外立ち見の人々の勝手なり其他時に隨ひ是の庭内を借りて色々様々の觀世物を興行するものあり恰も舊の淺草奥山と云へる趣に似たり之に加るに種々の賣物店茶店酒店料理店に其中羅列し夜分の賑かさの言はん方なし水族館にて毎夜點す瓦斯の火口無慮一十萬筋と云へり左もあるべし館内の一面螢籠の如く耀やさわたれり然れども是の水族館の斯く人寄せ場となり居るに從て身元宜しからぬ賤業の婦人杯も多く此に入込み立交り居るが故少しく体面を構ふ士君子にありては水族館に繁く出入する杯との事の餘り申すを喜ばぬ方に候

◎問 音樂場に限らず都へて劇場等にて演ずる躍所作事

の類は如何なる模様にて候や

○答 凡べて躍の手振り一寸見物したる所にては簡易にて變化の少き者やに存候日本の流義より云へる躍の手は唱歌の意味を代表するものにて眠ると申す歌意の時ハ腕を由げ數へると申す歌意の時ハ指を偲ふる杯都て歌意に應じて一切の能度を定むることなるに西洋の躍ハ更に斯様なることなし而三年前日本に游びて頗る好遇を受けたりと云ふ英人某が其著のせる紀行に種々日本の風俗を嘲り記せる中新富座にて貢の芝居を見物去彼の古市の躍の處に至り其の躍の手の異様にて變化なき旨を説き居たれど日本人の目にハ西洋の躍も随分異様にて變化なく見ゆるなり左れと斯る議論ハ置き西洋の躍の日本と異なるハ躍の地と稱すへき歌を唱ふことなきと從て其手に意味を代表することなきと是れなり先つ一寸尋常の振合を擧て茲に云はゞ多勢の躍子が五人十人乃至二十人三十人宛各々對の衣裳を着け幾組となく組數人數の多少ハ其掛りの大小によりて勿論其差あり次ぎく現はれ出で一ト組宛手を揃へて躍り後にハ二組三組と

諸組打混して躍る其間くを計りて他の躍子共をの周邊に片寄せ首魁とも云ふへき一人が例の腰蓑の如き輕羅の裳を着け獨り舞臺の中央に出て躍る是の一人躍と組躍との入れ違ひくに躍りたる末舞臺總躍となりて終るなり扱て其躍の手ハ單に手を廻し腰を捻ねり足を振りて走り回るに過ぎずして何の意味もなし唯た其賞玩すへき點ハ身体輕捷にて手足活潑毫も重もた氣なる所なく一人躍りの巧なるに至てハ身体輕捷として空を歩するかと思ゆる計りなり組躍の方ハ別して容易にて唯た其多勢が齊しく揃ひの手にて躍ると申す處に文章の存することなり凡そ何てもなき手振にても多勢齊しく揃ふて之を演ずるとさハ其間に自然の風致を生するハ人類限世界天然の規則に候

又今一つの異處を申さハ日本の躍ハ彼の多錢善買長袖善舞の諺の如く衣裳のヒラくゾロくしたるに因て其態度を取れども西洋の方ハ衣裳ハ其彩色をなすのみにて態度ハ重もに眞の四肢のコナシに因て其趣を取る様なり左れハ西洋の躍子ハ手ハ手足ハ足と其形儘を露ハす衣裳を重もに

用ひて緩裙潤袖ハ着けぬ事に候

◎問 西洋諸國の屋根の瓦は日本と同様なりや

○答 概して謂へハ西洋の屋根の瓦ハ二種の區別あり其一ハ日本の如き焼瓦なり他の一種ハ日本にて學校生徒の用うる石盤と同様なる薄き石片を用ゆる事なり第一種の焼瓦の方ハ古くより西洋に行ハれし者と思へ佛曼伊等の古き田舎の小都府に至り見れば多く皆な是の焼瓦の方を用居れり而して諸國の繁華なる大都府などにて稍や新らしき建築及び相應なる家屋を見れば通例皆石瓦の方を用ることなり

英國ロンドンなどにて一寸見たる節ハ屋根の瓦ハ皆鐵或ハ銅にて張たる者と思ひ居たりしに何様余等の見聞せる所ハ成る可く精しく之を我國人に報道せんと心懸け綿密に之を調べ見るに至て始て今迄金屬の薄板張なりと思ひし屋根ハ左にあらすして多くの皆石盤瓦なる事を見出せりロンドンなどにて用る者ハ先づ其幅一尺或ハ一尺五寸四方の者にて其平面ハ甚だしき凸凹なく先づ滑かに平たき方なれども左ればとて尋常の學校石

遷軒日未
行而一所
之下一類
新也

盤杯程に滑かに磨きたる者にのあらき此の薄き石片を以て一面に葺きたる事にて其合せ目く少し石片を薄く削り双方の端を重ね合せたる者なれば一寸遠方より眺むれば恰も金屬にて薄く張たる屋根の如く見ゆることなり故に等閑に見過す者ハ之を金屬の瓦なりと思ひ誤る者も有りしならんと想像する事なり

又此石盤瓦も國々に由て其形種々の相違あり佛國などの相應なる建築にハ一尺ばかりの鱗形に切りたる者を恰も鱗の如く重ね上げて疊みたる屋根もあり又曼國のライン河の上流に浴ふたる都府及びフランクフホート近傍の田舎に至れば此鱗形の石片の大き僅に三四寸にて而かも其丸き形ハ種々の不規則なる者を鱗の如く重ねて屋根を葺きたる者多し又家に因りてハ其屋根のみならず前面側面の壁をも一面に此石片にて重ねたる者あり其狀ハ恰も日本にて板疊を用ふる場所に板の換りに此石片を以て壁地に重ねつけたる者なり然れハ日本の家などに比すれば屋根と云ハ家の前面側面と云ハ此石片の重量丈幾許か餘分の重量を擔ひ居ることなりと

送軒日我
邦瓦只在
者只在此
而巳阿々
物此州

見ゆ斯く石片を以て屋根のみならず四面まで掩ひたる事なれば日本などの如く大なる地震ある日にハ必ず其度毎に多少の損處あることならんと思ゆるとなり扱て斯く一面に石片を以て之を掩ふたるが故に遠くより眺むれば恰も猶は灰色のセメントを以て葺きたるが如く見ゆることなり又其燒瓦を見るに不手際にして葺方の不規則なる事も甚だ日本に劣れり日本の事物を西洋諸國に比較すれば何事も何物も唯た我れの劣れるを見るのみにて残念に覺ゆる事多きに只燒瓦の一事に於てハ日本の方大に優れるが如し第一先つ瓦の形の正しき事も彼地の者ハ日本の者に及ばざりて甚だ脆粗なり又其色合も素燒の如く赤色を斑に帯びて日本の如く定りたる色なし左れば色と云ハ形と云ハ是の二點にかけてハ日本の方甚だ立優りたる者なり斯かる脆粗の瓦を以て葺きたる事なれば彼地の屋根ハ赤色に見へ又日本の如く一行くに整然と條目正しく並び居らず左折右曲て見ゆるなり万事何事も正しきを好む國柄にありて何故に獨り屋根瓦の一事のみ此の如く見苦しきやと考ふるに蓋し彼地の家屋ハ總体に高くし

て往來人の目に只三階四階の軒端を見るのみにて其屋根を近く見る
 と能ひき只遠方より之を眺ることの出来るまでなり左れば通例市街の家
 の尙更の事少し高き家ならんに其屋根の先づ其家の化粧の中に入りぬ
 と云ふの有様なり然るが故に自然と其瓦などに注意すること薄きもの
 と見ゆ(左り乍ら公會の家屋或の寺院其他有名なる建築の如きの屋根より
 土臺に至るまで念に念を入るゝ事なるが故に其屋根も亦尋常の赤瓦など
 を用ひるを頗る注意する事なれ此類の建築の取除けての論と知るべし
 然るに日本の家の甚だ低く去て皆な其屋根を望み見らるゝが故に屋根及
 び瓦などの其家の裝飾の部類に加ふる事なれば自然と屋根瓦にも心を用
 る斯く西洋諸國に優るに至りし事なるへし尋常の家屋の瓦の日本の方が
 遙かに西洋家屋の焼瓦に優り居ることの余等の保證する所なり
 近來日本に行ゆるゝ亞米利加瓦とか云へる一種の瓦あり右の歐洲諸國に
 ての餘り見懸けざる様に覺ゆ唯亞米利加に於ての處々にて見受けたり然
 れば此瓦の型の近來の發明にて亞米利加より始まりしものにあらざるか

と思ひる然れども余等の耳目の及はざる所に西洋諸國の中にて稀に
 て之を用ふる者あるやも知れき

◎問 道路の有様は如何

○答 西洋の道路の概して四種ありと云ふも可なり先づ第一に日本の
 銀座通り杯の如く通例赤土様のものゝ其儘に固りたるものあり又第二に
 の石疊なり其仕方日本にて眞石と稱ふる堅き石を煉瓦の如く割りたる
 もの(勿論四面共に煉瓦の如くスベ)と磨きたるものに非ず形ちの煉瓦
 の通り乍ら其面の粗らくして所々に少々つゝの高低ありと知るべしを以
 て銀座の人道を煉瓦にて疊みし同様に一面に敷き詰めたるものなり此石
 疊道の舊來より諸國に行われ來りしものにて少し都府らしき處に至れば
 其町々の如何に道幅の狭くも必ず石疊ならざるべなし此方法なれば雨水
 の爲めに通例の土道の如く所々を洗ひ流されて高低を現はす如き處もな
 く萬端都合好く丈夫至極のものなれども余等の如き旅行者杯の爲めに
 甚だ好ましからぬ道なり如何となれば馬車杯にて此上を通行すれば其が

日本各埠頭
 不潔一讀
 者有莫不
 於道路收
 其日之須
 一以爲換
 形可矣

タクト揺れて頭腦に響くこと實に甚たし銀座通りの如き土道を車にて
 驅ると此石道を驅るとの實に乗客にの非常なる苦樂の差あり此道を驅り
 行くときハ辻馬車にても其揺れ甚だしきことなれば況してや乗合馬車杯
 にて斯る道を通行する時ハ頭痛を惹き起すかと覺ゆる程に動揺し且其ガ
 タクと軋る音も亦た甚た不愉快千万なり此一事ハ蓋し日本の車にハ未
 た曾て經驗あらざることなるべし又第三にハ煉瓦の形ちの如くせる木
 木口を道一杯に敷き詰めたる物にて木道と云ふべきものなり木道の普
 杯をなすを立寄て見るに其方法ハ先づ初め道の地盤を敲き固め然る後ハ
 煉瓦形の木口をヒシと敷き詰め其間に何か流し込みて空隙を防ぎ然る後
 に極細かなる泥を薄く敷く散しあるが如し然れども諸車か其の上を軋るが故
 に此木口ハ自から現れ居る場所も多し又此木口ハ悉く皆なチャンを塗り
 ある故に往來を始むる前ハ道の色の黒く見へ居れり此木道ハ廿年來諸
 國にて造り始めたることにて追々ハ用ひらるゝ有様なり又第四に日本に
 てタキと唱ふる如き種類の道にて一種のセメントにて道一杯を塗り詰

めることなるが其燥く迄にハ時間を費やし又其間にハ雨天もありて道を
 損ふの懼れあれハ甚た此道の難澁の如く思ひたるも其修復を爲し居るを
 見れハ大なる熨器にて其道の上を燥かせ居ることなり熨器の形ちハ恰も
 彼の御影石の圓さ道ナラシ機械の如く鍍にて圓く出來居る其中に火を入
 れありと見へて此圓熨器を徐々と一方より當れハセメントの道の漸々に
 燥固まる事なり左れハ初め余等が難澁なるものなるべしと思ひしハ甚た
 迂濶なりしを悟りたり此第四に擧げたるタキ道の諸種の中に蓋し第
 一等のものなるべし大道をタキにしたることなれば徒歩するにも心地
 好く又如何なる種類の車にあれ此道を驅る時ハガタクと音もせされハ
 些かの動揺もなく車ハ澄みかありて進むことなり
 右四種の中にハ英佛曼伊米の諸國に最も多きハ石道なり其次にハ木道な
 りタキ道の最も少きものなり之を用ふるハ先づ佛都巴里の目貫きとも
 云ふべきブールバードの諸街ぐらいのことなり又英國にてハ中央市區シ
 チーと唱ふる部分に限ることにて適宜に木道をタキ道に改め居れども

直道而國路馬路
如所之是各軒
如砥謂道明日
失其大路男人

尙は未だ十分よ之を用ふるに至らき又石道の所の佛にても英よても漸く
と木道に改まり行くの傾きあり然れハ西洋道路の後來の運命を豫言すれ
バ今日石道の所の木道に變し木道ハ又た次第にタ、キ道に變じ行くべき
なり

又英佛の重なる都府の中にて通例の場所ハ皆な馬車道と人道との二つ
に分かれ中央の廣き所の馬車道にて御側の狭き所の人道なること我銀坐
通りと同様なり此人道ハ巴里の中央にてハ専らタ、キ道となしあり倫敦
にても同様にて重なる場所の人道ハ卒ねタ、キ道なり又中央より少し
く隔りたる町々の人道ハ英國にてハ人造石を以て疊みあり此人造石との
粘土を集め人造の石を拵へたるものにて其幅ハ通例三尺四尺位のもの
多し倫敦杯にてハ塲末の町々迄も人道にハ皆な之を用ふることなり此石
ハ人造乍ら意外に堅きものにて一寸碎けべくも見へぬ程のものなり去り
乍ら人の出入の繁き所の靴にて踏み踏らされ居る所も多し之を以て考ふ
れば日本にて眞石と唱ふる程の堅さハ決して之なきものなり又見たる所

ハ通例日本で砥石色と名付る黄茶色をなし居れり右ハ英國に限る事にや
巴里杯の町々の人道にハ餘り之を見受けざる様に覺ゆ日本杯にても銀座
の人道をタ、キ道になすこと出來難くんバ此人造石を造りて用ひたらハ
便利なるへまと思へる

伊佛曼杯の小都府を旅行し終日濼車にて揺られたる上停車場に到着し疲
かれたる身軀を以て宿屋の手馬車に乗せられ行くに當り前述せる石道の
上をガタ／＼ピリ／＼と揺られ行くの一事ハ旅行者の爲めに難義なる一
事なりしなり大陸の古き小都府にハ別して此石道多く車にて之を乗り行
くにハ實に難至極せり

◎問 通例の家屋にて家の規模及び窓の有様は日本の西
洋家或は横濱神戸などの居留地の西洋館と左までの相違
なきや

○答 横濱神戸の西洋館など、差したる相違ハなければども稍や其趣きの
異なる箇條なきにもあらず先づ倫敦などの中以下の家の有様を問へば真

行五六間を通例とし間口の十間より二十間迄の者を一ト棟とし此一ト棟を三四間口に仕切りて一軒の住居となす事なれば三四軒を合して一棟の家となり居るなり扱家の四面に總て煉瓦の上をセメント壁にて塗り色の其儘セメントの灰色の者多し而して前述せる如く通例三四階或ハ五六階までありて其一階毎に居留地西洋館の窓の如く細長き角なる窓を二つばかり宛わけあるを常とす最も間口の廣狹に由て或ハ大なる窓一をわけたる者もあり又小さき窓三ツを設けたる者もあり

往來より一段低き下間の夜中杯ハ不用心なるが故に窓の外に鐵格子を設けあるか又ハ雨戸を閉つる様になしある者も尠からず又往來と等しき平間の窓も往來に近くして不用心なるが故に家に因てハ扇の雨戸を閉る様になしたるもあり然れども一階二階三階四階に至てハ大抵雨戸を用ゐぬが通例なり右ハ家甚だ高くして盜難も亦少なきが故なるへし而して右の窓々にハガラス戸を嵌めたり是れも倫敦にてハ通例窓一面の大ガラスを用ふるなり又其厚さも日本にて用ふる尋常のガラスの三四位もあるべし

と思ふ程に厚し日本にハ厚ガラス少なきが故にガラスと聞けば毎も脆き者の様も考れど通常ロンドンの家の窓などに用ひある者の實に厚くして丈夫なることなり又近來建築せる住居家ハ大概窓の戸を上下二枚に分ち外面より之を見れば窓にハ其中位に一の字の仕切ありて下のガラス戸を上にあぐるか又ハ上のガラスを下におろすかのみならず様に工夫せり故に窓のガラス戸全部を一時に開くことハ出來がたき者なり

◎問 往來の人より家内を見徹され或は日光の室内に差込を防ぐ等には雨戸なくては不都合の如く思はる又雨戸ありとも此を閉むれば室内甚だ暗くなるの恐れあり其邊ハ如何

○答 外面より見徹されぬ爲めにハ窓飾に室内に薄き紗の如き者非常に高價なるもあり又粗末に去て非常に廉なるもありを設けありて此薄き布を垂るときハ外貌より見徹さるゝ恐れもなく明光も十分に取るゝ事なり又夜分など家内の者の寢床に入る時或ハ日光の差込を防がんとする時ハ

ブラインドと名くる木簾を下ろすことなり此木簾の通例窓の内部に設け
 ある者にて幅三四寸と覺しき薄板を幾枚も綴りて簾の如く拵へたる者な
 り是を巻上ぐるどきの疊まりて四五寸ばかりに縮まり是を下ぐれば窓一
 面を塞ぐ様になり居れり而して此の薄板の木簾の羽重ねになりて下にも
 向のしめられ上にも向のしめられ隨意に其の重なり方を變ずる様に出來
 居れり横濱の停車場拵にて先年之を用ゐるありしを見掛けたり此木簾の雜
 作もなく出來る者にて甚だ便利なる工夫なり倫敦の住居家にては通例何
 れにも之を用ゐる事多し然れども又此木簾の外に唯厚き布を垂れて窓の
 日光を防ぐ様になしたる者も少なからき是の濃赤色又の濃綠色拵の布を
 以て之を造り紐にて之を巻き上げ或の引下げる様になすこと通例なり前
 記せる木簾の如何に手際に拵へるも十分ならぬ譯にや廣大なる建築美事
 なる住居家などにては此布簾を用ゐる者の方稍や多きが如し序なれば爰
 に記載すべし中人の通例の座敷にハ皆其窓に一種の窓飾の長幕ありて絨
 織の切地を以て之を造るハ是の長幕の實際之を開閉に用ゐる事ハ至て少

なく通例の單に其窓内の趣を添ゆるが爲めにするものなり其形の先づ窓
 の中央より右に一つ左に一つあり二つを以て窓の上より下まで掩ふ様に
 なす之を右と左の左右に絞りわけ種々の飾りを其絞る所の組につけあり
 是ハ通例の部屋にハ無くてならぬ飾にて窓内大切なる一部分となり居る
 事なり

又窓ガラスも少し宛其趣きを異にすることなり佛國の都府に至り見れば
 其窓ガラスの多く兩方に開く様になしたる開戸にて英國の如くに上にも
 ぐるか下にさぐるかの外の前面に開く事の出來ざる様なり居る者の甚だ
 稀なるやうに見受けたり而して又佛國にてハ通例其ガラス戸をハ三四の
 格子にて仕切り其一格毎に別々の一枚ガラスを嵌め四五枚のガラスを以
 て一枚の戸となまある者多く英國の如く一面の厚ガラスを以て一枚の窓
 となせるハ稀なる様に覺ゆ此れ兩國の風俗の同しからざる一なり而して
 又全体に英國の方ハ不細工なる程其ガラス厚く佛國の方ハ稍や薄き方に
 見へたり又伯林の如きハ通例の住居家ハガラス窓ハ佛國と其趣を同うし

新日此
東西
各地皆同

開戸の方少なからせ又一種の便利なるの通例其窓の上段をハ蒲鉾形に割て此處より一尺内外の處に一の仕切をなし此仕切より下をハ例のガラス戸の左右開きとなり居れり而して是の左右開きの上即ち其蒲鉾形と仕切との間にハ亦たガラス戸の小開きを設けありて其下なる大ガラス戸の開閉に關せ此上段の蒲鉾形の處を開閉し得る様に工夫しあれり故に若し風の入り過ると覺ゆる時ハ下なる大ガラス戸を閉め其上なる一尺内外の小開きを開いて少しく空氣を通づる事も自由なるべし此等の英國などに餘り多く見掛けざる工夫にて至極都合宜しき譯なり

左りながら英國とても少し田舎に往き觀ればガラス戸の厚みも随分薄き者尠からず先づ都會の尋常の住居家の上に就て斯く國々を比較したる事なり一寸考へればガラスハ破れ易く往來に窓々が立並び居ることなれば瓦礫などを擲ちて容易に傷けられべき譯なるに斯る惡戯をなす者なきハ感心の國柄なりと思ひ居りしに少しく倫敦の塙末の市街に至り見れば其空屋に限りて窓のガラスハ散々に破れ居る者多し蓋し惡戯の子供が人の

在らざるを窺ひ喜んで瓦礫を擲ち之を破る者なりと見ゆ家に因れば其ガラス窓の一階より三階に至る迄美事ヲ打破られたる者多し然れば隨分惡戯兒童の多さハ何處も同様の事なるべし

◎問 西洋家は其壁も厚く扉も堅固にして締りよしとの事なるが若し他人の宅を訪ふ時に於て取次を請ふにハ鈴にても鳴らす様な仕掛になり居るや如何日本の如く頼むと云ふも不似合なるべし

○答 如何にも鈴を鳴らす様になま居る家もあり先づ英國の事を以て申さば同國人ハ何事も不便利なき以上の古風を存するを好む者にや茲に一種の工合あり先づ中以下の通例の家ハ其入口の扉の前面に丁度手の届くべき高さの處に手ごろなる相應の引出しの環の如き金屬垂下り居れり英國にてハ之を戸蔽(ドアノック)と名く來訪する人の先づ此の環をカタクと鳴らして戸を敲くことなり然るときにハ取次人出で來るを通例とす又此戸敲き方にて此の電信とか郵便とか是ハ來客とか區別自然に出

我既類
戸敲者
亦往

可利不之

來居れり其譜調を雨への先づ電信ならバカチと高く一と聲敲くことなり
 又郵便ならバカタ〜と二た聲敲くことなり又通例の來客ならバカ、
 カと初めを刻んで後に大きく一二遍敲くことなり右の甚だ便利なる區別
 にて何時の頃より斯る事の生せしにや先づ電信なれば下婢も急いで之を
 取りに飛び出すべく又郵便なれば左程急ぐにも及ばせ又來客ならば取次
 人も餘り見苦るしき姿にての出です一寸前垂にて手にても拭き取次に
 出るの便利あり右の敲き方の規則の他の諸國にの嘗て是なき様に存せられ
 英國に限る様に見ゆ先づ何れの家も通例の右の戸敲の外に零入口の横の
 處に鈴組あり處處向の小商人の來る時に之を曳き鳴すことなり例せば
 石炭屋青物屋牛肉屋杯が毎朝用を聞きに來るときは毎も此曳鈴を曳き知
 らする事なり

右の曳鈴の近來にて稀に電氣仕懸を用ゐる者もあれども先づ通例の鉄
 線を延き其先に能く鳴る鈴を付けあるを通例とす斯る曳鈴の便利もある
 者を英人が古風に戸の前に戸敲き環を付けるも畢竟の不便利を感せざる

限りの從來の古風を其儘に存するの氣象を察するに足れり又右の戸敲
 き環の素と外より戸を開閉する時に取手に用ゐたる者を戸敲きにも兼帶
 し居りまか次第に世と共に推移りて今の戸敲きとのみ變じて外面より戸
 を開閉する爲の取手の別に生じたるなるべし初めて英國に遊びし人の其
 當座右の戸敲の譜調を知らせして甚だ困却することあるなり何にとなれ
 ば其曳鈴の家に因れば鳥渡目立たざる處に在りて之を見出すこと難く左
 れバとて外面より頼むと聲をかける譯にも行かさればなり
 佛曼伊等の國々にての前記せる如く戸に戸敲の環あるの殆んど見當らさ
 る程の事にて此等の諸國にての通例曳鈴の設ありて之を曳き鳴らして取
 次を頼む事なり又前記せる如く英國にての一軒〜に往來に向つて入口
 を所持し居るが故に差支なければ大陸の諸國にての一階一階を一家族
 にて取切り居ることなれば先づ其家に至れば諸家族の共同に用ふる一の
 大門ありて往來に面し居ることなり然れば一先づ此大門を開け貫ひて然
 る後に一階なり二階なり其訪のんと欲する所の家族の入口を又音のふこ

となり右の大門を開閉するに、一々門番が出て来るの勞を除き來客が門前より取次を頼むと、鈴を引く時の奥なる門番處より人の出て來らるまで、旨く門の戸を開閉する様に仕掛なしあり然れば外面より鈴を引き取次を頼めば人の無さに其戸の自からバタリと開くことなり

◎問 日本にて居酒屋と唱ふる如き酒店様のものも彼の地には之あるや

○答 然り先づ倫敦を以て申さば丁度日本の居酒屋とも云ふべき場合に當る酒店澤山之あり彼の地にて「バト」と唱ふることなり先づ酒店に至ると假定め其從來に面したる店の一面の障てガラス張りにて外より見透されざる様に飾消しガラス杯を人の丈の高さ位の所に用ひあり窓の上には葡萄酒ビール、ホイスキー杯の如き酒の名を一つ二つ横長く窓に張り付けあり借戸を開いて内部に入れば酒賣りの手代と客との間に机の如き仕切りありて此の仕切りの卓子の丁度腰胸の間位の高さなり此卓子の上には七八寸一尺計りの小き欄干のギボシの如き棒並ひ立てり手代の客の需め

に應し此の棒を抑ゆれば卓子の内部にて夫れくの酒出る様になしありて之を盃に盛り卓子の上に載せ客に與ふ然る時の客の通例立飲をなし出行くことなり故に酒店に至るとも徳利の如き物もなく又樽の如き物も見へむ唯仕切りをなせる狭き卓子の上に短き棒の並立つと見るのみなり故に甚だ手綺麗に見ゆ其酒の種類程卓子の上の棒の立並び居る譯ありバトと唱ふる居酒屋にては通例立飲みをなすことなるが又間に粗末なる椅子を列べあるものあり夫れすらもベンチと唱ふる造り付けの長き椅子多し一箇つゝ別々に椅子を置く者の甚だ稀なり又酒屋の内にバブリックとブライペーとの二つに別ちたるものありブライペーの少し体長き客の入込みの立飲を厭ふ人々の這入る所にて鳥渡仕切りて別構へをなし又バブリックと云つる方の則ち手代の見る所にて立飲みをなす場所を指すことなり英國倫敦に此居酒屋の夥しきこと實に非常にて少し中央繁華の盛場より隔たれば到る所の町々角の大なる店の通例酒屋ならざるもの稀なり人に目立つ便利を計りしにや不思議に酒屋の町々の角にあることなり借一

味々不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士
不問古東士

杯立飲みをなすも勝手なることなれハ鳥渡氣注けをなさんとする者ハ直
くに立寄り一杯飲んで出来ることも自由なり去り乍ら先つ通例の酒屋に
ハ身元ある人の餘り立寄らざる方にて少し場末の町々に至れば中等以下
の貧民の集會所の酒屋たるの有様にて甚だしきに至てハ男女打交り土曜
日の夜杯ハ押し合ふ程に此居酒屋ハ繁昌せざるものなし大醉の上クダ
を巻く暇アもあり買物を片手に提げ乍ら眞赤なる顔色にて出来る娘も
り下等の人民に至てハ此酒屋を以て己れ等の倶樂ハウスとし愉快を買ふ
の場所となし居る如く見ゆ
右の酒屋にてハ「ビール」葡萄酒ハ勿論「ポランデー」「ビスキー」等運ての酒類を
賣が上に又た「ラムム子」「ジン」「グ」「ビア」等をも併せて賣るもの多し故に夏分
市中を散歩し嘔の混く節ハ之に立寄るも隨意なり
酒屋のことを記する序に記し置べきハ西洋諸國と云へる内にも羅甸人種
と「トイトニック」人種の國ハ其酒の好みも自から諸國押し均て相違ある
ハ不思議なることなり先つ佛蘭西伊太利等の如き羅甸人種の國ハ先つ

第一に出来る酒ハ葡萄酒に定り居ることなり然るに「トイトニック」人種な
る英曼等の國々に至れば先づ第一に出る物ハ「ビール」なり一方の重なる
飲物ハ「ビール」にて一方の重なる飲物ハ葡萄酒なり是れハ著しき相違な
り故に巴里杯にても良き店にて注文あれば如何なる結構の「ビール」も持ち
來れども先つ通例の料理屋割烹店杯にて注文あれば「ビール」ハ甚だ下等な
る物を出すこと通例なり又葡萄酒を攪き「ビール」杯を注文すれば甚だ下品
なる客人の如く思われ少しく差扣ゆると云ふ趣きなきに非ず然るに「トイ
トニック」人種の國々にて酒と云へハ先つ「ビール」に取て掛るを通例とす葡萄
杯ハ女より外先づ飲む者なしと云ふ顔付きをなし居ることなり後來日本
ハ「ビール」國となるべきや將た葡萄酒國となるべきや今日にてハ些と「トイ
トニック」人種の「ビール」國となるべき様見ゆるが如何
前記せる酒屋の景況ハ専ら英に限りたることにて佛蘭西、日耳曼、伊太利等
にてハ別に斯る居酒屋様のものなし夫の珈琲ハウス（則ち茶屋と譯して可
なるべきか）が此酒屋の役目を勤むることにて此點に至れハ佛曼諸國ハ大

に英よりも都合好きことなり如何となれハ佛曼の珈琲ハウスにてハ通例椅子卓子等ろれハ備へり居りて如何なる田舎と雖も之に立寄る時ハ緩かど休息も出来カルタもひき將基もさし新聞をも読み談話をもなし得らる、様に並へあり故に一つハ珈琲を注文するのみならず如何なる酒をも通例注文し得らる、ことなれハなり然るに前記せる如く英國の酒屋ハ唯立飲みをなすを専らと拵へたるものにて佛曼の珈琲ハウスの如く緩りも寛いて休息するの仕組なけれハなり

尤も英國にてハ珈琲ハウスなきハあらねども佛曼の如き到る所に之を見りと云ふ譯ハ行かず極く繁昌せる町々にてハ佛蘭西の珈琲ハウスを其儘に寫すも鮮からず其体裁ハ甚だ相似たるものあり總て是等の事物に付てハ英國ハ佛國の仕組を學ぶこと少からず然れども尋常の町々にてハ最早固有の國風に従ひ無闇になし置くことなり

英曼佛共に珈琲ハウスにハ料理をも兼るもの多し料理屋ならハ通例一方を珈琲ハウスになしあるハ通例とす

◎問 酒屋の手代は男子なりや女子なりや

○答 双方共に之あるやうに見ゆ尤も酒屋に限らず近年英國にてハ女子に出来る仕事なれば通例多く女子を用ふることなり右ハ女子ハ天性物事に綿密なると又一つにハ其給金の賤さとに由るものなるべし前に記したる酒屋の如きハ幾んど皆な其手代ハ女子と云ふも可なる程なり尤も唯酒を注ぐのみのことにて別に体力を要する程の業にもあらねハ給金の賤さを注ぐのみに用ふる方便利なるべく又一つにハ客人に對して萬事丁寧にして愛嬌深さにも由るものなるべく其邊にハ定めて種々の意味もあることなるべし斯く酒屋の手代の通例皆な女子なるのみならず町々の郵便局の如きハ幾んど皆な女子のみと云ふも可なる程なり又ハ電信の取扱ひも同様なり右ハ故さらハ斯く爲せしものには詳らかならされども兎に角其婦人の一ト手持と云ふが如き姿なるハ目に留ることなり但し海外との往復を掌るとる中央大電信局或ハ倫敦市中七八ヶ所に設けある重立ちたる電信局等にてハ女子を使ひ居らざる者もあり然れば總体に婦人のみと云ひ難け

遂軒曰於
我國電信
局亦用電
信員其技
女爲其技

れども先づ町々の電信局丈にてハ婦人多しと云て可なり
 ◎問 彼地にも日本の如き菓子屋あることにはや
 ○答 然り随分菓子屋も多きことにて何處も同じ菓子屋の重みに子供を
 其花主となま居る様子なり先づ菓子屋にて賣る品物の種類を擧ぐれば第
 一にビスケット(ミルク入り或ハ生姜入り厚焼薄焼幾種類もあり)又ハチヨ
 コレート(を以て製したる者又ミルクを交へ子供に宜しき様に彩色したる
 生姜等の類なり是等ハ日本にて云へば都べて先づ干菓子(の部類に屬する
 ものなり)チヨコレート珈琲ミルク入りの菓子の形ハ日本の金米糰より少
 し大なる程の粒にて種々の形に爲せしもの多し又此外に日本にて蒸菓
 子とも云ふべき種類の者あり去り乍ら日本の蒸菓子の如く小豆と云へる
 ものを一切用ひざることなれハ其蒸菓子と云ふも玉子小麥クリームを材
 料とし軟かに之を拵へたる物にて先づ風月堂にて製したる軟かなる西洋
 菓子と相似たる者なり
 去り乍ら菓子屋の最も得意なる商賣ハ婚禮の節に用ふる一種の婚禮菓子

と名つくるものなり嘗て一どたび記載したる如く英佛にて婚禮の節にハ
 必ら老婚禮菓子と名つくる一種の菓子を飾り付ることにて其必要なる事
 恰も日本の儀式に島臺の欠ぐ可らざるが如きなり右の菓子の其價次第に
 て如何様にも大小あることながら先づ通例ハ日本のカステラと生姜入
 りのビスケットを混淆せる如き物質にて其表面ハ一面に白くミルク交り
 の砂糖を塗りて拵へるか多し中等士君子の家ならんにハ此の婚禮菓子の
 ハ五十圓も百圓も費すこと珍しからぬ事なり而して婚禮の濟し翌朝花嫁
 が手から此の菓子を裂き親類朋友に夫れハ進物となすなり右ハ縁起を
 祝ふ菓子にて貰ひ受けたる方にてハ之を珍重し賞玩することなるか多數
 の人々に分ち遣すことなれハ其一個宛の切れハ誠に小さなものなり時
 に因りてハ幅一寸長さ三四寸位なるものを分配せらるること珍らしか
 らす斯く儀式に大切の菓子なれハ菓子屋の重なる當込みハ則ち此の菓
 子にあることにて通例相應の菓子屋の店頭にハ必らず美事に造りたる婚
 禮菓子の二つ三つも並べあるを見るなり

通例の家にてハ晝飯或ハ夕飯に菓子を食べすることあり是等の菓子ハ通例
自分の臺處にて造る者多きことなるが又時としてハカステーラ標のもの
を菓子屋より買入るゝこともあり去り乍ら菓子屋の得意ハ先づ第一に婚
禮菓子第二に子供にして第三ハビスケットの類なり是ハ英佛の習として
夜食の茶の時分に大抵多く之を食べすることなり

◎問 倫敦にて賣り居る魚類は日本と同様なりや

○答 同様なるもあり又異なりたるもあり概して言へば通例の魚屋に列
べある魚の種類ハ甚だ少なし先づ重に鯉シタビラメ比目魚鯉最も多き
ことなり又最も多く是等の魚類を食べする事なり右の魚々の味ハ日本と異
ることなし又此外に鮭もあり鰻もあり然れども鰻ハ日本の者との聊か其
種類相違あるかと覺ゆ先づ日本の下等の鰻と海鰻との間の如し然れども
其色合全体の姿ハ先づ日本の鰻と云て可なり倫敦にてハ随分鰻をも賞翫
することなれど其料理法ハ三四寸ばかりに筒切に切りスチウをかけて之
を食す尤も鰻ハ其筒切の儘蒸たる者の如く見ゆ又其外にハ右の鰻をフテ

イになしたるもあり通例日本人ハ彼地の鰻の料理をば餘り賞翫する者少
し余等が諸國を遍歴する中其地在留の日本の朋友が鰻の料理を企てたる
事も鮮からず其中の一ニハ稍や日本の蒲焼に劣らざる程の旨なりしかど
も其他ハ何れも鰻の肉餘りに大きく且つ脂多くして腥さく何分にも日本
の鰻と同様にハ思われざりしなり

鰻ハ英佛杯にてハ殊の外珍重することなるが此鰻に二種あり其一ハ日本
の伊勢鰻と唱ふる者なり又他の一ハ日本にハ餘り見當らざる者にて伊勢
鰻に蟹の如き大なる爪を生したる者なり先づ此方を珍重する事にて其肉
の味も亦日本の鰻に比すれば甚だ勝れりと覺ゆ日本にて鰻ハ左まで上等
の魚類との思ひざりてハ彼地に在れば余等までも自然殊の外之を珍重す
る様なるハ吾ながら不思議なることなり

又倫敦などにて牡蠣を珍重する事非常なり倫敦市中にある牡蠣も英國の
海岸に生むるあり又亞米利加佛蘭西葡萄牙より輸入する者あり然るに地
の牡蠣ハ高價にして最も珍重され葡萄牙の産之に次ぎ佛蘭西亞米利加其

送軒曰與
廣島船
其趣及味
如何

次に居ることなり牡蠣の時節始まる時に通例拵指の先程有るか無し
者十二(一ダース)五十錢以上なる者あり少し下りて三十七錢五厘二十五錢
内外となる年々牡蠣を葡萄牙、佛蘭西より輸入する金高も相應に大なる事
なりと聞けり牡蠣の時節至れぬ處々の安料理店の前に牡蠣の時節始まり
と書ける看板を見る事甚だ多し英人の牡蠣を嗜むこと甚だしき知るべし
此事に詳らかなる人の話に英國の牡蠣は日本の産杯と少し其種異な
るとの話もあり果して然るや否や
中央魚市場に至れば日本同様の鱈の時としては是れある由にて日本人が
時として日本料理を企つる節に此を買込むことなきに非ざ然れども何
となく其味甚だ劣りし様に思われたり又乾魚の類は甚だ多し鱈小鱈の
類皆手奇麗に店前に列べあること日本に異ならず只た此等の乾魚の乾し
方如何にも手際にて籠甲の如く透はりて見ゆる程の者もあり日本の乾魚
の其表面に鹽を吹き或は白く或はシトくと濕り居るに比すれば見たる
計りにて既に大なる相違あり

◎問 野菜類は如何

○答 右の日本の者と違ひ居ること鮮なからせ且つ西洋料理にて用うる
野菜のみなり時節に由てそれくの相違はあれども先づ通例の日本にて
サラダと稱ふる苣の一種及びキヤベージ。コーリフラワア。球葱。及びトマト
。馬鈴薯の類なり日本に通例の葱の種類は之れなし又蕪菁はあれども蘿
蔔なま又甘薯なし時として二三の甘薯を稀に店頭にて見懸ることあり
り一日日本の甘薯の旨味の戀しさに之を買取りて歸り下宿屋の主婦に吩
附て是を焼き食事の時出さしめたるに恰も日本の腐れたる芋の如くビシ
ヨくと水氣ありて甘みも更に多からせ其儘打捨てしめたる事なり其後
聞合すに甘薯は英國杯にては出来難しとの事なり果して然るにや又前記
せる外にある者のアスパラガス(西洋獨活)右の佛國にては品多くして廉な
るに英國にては非常に高價なる者なり故に餘程其時節の末にあらされば
中以下の家にては之を食すること能はせと言て可なり

◎問 彼地の湯屋の模様は如何

送軒曰浴
場其宜如
得國浴如
我野鏡
之寫眞

○答 湯屋にも上中下種々の差のあれども先づ中等の者より謂バ倫敦杯にてハ湯屋ハ二枚敷位のハト部屋ハ一の仕切ありて大なる湯屋ハハ部屋敷二三十あり小なる者ハハ十はがりなるもあり部屋ハハ皆欲く仕切リ其中に湯氣も立騰ることにて逆上するの憂あるが故に通例其仕切ハ上の体に皆空氣の通ふ様に透しあることなり俗其一ト部屋の内有様を云ハハ其中一枚敷ばかりに人の丈程の長サにて高二尺四五寸ばかりなる細長き湯坪あり其物質ハ先づ何か藥をかけテテハハと燃きたる瀬戸物の如き者にて湯に垢杯のつくこと少なき様に拵へハハ手障も至て滑かて其色ハ白し尤も是ハ湯坪の内面を言ふ者にて其外部ハ板にて四角に包みある事なり此湯坪の形ハ上中下の湯屋共に大抵相似たる者なり中等以下の者ハ部屋の外より此湯坪に通せる子デの湯口附きありて湯屋の小使が外部より水の方を捻レバ水出て湯の方を捻レバ湯出で隨意になる様になしあり故に部屋の内より温くせよとか熱くせよとか其加減を差圖することなり又上等の部屋に至レハ此の子デ部屋の内につき居リ我レハ湯坪に

送軒曰湯
場其宜如
得國浴如
我野鏡
之寫眞

在リ乍ら吾思ふ様に熱くも温くも勝手に其子デを廻わして自由に加減をなすこと出来る様に仕掛たる者多し又少く贅澤なるハ頭の上に如露の如き口設けあり我ハ其子デを捻レバ湯が瀑の如く頭上より打下るなり又ゴムの管ありて其管の先に如露の如き口つき居リ之を湯口にも水口にも自由に着けて勝手に頭を洗ふ様になしある者もあり又一ト部屋毎に夫々鏡檯ハブラシ其他眷中を摩る爲めのブラシ石鹸杯を備へ置きあり但し家に因りてハ石鹸丈ハ別に價を拂ハハハならぬ處もあり先づ湯錢ハ下等にて六片十二錢五厘内外なり中等にて六片より一志二十五錢内外迄の間なり又上等ハ種々に一志より二三志までの者あり去リ乍ら先づ通例ハ一志なれば一ト通りの湯屋と云ふべし左レハ下等生活の人民に取テハ我東京人などの如く日々湯屋に趣く事ハ逆も能し難き事にて一二ヶ月の内にて一度入るか入らぬか位の事なるべし又中等の人ハ各々其家に浴室を持居れども夫れすらも日本人の如く頻りにハ浴せざる方なり是其時侯の熱する時節少なきにも由るなるべけれども又た一ハ家

送軒曰湯
場其宜如
得國浴如
我野鏡
之寫眞

碌々居士
日僕會入
陰部而視
湯室人金
漢日人答
不日人愛
府行役之
作法乎不

内の部屋への便利よきが故なるべし余等の如きブセフ者にては彼地に在るときは毎朝其部屋の中に備へある顔洗鉢にて毎朝一全體を水或は湯にて拭清め然る後に衣服を着けたりしことなり是れ己の寢部屋に他人の勝手に立入り難く又他人に見透かされる事の憂もなく部屋の中の恰も人々の一城廓の如く之に加ふるに其部へ内に水鉢顔洗鉢始め一通り手拭まで夫々綺麗に整へあるが故に何人も通例の毎朝起ると直に遠慮なく其全身を拭清め然る後其服を着ることなり且其服も日本の服の如く藍などの身につくべき愛なきか上に總て清潔なる白の下着を用ふる事なれば身体が汚ること少きとなり余等の如きも彼地にあれば日本に在る時の如く屢々浴せすとも濟し事なり

西洋諸國にては人の肌膚を露すこと一吋にては非常なる塵埃の如くなり居れり斯く行儀正しきか故に其部屋と云ひ湯屋と云ひ全體を拭清めるに決して他人に見られざる様に拵へあることなり左れは暫時の間ながら彼地の風俗の中に在りて日本に歸り來り會々浴室に導かれてナガシ杯

不考之甚
好裸體見
人於其陰
部去其取
諸者幸以
僕說有以
美洋風者
則幸甚々
送軒曰眞
然々々一
讀之汗不
覺冷澹不

と唱へ下男が裸體にて出て來り此方も亦裸體にて垢を流し貰ふなど何か變なる心持もしたりし因て察するに外國人などの目にて我國の浴室の有様を見なばさぞ打驚くことなるべし左り乍ら倫敦の如きも以前の皆入込なりし者の由なりしに政府より規則を出し遂に今日の如くなりしと云へば唯た彼國の我國より少し抄取り早きのみにて其初めの畧相似たる者なりしなり

英國にては餘り其類なれども佛國にてはフリクシオンと稱へ別に價を拂へば垢摩の小使ありて垢を落とし呉ること稍や日本の風と相似たり左れは日本のナガシと謂へる者も亦一種の贅澤法と云ふべし

國に因ては湯屋に髪床の附き居る者鮮なからず右の甚た便利なる仕組なり

英國の湯屋に水浴場の外に水浴場を設けある處も甚だ鮮なからず此水浴場の綺麗なる石或は焼物煉瓦等にて造りたる大なる池とも云ふべき者にて其廣さ十五間乃至二十間四方の者も少なからず是に清水を湛へ其

深さも殆ど人の丈程なり夏分の青年の若者杯の此水浴場を泳ぎの稽古場となして楽しみ慰む事なり左れば此水浴場の無論入込なり然れども裸体ながら各々其腰部を確と包ましむべき腰布備へあり入浴者の之を纏ふて這入るなり又場所に由て此地の清水常に新陳交代するの仕掛ある者あり

右の水浴場の男子のみならず婦人の爲めにも之を設けある者あり其場所の婦人のみの専有に属し男子の無論立入ることも出来ぬ

◎問 パノラマと稱する一種の展畫之れある由承知せり
是は何様の趣のものにや

○答 パノラマの先づ日本のノゾキ又のカラクリと申す處にて其大体の廣き場中を圓く仕切り其圓さなりに何處を繼目と分らぬ様に大なる續き畫を以て建て廻しあり見物人の其中央にありて之れを周覽することなり其見物人の周覽すへき場所と畫との間の間ハ勾欄を以て畫と平行線に仕切りあり早く云へば蛇の眼を描きたるか如し中央の白き處の見物人の立つ場

處にて黒環の外邊の即ち畫の建て廻しある處なり而して其黒環の環の見物人と畫とを隔てたる空間なり此のパノラマの畫の或ハ山水或ハ都邑等様々なれども大抵自國勝利の戦争を繪きたるか多きに居れり則ち伯林にて名高きのセダン(普佛大戦争の時那破翁三世が計竭きて遂に降を乞ひたる所の地)戦争圖のパノラマなるの類なり此のパノラマに就て目を駭かすハ其繪き方如何にも真に迫り例へハ一とつの草叢を繪きあるに半分ハ畫にて其半分ハ畫と續けて眞物の草を藝へあるなれども何處までか眞物にして何處までか畫なるや見界つかす又た兵卒の打棄てたる破れ帽子空丸等畫中にもあれハ其前に眞物も散亂させあれども是亦た視まがふ計りなり畫の高さハ其大小により不同なれども通例先づ三四間内外ハあるへし而して中央の見物人の場處ハ凡そ一間許りも畫の裾より高く築き上げあり其間のナダラになり居りて道なり草叢なり其他土石花木一切の景色都て前面の畫と續けて眞物を以て拵らへあり則ち是に由りて見物人の眼を迷ハせ孰れか畫孰れか眞物なるを想ひまどわさしむるの趣向なり流石ハ

碌々居士
曰同感々々

遂軒曰我
邦光線入
達甚多故
者出線未
偶其出光
線遠近不
失其趣只
上其味不
成之味紙
見之味紙
糊于紙上
而存已

何事何物にも理學の入込み居る世界だけに顔料の使ひ方さへ斯く進みて
咫尺の中に居り乍ら畫と眞物とを視まがふ程にあらしむるの感心の次第
なり顔料の次に人の眼を迷はず元素の其遠近の釣合の如何にも巧みなる
事なり例へば前面の一望の青海原にて山影模糊として大船巨舶八寸にも
盈たぬ計りに見ゆる遠景なる處へ最近の濱邊に一幹の喬木を無遠慮に高
く太く繪さありて其枝々の葉の歴々數ふへさ程に分明なり此の釣合に由
りて前面の遠景の眞に千里際なきか如くに想ひ入りなり又第三に人の眼
を迷はず本の其光線のとり方の甚だ巧みなる事なり見物人の頭の上の一
面に圓き青幕の天井を以て蓋ひあり此の青幕の畫の際より幾尺か手前に
て絶れ居り此の間より光線を容るゝ趣向なり而て其天井の端の亦畫の頂
さよりも幾尺か幾寸か下げありて見物人の眼に畫の何處にて盡てたる
やを知らざらしむ斯く前面を望む程明かるき事の愈々明るくして且つ盡
てしなき迄に見ゆるか故見物人の自然眞景を視る心地する筈の譯なり何
となれり若し此の天井にして何か別段の形あり別段の色ある者ならしめ

又た是と畫との界判然と分明になり居らしめり其比較にて忽ち其畫全体
の畫たること暴露すへけれりなり

パノラマ館の内に右の大畫の外に又た幾多の小畫を観する様なしある
か多し是の一ト切宛の平畫にて壁畫を観ると同様なり亦た鏡のなきカラ
クリを観ると同様なり又たパノラマと通稱するの多く右の圓く建て廻は
したる大畫を云ふことなれども其中に眞に日本のノヅキ同様幾個の平
畫を鏡にてノヅキ觀する様にせる分もあり

パノラマ館等至る所一都府中に必ず幾個かのパノラマ館あるか通例なる
に倫敦にての割合に至て希れなり如何なる故にや相分らされども或は倫
敦の仕事所にて遊び所も非るか故斯く不風流なるなりと云へる説もあり
き

パノラマの大畫の同じ畫中にて亦た別派のものにて猶ほ日本の舞臺畫
畫割の如く其の専門家に非されり尋常畫工に出来難き由なり左もある
へしと思はる

◎問 家々には日本の如く毎朝八百屋などの來ることありや

○答 然り此の事少しも日本と異らす出入の八百屋の毎朝十時より十二時迄の頃に中以下の家をバツレ／＼用聞きに廻ることにて其店の大小に應じ各々皆な小さな車を持ち居り之に青物、菓物の類を積み之を馬に牽かせて行くことなり又牛肉屋の如きも毎日其の得意先を廻ること八百屋と同様なり牛肉屋が牛肉を盛りたる器の一種の板皿にて板の中を細長く劉り取り盆の如くなし其四角なる角々に取手の如き者を拵へあり又八百屋の方にて青物を運ぶに日本と同様の籠を用ふることなるが世人の知る如く彼の地に一切竹と云ふものなければ余等も最初の何物にてザルを編み造るやと思ひ居たりしにヨク／＼調べ見れば皆な小さな河柳の心を以て造りたるものなり則ち日本にて柳行李に造る材料の柳の枝を以て日本の竹籠の如く編みたるものなり唯た余等の日に最も羨ましきは何事にも皆な馬の力を用ひ八百屋にても牛肉屋にても荷も得意先を廻る

程の者ならんに其荷車を馬に牽かせ居らざる者稀れなり又馬を用ひ得ざる程の者の驢馬を用ひて其荷物を牽かせ居るも尠なからき若し日本にて馬の飼料に入費多しとならば責めて驢馬なりとも用ひたし之を用ふるだけにて大に人力を幫くことなるべきなり又牛肉の事に付て思ひ出せる一事あり一日余等の下宿屋の使男が日本にて牛肉のことを何と申すやと尋ねしゆゑ矢張り牛と云ふなりと答へしに使男のこのことを何と申すやと尋ねしゆゑ大よ之を笑ひ又た余等に向ひ羊のこの何と申し羊肉のこの何と申すやと尋るかゆゑに余等の復た孰れも羊なりと答へしに復た大に打ち笑ひ「偕て日本の婦人の牛肉のことをも牛と云ひ羊肉のことをも羊と云ひるゝにや餘り婦人に似合しからぬことなり英國にては御存じの如く牛肉のことをバビーフと云ひ生きたる牛のことをバオックスンとかカウとか云ふなり又生たる羊のシープと呼ぶも羊肉のこのモットンと呼ぶ故に甚だ優しく聞ゆることなるに生きたる羊又の牛と其肉との稱へが同じこ

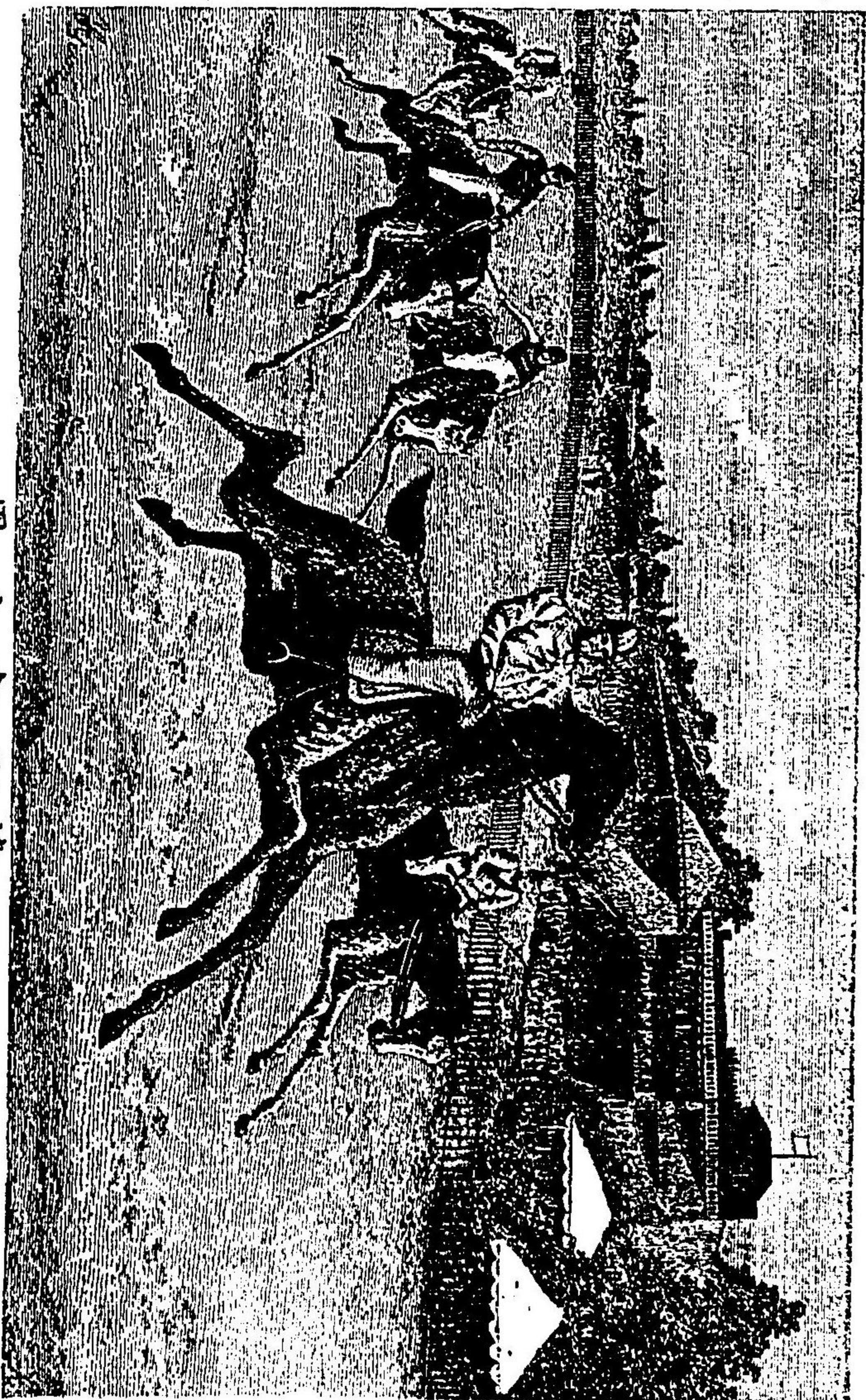
選軒曰此
類甚有理

曠々不充之日
不我邦語
不充分全語
曠々言也

とにして婦人方が之を稱ふるにも亦た牛を食ひ羊を食ふ杯との如何にも
下品に荒くれておかしく候ひをや何とかして生きたる豚と肉との別々の
名に致さずして婦人方の嘸かし之を詞に發するを迷惑に思ひるゝならん
と云ひれて考へれば如何さま英國にては牛羊と其肉をの名を別にし稱へ
を異にするかゆゑに幾何か優しく品よく聞ゆる場合あり我國も行くと
定めて兩者の間に相應なる別名を生ずることにも立至るべき歟
去りなから他の西洋諸國の中にも生きたる牛羊と其肉との名を同じくし
居る處も隨分之なきに非ずとのことなれば右の日本のみ獨り優しからさ
る下品の詞を用ゆとの云ひ難きなり然れども若し生きたる牛羊と其肉と
別々の名を稱ふること出來得べくんば之を殊にすること然るべきこと
思ひる如何にも優しき婦人の口より牛を食べる羊の旨し杯との少し不似
合なる處もあるが如し

◎問 彼地競馬の有様は如何

○答 英國人が非常に競争を好み或は舟或は馬其他球抛クリケット等の



競馬會之圖

競争會を開く事の殆んど絶へ間なき程の事なるが競馬にて英國第一等の
大賭のタルヒールレースと稱なヘイブソムと云へる處に一年一度催ふす者
を以て第一等とす同處の倫敦より汽車にて一時間内外の距離なり又其時
節ハ毎年六月上旬の頃なりと覺ゆ英國の五六月の恰も日本の三四月の時
節にて郊外に遊歩するに最上の好時節なり然れバ特に此時節を擇みた
る者ど見ゆ先づ右の競馬所の地形より云ハ英國の他の部分と同じく渺
々たる原野にして唯た處々に丘岡の陵夷起伏せるあるのみにて先づ一面
に平地と云ふも可なり
諸其競馬所の周圍の廣袤ハ凡そ三四里四方もあるべく全体に芝原の如く
細やかなる嫩草生茂りて僅か種々の樹木の其間に散點せるあるのみなり
此廣野の中に一二里の長さなる環き線を書き此環線を以て競馬の馬道と
なしたる者にて見物人の馬道に亂入せざる様内外兩側に手摺様の者を設
けあり而して其手摺より内の空地ハ見物人の遊ひ場にて種々様々の見せ
物テントなどを張りて店を連ね實に賑やかなること夥し其環線の外側の

一部分にのりの大なる建物ありて此處にの競馬の節皇族貴族杯の棧敷をとる者とし其建物の左右に傍ふて見物人に貸し渡す爲に數百間棧敷をかけ渡しあり棧敷の体の下より上まで段々に腰掛る様に階級を造り其數凡そ二三十段もあるべしと覺ゆ此大競馬の四五日打續くことにて其間毎日く見物人の右の棧敷の勿論其他馬道の外側に傍ふてヒシくと込合ひ居れり通例の處にて一人前の棧敷代の一圓内外なりしと覺ゆ尤も其處によりて種々の高下のあるべし又此棧敷と馬道との間の空地にの賭札を賣る者充満し其組合の符調と馬の名前等を番附にし賭札を見物人に賣附けることなり其法の見物人物体と賣人一人との勝負の者もあり其他の仕組もあり又見物人同士の賭もあるへくなくくに混雜なることなり又貴族金満家杯の豪奢を競ふ連中の幾十萬兩も賭け物にする如き馬鹿者もあれば今日何百萬兩の人の出逢ふ日なりとて平人の物語る事なり又此賭に行けば裸体で歸ると云ふ諺のある程の事なり

余等に見たる中にて此の環線の全長を競馬の駈たること、僅か二三回に

て其他の管環線の五分の二或は四分の二位の所まで勝負となしたる事なり又馬を數匹揃へて一聲の合圖に駈出す事、甚だ少なく馬も豫ねて競争の事を知り居ると見ゆ逸りに逸りさりて馬を揃へて未だ合圖も懸けぬ中出しぬけに先に飛出すを留めんとして止め能はず其儘に駈出す者あり又既に一匹の馬か斯く飛出すを見る時の他の馬も堪り兼て二三匹の乗主の制するを願みず彼に伴ふて飛出すもあり然れば多くの馬が鼻を揃へて一齊に飛出すの甚だ稀なる程に難き事と見ゆ定めて此等の事、日本の競馬も同様なるべし余等の如く何れの馬の勝敗をも唯だ冷眼に眺め居る者の身に、何の興もなく肝腎の競馬よりも他の色々の見せ物懸み物か競馬所を廻つて興行せる者の方を面白しと覺る程の事なり

此日の賭をなして意外に儲をなして歸るもあり又巨大の損失を蒙る者もある中なれば其人氣も荒く從つてスリ騙の類甚だ夥し余等が競馬所より倫敦に歸る混雜の氣車の中に例の三枚骨牌三枚の骨牌を伏置き某の骨牌の孰なりと暗射して勝負をなす者なり是の術にて旅人行客杯を欺く奸

徒の至て多き事にて餘程の田舎者に非れぬ乗らぬなり(の仲間に出逢ふた
 ることあり然れども其節の誰も引懸けらるる者なかりし勿論流石不受
 想の英人なれば之を見向く者さへなく其儘に彼の仲間へ出て行きたりよ
 く聞き合すに此日の往復の涼車中などにて種々の事も出来する様子な
 り
 又倫敦より此競馬見物に趣く者の涼車を用るず一種別仕立の馬車にて往
 く者多し定めて此の涼車杯の始まらざる以前は倫敦より衆人の出懸けた
 る頃の有様を今日まで存し居る者と見ゑ其馬車も通例の馬車との違ひ倫
 敦にて田舎行に用ゐる大なる長馬車なり之に大勢乗込みて日傘をさし喇
 叭など吹鳴らして威勢よく馳することなり其喇叭の多くの厚紙杯にて製
 したる者にて競馬所の近處の露店などにて之を賣り居れり恰も日本の
 開帳の時厚紙杯にて可笑なる面を造り或の喇叭杯造りて此を見物人に賣
 ると善く相似たる有様なり歸途に男女共多く此喇叭を買ひ之を車中に
 て吹鳴らしつゝ復ひ威勢よく返ることなり最も中に眞の喇叭あるや

可憐心人日
 憐不或而即如
 可知辨不或我
 笑動落知苦邦
 士

知れざれども先づ見かけたる所にて此の如し田舎路を丈夫なる大馬車
 にて往來することなれば大抵車中の人の砂塵にて其肩の邊眞白に見ゆる
 る鮮からせ左りながら何か勇まし氣に思へる者あり涼車のなき時代こ
 そ兎も角も今日の一時間経つか経たぬに通ふ鐵道のある者を矢張以前の
 如き大馬車を仕立てて競馬に趣くなんどの誠に面白き人情なり英國の競
 馬の恰も日本の祭禮と云ふべき様子あり彼地人の全体の職務に勉強する
 ことも日本人より劇しき代りに又種々なる慰み物を設け餘念なく心を樂
 ましむること日本より劇しきが如し

◎問 其のタルヒーレースと稱する大競馬の時其近邊の
 賑やかさの模様は如何

○答 前に記する如く競馬所の周圍のみならず其近邊の野原一体に種々
 様々の觀せ物慰み物あり其中にて日本の開帳などの時に之れなき種類な
 る者もあり又同様なる者もあり今更彼地の人の如何なる慰をなすやを下
 に略記すべし

第一にラム子氷水と名づくべき種類の店澤山なり又慰み物の中に、
獵の眞似事ありて其仕方見物人の所より十四五間隔て一本の柱を立て
て其上に長さ二三間なる十文字の棒を置き其棒の四隅に人造の鳥をつけ
鳥の背にガラスの空球を結びつけあり其持主が綱を引く時の柱の上なる
十文字の棒のキリ／＼と廻り廻るを見物人の此方より狙ひ射ることなり
が如くに其柱の周圍を飛び廻るを見物人の此方より狙ひ射ることなり
若し射中つれば鳥背のガラス球ピンと砕け落つるなり日本を出しより久
しく銃を手にせざりしかり餘り左右に人のなき折を幸ひ一發之を試みた
りしに其裝藥の強さに驚きたり殆んど是が爲に肩を突き仰けらるる程
の心地したり蓋し彼地の人の全体に強薬を繋つ者と見へ斯る慰の射的に
さへ此の如き強薬を装ひるの驚くへきことなり又此外に恰も日本の室内
射的場の如く小銃にて遠方の棒に垂下げあるガラス徳利を撃たしむる處
あり此れも見物人の手元より十間ばかり隔て大なる柱を立て此に長二間
計の棒を横に十文字に五ツ六ツも段々に結びつけ其一ツの棒毎より

曰々居々
老々士
々々々々

空徳利の二十ばかりも垂下げあり斯く棒毎に二十宛もある事なれば其數
の至て夥しく一寸眺むればビール徳利が竹棒になりたる如き有様なり此
ビール徳利を目懸け射撃することにて銃丸の中たる時の美事に其の空徳
利を立割りてホロリ／＼と落とすことなれば詰らぬことながら甚だ面白
く見ゆるなり又此外に多き者の抛球なり其法の十間ばかり隔て杭の上
に木丸を載せ置き之を此方より球を投て撃落す事なり是の最も容易き者
と見ゑて處々に此設あり其他三四間隔て可笑なる人形を造り置き此方
より木の丸にて其人形を敲き壊し撃落す様な仕懸にて先年日本にて行
れし玉を打落す趣向の元祖なるべしと思はる又此外に弓の慰みもあり是
も見物人の手元より十間内外の所に一坪ばかりなる大的を置き此方より
して射中ることなり其弓の一種の弓にて大さの殆ど日本の弓程なり但し
少し短き様に思はれたり矢も畧等しきなれども竹にあらせして木なりと
覺ゆ去りなから其の餘り重に過ぎす輕に過ぎざる工合如何にも竹同様
善く出来居れり其群衆どもが我れこそ命中せんと競ふて的を射る景色を

見るに恰も日本人が揚弓を射る如く右の眼に右の手を着け亂ひ居る者多し左れの一本逆も十分の力を得て的迄直行し得る矢の少なく多くの其前にて墜が故に之を避けんため又た度をかけて射るを以て其矢のヒユウと虹霓形に飛行く者のみなり餘り可笑さに堪えざりければ詮なき事と思ひしかども其所に立寄りてニタ手三手射たりしに幸ひにして三四本の彼大的に容易く中りければ傍の者どもより頻りに感賞せられたるの我ながら可笑く覺る其儘其所を立去りしか長居せば不熟練の尾の露のれんことを恐れてなり昔し英人の非常に弓術に巧なりし者にて大陸諸國の兵と戰ふ時常に弓を以て敵を敗りし程の名手多かりしなり故に英國の弓の長さも稍や日本の弓に近かく他の西洋諸國の弓よりの大なりしを用ゐたるなり左れば其以前の那須與一に比しき手鍛練も彼國にの多かりしなるべきに理科の學開け極めて微力なる者も能く數百歩の遠きに鐵塊を飛ばせて敵を殲すの社會となりしより舊來の長技を失ひ今日にての慰みに的を射るさへ不器用千萬なる者のみとなりし世の變遷も亦甚しきにあらすや

日撃居士
取捨之
金之偶
敬服々々

嘗て此大競馬に趣きし時思ひぬ慈悲をなしたることありき前に記したる杭の上に木丸を載せて之を擊落さしめて金を取るの仕組をなす者の概ね極て貧賤にて且つ十五六の子供の之を興行し居る者多し然るに己等の商賣上の争より事起りけるにや十五六の子供兩人握合を始め互に顔とも云はず頭とも云ひを突合組合各々面部に大疵を負ひ血まふれとなりて喧嘩せしが遂に一方の擊縮られて其處に絶せしに一方の尙ほも容赦なく打擲する有様なり先刻より稍集して眺め居る見物人の中より今にも兩人を引分るかと思居たるに一人も進み出つる者なく唯面白氣に眺め居る者のみなれの餘り一方の殘酷を見るに忍ず其遂に歩み寄りて懷中より二三志の金を取出し是を一方の勝たる者に與るが故に汝等の争ひを止むへし若し余が命を用ゐんぬ巡查連れ來るへしと言ひしにて其争ひ辛じて息たりまが余等の争を止むると問もなく群衆中より一二の老人の身元よく見ゆる人々出來りて余等と共に其争を止めるごありしが既に其時一方の半死半生の体なりき其後の如何なりしや余等も打棄て歸路に着きたり

◎問 西洋諸國の新聞紙の体裁ハ互に相同じきや又日本の新聞紙との異同ハ如何

○答 英佛伊曼等の國々にて其体裁の同きあり又異なるあり今更諸國の相異なる箇條一二を畧述せんに英國にて其雜誌類の外毎日發兌の新聞紙にて十の八九まで概して小説を掲ぐる者なし然るに佛國伊國に至れ其國に大勢力ある一二の新聞紙を始めとし其以下に至るまで日々發兌の者にも皆な小説を載せたる者なし是れ英佛伊の著るしく相異なる所以なり英佛共に一二を争ふ國柄なるに如何にして其新聞紙に斯る相違あるや甚だ解し難き事なり去りながら余等の想像にて英人の全体に不風流なると且つ其國非常に繁昌して物事に忙しきとの爲めに其新聞紙上に懸みに類する閑散の事柄の幾んど掲げかぬるの風をなしたるものと覺ゆ之に反して佛國の如きの文學の風韻あると英國に優れるが上に歐洲第一繁華の地との云ひながら凡百の業務の忙しき多端なること稍や英國に一步を譲るの有様なきにあらざり此等の異同より兩國の新聞紙に此の如き相

違を生じたる者にあらざりと思へる又伊國と英佛二國との新聞紙の相違を云へば其新聞紙に大抵小説を掲ぐるものと佛蘭西と同様なれども唯佛蘭西に異なる所の伊國に毎日發兌の繪入新聞ある一事なり英佛二國にて其雜誌類に繪入のものあれば毎日發兌の繪入新聞の之れなしと云ふて可なり英國の勿論の事ながら佛國にて然るべき勢力ある毎日發兌の繪入新聞の見懸けざりし様に覺ゆるなり伊國の分ども固より毎日發兌の事なれ其畫圖など先づ高尚ならざる方にて其畫圖の精巧に至つては每周發兌の雜誌の方に落を取らるると云ふの有様なり蓋し伊國の英佛二國に比すれば業務も多端ならずして一体の事柄に閑暇多く又た舊國なるが故に人心も稍や都び居るよりして遂に此の如き新聞紙の体裁を生ぜし者なりと見ゆ我報知新聞の如きも半ば佛國伊國の新聞の体に同じからしめたる者にして日本の舊國なると其國人文學の風韻あると事務事業の英米二國の如く繁忙多端ならずして記載すべき事柄の世間に少きとを察し寧ろ佛伊二國の体を交ゆる方然るべしとの相談にて遂に今日の如き体

裁をばなせし事なり然れハ若英米の新聞のみを見て世界にて新聞と云へ
 る者ハ皆な此の如しと思ひ其方に反する者ハ新聞の仲間外をなし居る如
 く考へらるる者あらんにハ是れ大に誤れる者と云ふべし
 又記事の上より云ふも英佛諸國の新聞の特に日本に異なる所の點ハ其紙
 面に外國種の割合に多くして又世間の耳目の是に集まるの一事なり尤も
 歐洲諸國ハ漁車電信の便宜の快利にして彼我の交通非常に容易頻繁なれ
 ハ各國間の出來事ハ皆其利害甚だ己れに切實なるの故にも由る事なれど
 も全休に讀者の眼界甚だ廣くして新聞も亦之に應じ世界の事を漏さざ一
 纏めに其紙上に載すると云ふの奮發常に見ぬ居れり左れハ彼國の新聞に
 てハ外國の事も常に殆ど内國の事の如く讀者に感せしむるの便利あるな
 り然るに日本にてハ日本以外の事ならんにハ最早新聞の種の中に入ら
 ざる者の如く思ひ等閑に讀過する者鮮なからず是ハ全く外國交通の日尙
 ハ淺さが故なるへけれども行く行くハ我日本の新聞も世界中の幾千分の
 一にも當らざる小き國內の事のみハ心を留めせして眞正の世界の事を

送軒曰
 好則荷
 尤是則
 不如是
 不新以
 足新聞
 紙為

紙面に載せ大切なる大体の事に目を注げる様自然に成行くべきなり又た
 斯く成行かねばならぬ必要ある者なり何となれば今ハ英領遠洲に於て石
 炭板屋貝の柱等の産出盛大に赴かば支那の得意ハ悉く之に奪れて我國
 の取引ハ立どころに衰ふべし又亞米利加のテキサス近傍にて盡力し居る
 桑の景況次第にてハ我國の生糸も大なる響を蒙るべし日耳曼地方にて廉
 きビールの製造場を生せば我國の商賣人ハ爲に無數の損得を受くるに至
 るべし一事一物我國の相手ハ外國に在るの世の中に立ちながら外國時々
 の模様を知らせして事の濟むべき道理ハ決してあられまじき譯なり將た
 斯る經濟上の問題のみならず學術にあれば兵事にあれば何一つとして外國の
 事變に差響を受けざる者のあらざる時節に新聞紙上にハ唯た我が國內の
 事柄丈けを載せて獨り是れのみ眺め居るハ實に不覺の極と云べし然れば
 我邦の新聞紙ハ是非一度ハ日本國內の事柄のみを寫し出す小鏡にハあら
 ずして全世界の事變を洩れなく寫し出す一面の大鏡となるを期せざるべ
 からせ目下日本の新聞紙と英佛の新聞紙とを比較し重なる相違の點を求

めの先づ茲にありと云ふも可なり

◎問伊太利に御越しにて風俗始め其他英國と相違ある箇條ハ意外の者なりや

○答 先づ人種より總ての事に至るまで英國と異なる者の眼に觸ること多き中に日常の細事より云ハく先づパンの形杯の違ひ居る事第一に留まれり尤も伊國にても英國風佛國風のパンも之ある事ながら通例多く食卓に現れるるに特に伊國に限りたる一種のパンあり其形の指或ハ食指位の大さよて長さ一尺ばかりの棒の如くなしある者にして之を五六本一把となし英佛等にて通常のパンを置く如く客の左方に持來り置く事なり此異体なるパンの櫛の甚だ珍らしく覺へたり英人佛人等と談話して言伊國の事に及ぶときハ直ちに此のパンの事を語り出たること多し然れば右の余等のみにあらず英佛の人などにも珍らしき事と見ゆ此小枝の如きパンをパク／＼と少し宛食らふ事なり又た其次にハ伊國製の葡萄酒を盛りたる德利の甚だ異体なることなり其形の恰も日本の一輪挿なる花瓶の底の

方丸く口の方細長く直立せる者と畧ば相似たる姿にして但た其物質の勿論ガラスにて之を造れり其ガラスハ極めて薄手のものにして碎れ易きが故にや菓の類を以て奇麗に此德利の口より以下の全身を巻き捲ひ德利の底には其の倒れざる様同じく菓にて圓座の如き者を造り添あり其の全身を菓にて巻き立てたる体の恰も薩摩の泡盛德利の如く甚だ古雅に見ゆる者にして如何にも英佛杯にてハ斯る古風なる德利をハ見懸る事ハ出來ざるなり右の德利の大さハ二三合入りの者と見ゆ又た其の他食料より云ハく同國にてハ彼のマカロニと稱ふる一種の素麵(温飽と云ふも可なるべし)の夥しき一事なり此のマカロニハ恰も日本の温飽素麵と同様なる姿にて又物質さへ同様なる如く見ゆ但し其風味に至てハ日本の温飽素麵より少しく味の濃かなるかど覺ゆ蓋し此にハ温飽粉の外に何か一種の交せ物にてあるやと思わる通例他の諸國の料理にて時々用る所のマカロニハ重めに伊國より輸入せる者なり則ち伊國ハ其本家だけありて其國人の此素麵を嗜むこと非常なるにハ驚きたり朝晩の食卓に此マカロニ

の出で來らざる事ハ少き程にて初めの中こそ珍らしく賞翫したれ後々の少しく難澁する計りに頗々現われ出來れり右のマカロニの太き者に至てハ恰も日本の湯餅の大きにて唯た其異なる所の管の如く中心に穴の明き居る一事なり又素麵の如く穴無くして線の細かき者もあり黄色赤色等の色を着けある者もあり伊國の小都邑を通行する時ハ此の種々のマカロニの澤山店頭に並べあるを見ることなり同國より之を輸出する額ハ實に夥しき者にて一昨年伊國にコレラ病の流行せし時英佛諸國にて此のマカロニハ伊國よりコレラを持込の種子なりとて其注文を減少したる爲め伊國の製造者仲間ハ大なる響を蒙りたりとの評判さへありし程の事なり此外飲食の上にての行儀ハ都べて皆な英佛杯と畧々同様にて著まき相違の所も見されとも唯た其料理ハ全体に粘厚き方にて何品に限らぬ油濃き者多く又其の油を用ゐる事も非常に多き様なり同國にハ多く橄欖樹を植付け橄欖油を一の産物となすことなれば從て其油を多く用ゐる事なりと云へり英國に比すれば佛國の料理ハ概して重くれたる旨味多き方なり

議軒曰此
問答亦今
日尤要緊
切者熟考
宜下察者
以伊參熟

るが伊國の料理ハ佛國を超へて更らに尙一層重くれて油強しと云ふべし全体に其味濃かにして油強き方より順序を立れば伊國の料理ハ第一とし其次ハ佛國其次ハ曼國其次ハ英國なりと云ふべし又淡泊にして油少なき方より云ハ此順序を逆まにして英國を第一と爲すも可なり尤も何れの國々も重なる料理屋ハ佛國を學ぶ事にて其料理人小使さへも出祿の佛人を雇ひ入る者多ければ右の全体に其國の料理を區別したる者と知るべし

◎問 日本にて洋服を着たる人を見るに其外套(英語にてオーバーコート)の形ハ種々にして或ハ何れも餘りなくして其長さ膝切りのものあり或ハ袖口等に毛皮杯を飾り付け其丈も少し長きあり或ハ又た全身の地の厚くして裾ハ足の踵に届く程長く腰の邊りに帶締草の類を着けて引き締めるやうに爲し居るもあり右ハ彼地も同様なりや如何

○答 外套の形ハ國々にて種々流行の相違ある様に見受けたり先づ英國倫敦を以て申さば此の二三年ハ襟袖口共に少しも飾りなく又其丈も膝切

り有るか無しのものを用ふること通例にして決して他の形のものなし故に偶々余等が寒氣を防ぐ爲めに異躰なるものを造り之を着けて外出する時何か頻りに人に見らるゝ如き心地すること多かりしなり尤も稀れに他の形の外套を着け居る者も見掛ること乍ら能く注意するに其骨格容貌多く他國の人にして英人への非を然れば近來兩三年倫敦にて通例の外套の形の先づ前記せる如く極めて飾りなきステリとしたるものにて其の流行も餘り多く變はりたること少しと申すことを英人より承りたり倫敦の日本に比すれば夏の季節短くして冬の季節長く至半年の唯だ寒氣候にて其餘の半年を着夏秋に分ち居る有様なれば外套を着けざる季節の甚だ少く少し寒を恐るゝの人一年中僅か二三个月を除く外八九个月間の常に之を着け居ることなり斯く冬の長さ代りに倫敦の常に露深くして歐洲大陸の諸國に比すれば寒氣の稍や輕き方なり先づ東京の寒氣より強て甚たしとい覺へざる程なり英人の氣丈なることと寒中外出するにも一向に襟巻を用ふる者なく涼々たる寒風の中に襟に飾りもなき外套を

送近來日我
并等之風
大行血氣
方壯而小
年之得者
爲之而得
多自然之
衝生家之
中爲家之
一巨氣之
則其氣不
可上言何
生極初却
不極初却
來不加初
卷之不爲
此言大勝
理少大勝
頭宜少大
省猛年子

着け乍ら喉の邊より頬頰をむぎ出しにシサツ／＼と歩き居ることなり然れば此間に立ち獨り襟巻杯を爲す時何か人より目を注げて可笑しく思はるゝの有様なきに非ざり又婦人の外に襟巻を爲す者なきに男子の獨り之を爲し居るも何やら元氣なく思はれんかと恥かしさに余等の如きも寒中にも大抵頸の邊りをひびぎ出しにて外出せることなり男子が襟巻を爲すの屏弱げに見ゆるゆゑ之を避るの理窟あることながら婦人のソレにも及ぶ間敷と思はるゝに中以下の婦人の冬分外出するに襟巻を用ひすして其の鼻端きを眞赤にしなからサツサと歩き居る者頗る多し尤も年老ひたる婦人の多く襟巻を爲し居れり然れば若き婦人の一は其品を作り襟巻を爲さざることも見ゆるなり若き男子の襟巻を爲さざるも一は此の邊の意味より生ぜしにもあるべき歟又老年の人男子と雖も襟巻を爲し居る者を稀に見受けれとソレすらも通例の小さき襟巻を用ふることにて日本人の用ふる如き大なる物の極て罕れなり但し右に述る所の都て中以下を云ふことにて上等の人々の出入共に手馬車を用ひ居ることなれば車の四方を

唯々居士
日斯文明
國有斯不
可衛生之
笑々々々
送軒日
天用餘之
事一極難
論其封難
代其請難
士無天橫
行無會用

さへ締むれば寒氣を恐るゝにも及ばせ然れは是等の格別のことと知るへし去り乍ら極寒ならぬ時公園杯を驅り行く人を見るに母衣を開き或の箱馬車の戸を開きたる儘にて寒風に吹かれ乍ら頸の邊りを暴らし居る人も甚だ多きことなり之を概するに英人の平生より行儀至て嚴しく幼少の時より暑寒にも其身軀を崩さざる様方正なる行儀の範圍中に生育され遂に其の性を成せる者と云て可なり日本の社會の何事も不極りにして士君子淑女共に幼少より暑寒に堪ゆる行儀の規則なく其身軀を柔弱に爲し居る者と相比すれば實に大なる相違あるに思ひ付きたり又夏分傘をさし目を除けるの婦人のみに限ることにて婦人なれば歩行するに皆な蝙蝠傘を開き居れり然れども市街中にて如何に暑ければとて決して男子の傘を開き居るものなきの不思議なり孰れも皆な照り付けの馬車杯に乗り乍ら平氣に澄まし居る者多し余等の如きも既に斯る國風中に交れば獨り傘を開くも何とやら柔弱らしく其儘にて歩行すること多し尤も日本の如く暑氣の甚だしからぬことなれば先づ耐へ難き程に非せ

人者但都
其或世之
一其後人
柔以變寒
則其用中
包則其用
天則其用
百無方不
歐州所不
用氣乃不
弱然其氣
亦習然其
也與有者

去り乍ら余等の身に取ての随分傘を開きたく思ふ時甚だ少なからぬことなり曾て此の事も英國にて聞合せたるに傘の一事の左して禮法の中に入れ居らぬ積りにて少し田舎に旅行する時杯の英人も皆な持わす傘を開きて日を避くることあり左迄規則嚴びし譯にも非すとて笑ひ居たり去り乍ら倫敦市街中にての實に申合せたる如く殆んど一人の傘を開きて日を避くる者なし又男子の外套の色合の通例無地にて縞物の少なし其無地の色の様々あれども先づ焦げ茶薄鼠黒杯も少なからず唯た赤の勿論湖淡黃類の甚だ少きことなり去り乍ら右の唯た市街を往來するの時の外套を云ふことにて少し旅行にても爲さんとし田舎杯に赴く時に縞物杯の長く踵に至る程の外套を用ふる者少からず故に流行の外套と平日の外套との全く其趣きを異にすと云て可なり又巴里杯の二三年の外套の有様を申せば種々の流行もあることならんか先づ通例の前記せる英國と同様に二三年の處の袖口に飾りなくステリとしたる短き物多し一ト口に云へば英國の外套の

都びて上品なる方を用ゆと云て可なり去り乍ら同地にて襟袖口に毛皮
杯を用ひたるを着けし人をも間々見受る様に覺ゆ是れより北のかた日耳
曼杯に至れば寒中に用ふる外套の特別に長く厚く英國との全く其趣きを
異にせり是れ寒氣の殊に甚だしきが故なるべし又魯國杯の模様を聞き合
すれば寒氣強きがゆゑに外套の制も亦之に應ずる様に益々厚く長くして
毛皮杯を多く用ひ居れりと云ふ然れば先づ氣候の寒温に因て國々の相違
ありと云て可なり

◎問 英國にてハ日本にて稱する鳥屋の類之れありや

○答 鳥類を賣る店の鳥類専門の者もあり然れども通例の魚屋と鳥屋と
兼帯なる店多し店の通例の處に魚を並らべ置きて其上の方に鳥をブラ
下けある者を通例とす

◎問 鳥の種類ハ如何

○答 第一に多き者の鶏第二の鴨第三の家鴈畜ひ立たる鷹日本にハなし
の類なり右の諸鳥ハ何れも日本の物と同じことながら鶏などの如きハ大

抵日本の者よりも幾分か大なる方多く先づ軍鶏と尋常の鶏との合の子位
に見ゆ一羽の價ハ通例二三志の間と云て可なり(五十錢より七十錢までの
間)又鴨の類ハ四五志の間(一圓より一圓卅錢内外の處)にして鶏も前記せる
鶏と同様に日本に少し大なり京都邊にてよく畜ふ所の一種の大
なる鴨よりも更らに大なる様に覺ゆる併し先づ鴨ハ通例日本の鴨と同様
にて稍や似寄りたり其外に鷺鳥とか家鴈とか稱ふべき一種の大なる鳥
あり其大さハ殆んど鷺鳥と同じき者少なからず左りなから其の毛色客子の
總て野鴈と同様と察するに其初めの野鴈なりし者を久しく畜馴し其子
孫が即ち今の家鴈となりし者なるへし鷺鳥にハ其嘴鼻の處に凸肉ありて
面を被り居る如く見ゆること通例なるに右の家鴈にハ此の如き凸肉なく
一切ヒシクヒと稱ふる家鴈と善く相肖たり然れば其以前の野生の者を漸
々畜ひたてて一種の物となしたることハ疑無さか如し此等諸鳥の共進會
博覽會杯に赴て見物するに右の家雁の種類にハ實に非常なる大物ありて
其中にハ首の眞中を手にて握り廻されぬ程に大なる者多し又此家雁の外

に眞の鷺鳥をも賣り居れり又七面鳥をも賣居れり七面鳥杯の價甚だ高き方なり日本にて云ひ年始歳暮を兼ねたる祝日とも云ふへき夫の歳末のクリスマスマスの大祝日に何れの家も皆な右の家雁鷺鳥を料理する事慣例なるが如く見ゆ故に此頃に至れり其價殆んど平常より四五割を引上ぐるなり又冬期に野生の鴨を賣り居るも多く通例日本の鴨の種類に異ならず

又日本の者と全く異なる鳥類あり即ち彼地にて「鶉」と云ふ總名を附し居る者種々あり如何にも之を類別すれり鶉の属なれども其大小の色々にて同じからず日本の如く小さな鶉も稀に「見懸る事ながら英和字書なんどにて鶉と云へる譯字を下しある彼地の鳥の鶉の属中にて甚だ大なる者なり即ち其の大きな殆んど雉子と鳩との間位にて其姿の先づ鶉なれども全体に逞しき者なり又其の毛色の黒みかよりて赤き鶉冠様の如きものを戴き居る類もあり此等の日本に無ふして彼地に多く人の好んで銃獵する所の者なり雉子も多く鳥屋に下がり居る者なるが此にも二種ありて其

一ハ日本の雉子と畧ぼ同様なる者なり他の一種ハ日本の雉子よりも一層奇麗なる者にて先づ日本の山鳥と雉子との合の子の如く見ゆ其背中の通例の雉子の如くにして頭より胸までの黒けれども其の胸前より腹一面にかけてハ山鳥の如く金色の毛生たり日本雉子の此胸より腹の邊ハ一面に唯た黒き毛生たり又此雉子の中に白き首環の入り居る者あり此等も日本にてハ見かけざるなり

◎問 鳥類の風味は如何

○答 鶏家雁等全体の家禽を云ひ其の風味ハ無論淡泊なる方にて旨味なくシバくする心持せり偶々日本人などが打寄りて之を日本料理に用るるに常に旨味少なしとの小言を聞くなり右ハ畜料の如何に由る者なる乎或ハ西洋人が好て此淡泊なる所を賞翫する譯なる乎兎に角日本の料理に用ゐる時ハ何か旨味の足らぬ様に覺ゆるなり因て余等ハ後々の日本料理に斯る家禽を買入るるを見合せ野生の鴨を買求て之を料理せし事なり人爲の飼の加はりし家禽類こそ色々の變化をも受けたるへけれ天然の儘

の野生の者の日本と同じかるべしと想像せしが果して其理窟と見へ真鴨
 其他野生の鴨類ハ先づ日本の味を感じたる事なり
 又鶉杯の如きも銃獵にて之を獲るに日本の如く天然の儘の山野に天然の
 儘に鳥の栖み居ることハ殆ど英國中通例の處にてハ之なきものと見へ銃
 獵の爲め別段に鳥の種を畜立る由なり皇族貴族金満家の如きハ銘々己れ
 の銃獵地面を所有し平生より其中に鶉雉子などの類を畜立て置き獵時
 節に至て茲に出懸る事なり又其外に商買の爲めに銃獵地面を所有し一日
 何程との條約にて銃獵人に之を貸渡す者あり然れば前記せる雉子鶉の如
 きハ皆日本の如く純然たる野生の者にあらざして半ハ畜立てあるが如き
 姿なり然る故にもある間敷が鶉などを日本風の焼鳥に料理するに其味
 の淡泊にて旨味なき事殆んど鶉家雁と同様なり蘇蘭の極北の地方或ハ愛
 蘭の邊鄙ハいざ知らず通例の場所ならんにハ英國中ハ殆んど開け盡きて
 如何にも鐵砲杯を携へ出懸けるも容易に鳥類ハ見當るまじと思へる程
 の有様なり是れ一ハ其國の平野にして處々に少しの丘陵あるのみにて日

際々
 日可
 邦之
 速爲
 住人
 所我

本の如く險しき山岳少なく禽獸の栖所多からざるが故にも由るべしと思
 はる

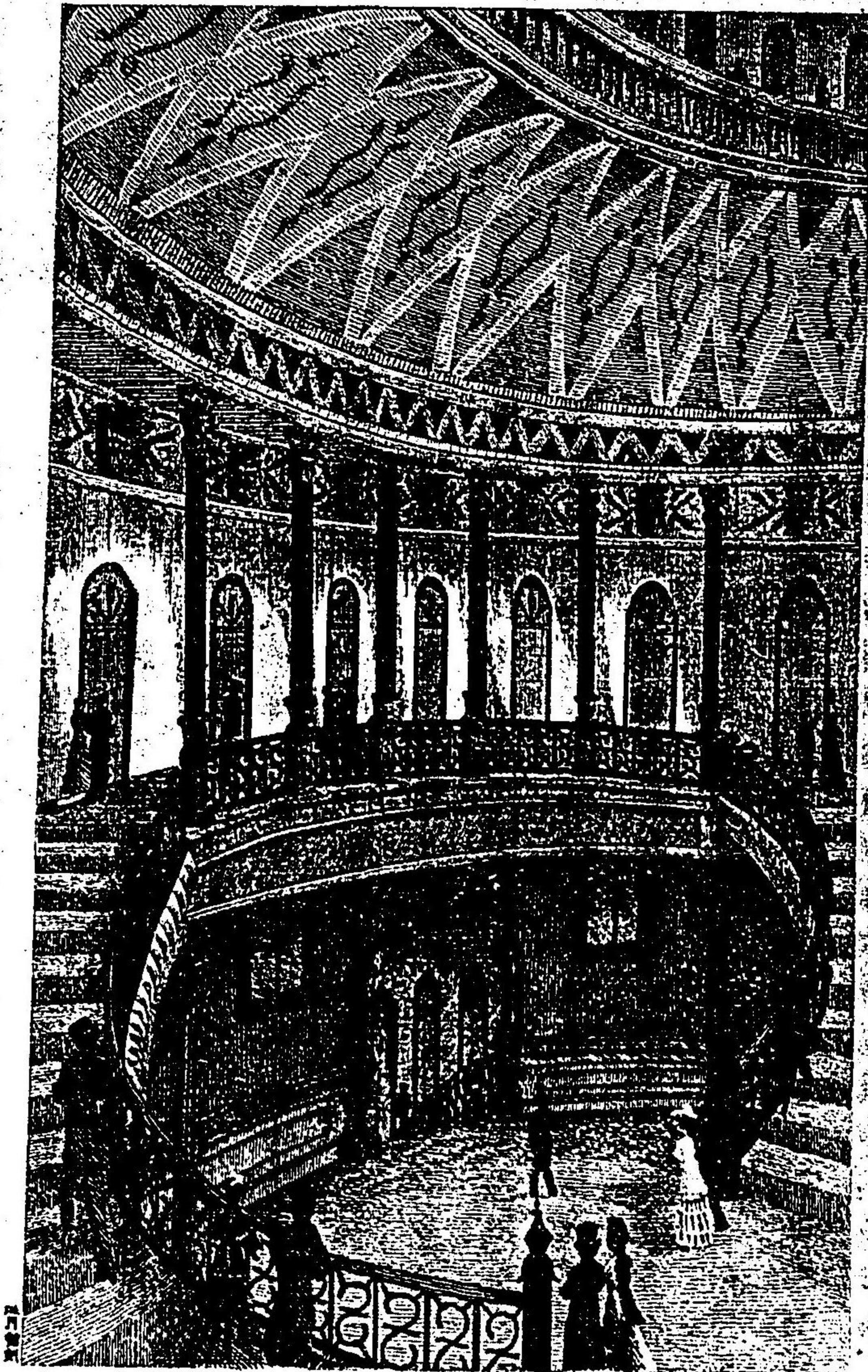
◎問 彼地にてホテルと稱ふる旅舎の有様ハ如何諸國共
 に其体裁ハ同様なりや

高軒
 大日
 非所
 邦人
 我之
 想也

○答 通例ホテルと稱ふる旅舎ハ諸國とも其体裁先づ同様と云ふて可な
 り是にハ上中下幾等も階級あり上等の分の非常に高價にて下等の分の又
 た非常に廉價なるもあり今ま世界第一繁華の地たる巴里にて最上と稱す
 るグランドホテルの有様を畧記せば其他ハ推して知るべし右の大ホテルハ
 五六階の高さにて其間數ハ三四百の間なるべし食堂ハ第一階即ち尋常の
 平地に並べる間にありて食事の時刻にハ客人皆な其所に打揃ひて食事を
 爲すものとす又低き程部屋も上等にて二階三階と高くなる程其價も廉な
 り又低き部屋程其天井高く位置の高くなるに従ひ部屋ハ天井も亦た
 低く屋根に密接する最高頂上の部屋杯ハ日本家の低き天井と殆んど同様
 なるもあり左れハ大ホテルにては其部屋次第にて直段ハ種々様々なり先

つ四階位の處にて十五疊内外の一ト間にて一日廿フラン(四圓許り)食事の無論一切別なりなれば其の低き三階二階の部屋へ此より次第に高價となり又天井の方に近づく程從て廉價となる

ホテルの先つ部屋代丈を拂ふを通例とし食事の爲すも爲さざるも客人の自由なり食事の附きたる部屋とて別段に之れなし右の大ホテルにて夕飯一食の價ハ八フラン(一圓六十錢許り)なりきと覺ゆ晝飯ハ此の半價内外にて朝飯ハ又之れより廉なり然れども若し三度の食事を悉く食堂にて爲さし多分十一ニフラン(二圓三四十錢許り)にて済むべし尤も右の無論食事のみの代なり又た此のホテルの食堂なる者ハ料理屋と同然なる有様にホテルに止宿せざる人にて此食堂にて食事を爲し得ると恰も料理屋に行くが如し又食堂に各種の酒ありて其の注文に従ひ之を持來る尤も酒代の食事の外に之を拂ふなり食事の後付の給仕に通例二十錢許りの心付を與ふ是等の給仕の總て黒の禮服に白襟を付け一同に立派に装ひ居れり



萬國旅館之圖

送更軒曰食
時更服其
禮法之整
以理完全
可見可整

送更軒曰靜
狀可感之
可感之靜

食堂の最も見事にて身元善き客人なれの夕飯の時の通例黒の禮服(燕尾服)を着けたるもの多し食堂の内に五行或の六行に長さ大食卓ありて銘々此に就くとなるが客人一名食堂に入り来る毎に禮服用の給仕直ちに之を案内して其の着く可き席に着かしめ客人の食卓に密着して眞直に立ち居れの彼の案内せる給仕ソツと後方より椅子をあてがひ客人の悠然と尻を据れの丁度好き工合に自然と腰掛らるゝなり然れども未だ是等の事に經驗あらざる時の茲等の躰(からだ)のヨナシ甚だ不落着にて直に田舎者と見て取らるゝなり

又た百名前後の諸國入りまじの客人が思ひくゝに食卓に列し居るも其行儀肅然として妄暗に高聲を放ち調子外れの談話を爲す者も無く同行の客人同士互ひに談話を爲すさへ極靜かなる調子にて満堂何となく物柔らかに品よく打上がりて見ゆる程誰令するともなく一同の作法行届き居るに余等の驚き入りたる所なり又た其の料理の風味も甚だ好きとなるが獻立に季節に因りて相違あり絮煩しければ畧すること然るべし但し朝

飯、晝飯杯の時の男女の客人共に夕飯の時程食堂に列する事に意を用ゐるなり

遂軒曰是亦其理

去りなから食堂に赴かずして自分の部屋に食事を取り寄するとも勝手次第なり然れども部屋に取り寄する時の其代を一割以上高く取らるゝことなり是の部屋に持運ふ面倒の賃金を拂ふ譯なるへし又一ト品ニタ品を撰ひて註文をするも客人の自由なり

◎問 其外ホテルの有様は如何

○答 是迄述へるの何れも巴里のグランドホテルと云へる客舎の例を舉たるとなるが英、曼、伊諸國のホテル共に先づ大体の如し極上等と極下等とを格別とし先づ通例八疊或の十疊許りの三階若くの四階にある部屋にて寢臺附の者なれの五フラン又の四シルリング一圓内外を通例とし又たターブルドールと稱する夕飯一ト揃の食事にて一圓内外の價格を通例とす去りながら場所柄次第にての非常に何事も高價なるあり又非常に廉價なるもあり又た處によりての部屋の蠟燭代を別に取るものあり給仕の召

使代を別に取るものあり其甚しき一本の蠟燭に一フラン(廿錢許り)を取るものあり余等嘗て英人、佛人と路伴となり共に客舎に投じたる事ありしが其夜種々の物語の序に英人が例のお箱なる國自慢にて英國程客舎の便なる國の無しと言ひしに佛人の大に之を笑ひ余が英國のチャールズ、グロースなる停車場附のホテルに投宿せし時所用ありて小使に一封の書翰を帳場迄持行しめしに翌日の勘定書を見れば是か爲め廿五錢取られたることあり實に驚く可き高價なり佛國に決して彼様なる事無しと言ひしかば頻々佛國のホテルの高價なる例を擧て口論し大笑となりしとあり又た或人が米國のホテルにて明日の天氣を氣遣ひ今夜の露れ居るや否やを小使に見來らしめたるにアトにて其代を三十錢取られたりと言へる笑話ある程なり實に何事もウカとの命せられず余等が紐育にて食指許りなる大さの細繩二三丈を買ひ來れと命じたりしに二圓以上を食られたる事あり然れの通常の物品の外に先づ容易に用ゐ難き方なりと知るべし又英國の大陸案内書中に旅客の石鹸を必らず用意す可き旨を載せ一ト切の石鹸

睡を居士
乎曰亦然

にて二三十錢以上を食らるゝの珍しからずとの注意を爲しありしが如何にも右様の事甚だ多し注意すべきとなり
世事の經驗を積み積む程巧者に成り行く者にて余等の如き氣の利かぬ者迄も國々を廻り廻り旋慣るゝに従て自然何事も狡猾に立ち廻り傾きとなれり然れハ我が懐中の温度より懐の暖かなる時にハ大盤顔を爲して最上のホテルに泊り込み少しく其冷かなる時の面目に關せぬ迄を界とし成る可く廉價のホテルに投宿せり今更後來の旅行者の爲に一二の傳授を畧記し置くへし

外見の体裁好くして實際の經濟なるハ上等のホテルに止宿して珈琲店の食事を食ふを第一とす珈琲店其他料理屋に至れハ通例一ト品にてハ二タ品にてハ己れ好みのを擇み多量にも少量にも自分の欲する丈注文するをどを得然れハホテルの食堂にて滋味厚味にもせよ其時左程欲しからぬ料理を數多く是非共あてがハれ是に高價の代を拂はんより自分料理店に往きて己れの腹加減に合ハし隨意の品を食すること便利なれ料理店なれハ

注文次第にて我か欲しき品を一品なり二品なり擇て食するとも出來從て其の價も甚だ廉なり又外國人同國人に對して己の宿所を名のり或ハ來客杯ある節も上等のホテルなれハ面目も甚だ宜く萬事に都合なり故に好きホテルの相應の部屋に投じて料理屋の食事を爲すハ甚だ便利なる法なり不案内の人の之に反し食事を其ホテルにて爲し却て部屋をハ頂上に近き極廉なる所に定むる者も甚だからず是ハ餘り感心せぬ仕方なり

◎問 然れハ先づ經濟上より云ハゞホテルの食堂には出でぬ方なりや

○答 然り然れとも言語も全く通せざる國に至りし時杯ハホテルの食堂なれハ黙し居りても出す丈の物の持來るか故無造作なり左るに若し料理屋杯に行きしとて運來る料理の名もヨクハ分らず勘定すら頼すハ出來難けれハ斯る場合及び婦人連の旅客杯ハ餘義無くもホテルにて食事を爲さねばならん然しながら余等とても英語の外ハ佛語なり伊語なり曼語なり僅かに十五か二十位の外の解し得ざる身なりしかども猶は大膽にゴマ

カして時々料理店にマグレ込み食事を爲したるをり萬事に敏捷なる
 歐洲人の事ゆゑ先つ大低の手直低にても此方の意味を悟り呉るゝとなり
 況んや此方も知つた振を爲しウキとかヤァーと生意氣に其國語を吐き乍ら料
 理屋の料理の表(日本なれの「板」と云ふ處なり)を大抵に指す時の給仕等心得
 て持來るとなり又各品の直段の數字にして記しあるが故に別に欺かるゝ
 の憂も無し唯た其の國々のマクとかフランとかの價格と數字とを知り居
 れの例の表と見合せて充分悟り得べし又料理の名の國々にて無論一様に
 のあらねども諸國共に多くの都びたる佛語を用る居るとなれの先づ幾分
 の悟り得可きなり又英語と曼語との如きの甚た相似たる者多きか上に其
 間に交し居る外國出の詞とての亦た佛語なれの日耳曼にての余等も料
 理の献立の大抵間違のぬ方なりしか唯た一度可笑しかりしのチースと書
 きしものありしを是の英語のケースに似つかのしけれの多分菓子なるべ
 しとて詭へたるに彼のチースの出て來りしにの開口したるとあり然れの
 折々の斯る間違の出來するを免れず

開け切りたる故き國々のとなれの歐洲の旅行の何事も痒き所に手の届く
 如くに順序整ひ居り此上も無く氣樂なることにして亞米利加杯に比すれ
 バ實に雲泥萬里の相違ありし如し余等か歐洲旅行中にの常に毛布と手カ
 バン杯の類兩三個を携へ居りしか別に荷と云程にもあらねど若し已れ持
 運ふとすれの随分厄介なるとなり左れとも旅行中余等の曾て此の厄介を
 感したるをなく先つホテルを出立する時の小使か之れをホテル持の馬車
 に載せ客人と共に停車場迄送り來り停車場に着すれの停車場附の荷持人
 足出て來りて之を受取り客人の乗込む瀛車の處迄運ひ呉れ又の荷車にも
 載せ呉れるなり又ライン河の如く風景を旅客の眺むる地方にての少し必
 付を澤山遣のせの彼の荷持人足の此方の窓が景色を見るに宜しとか彼方
 の窓が宜しとか教へ呉れて其處に座を定め占むる世話をさへ爲す者あり
 扱瀛車が留まる所に至れの又其停車場の人足出て來りて此方の指圖に従
 ひ之を其の停車場に客待を爲し居るホテルの車に運び載せ此方の唯アレ
 コレ指圖するのみにて空手を振りつゝ此に乗込むなり又船に乗込む船

より下るも皆な同様の手續にて自身に荷物を扱ふの面倒の言て之れ無く幾百里の長程を旅行するにも實に自由自在にて何の不便もあらね又た遠方の旅客と見て視る如き無作法を働く徒も少く決して其徒無きに非ず流石の故國の故國なりと其萬端の順序の行届きたるを稱したるとなり

◎問 有名なるアルプス山の景色は如何

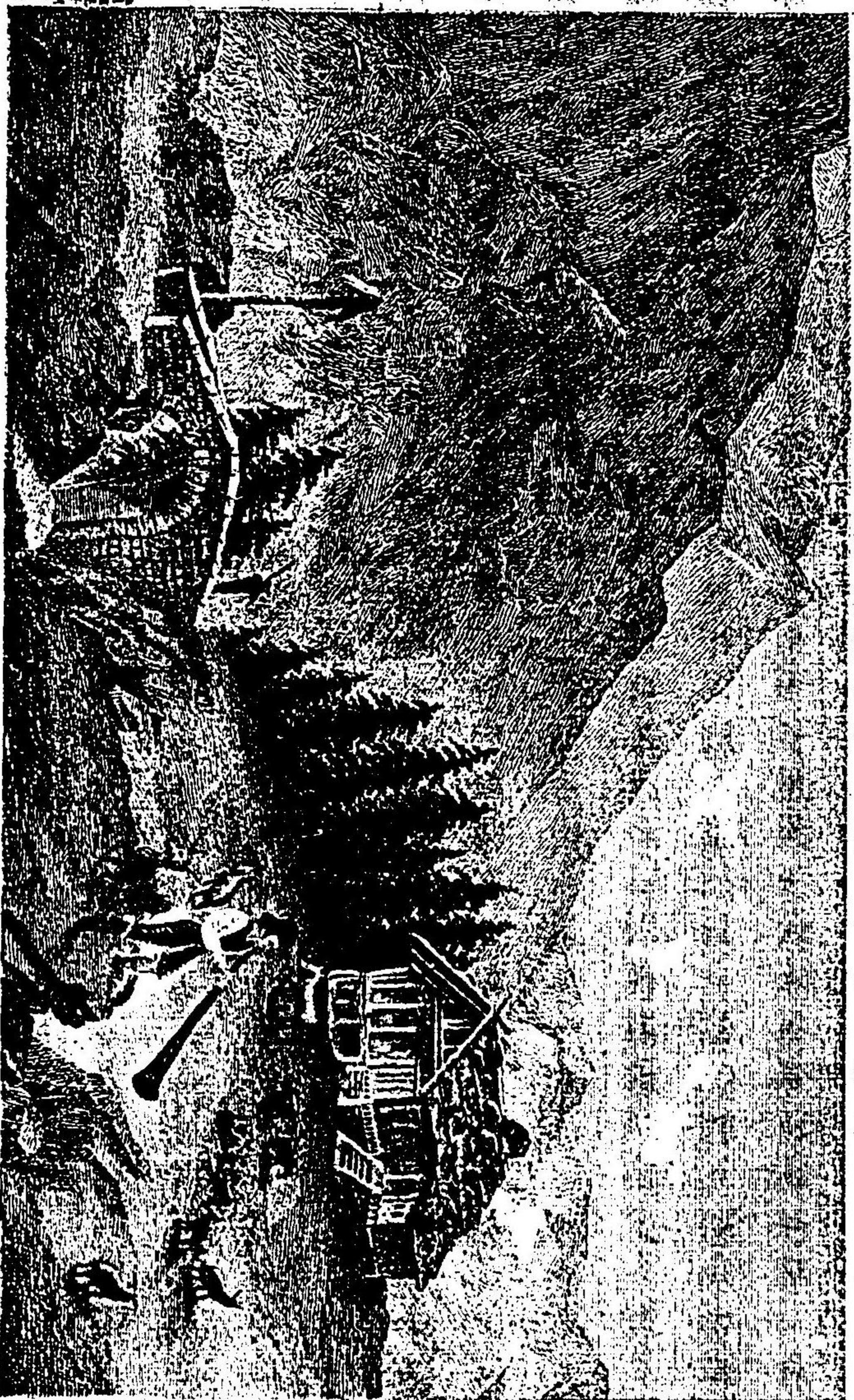
○答 世人の知る如く此の山の佛伊兩國の境に起伏して北のかた澳大利ヤに奔り又た茲に澳伊二國の境を爲し居るなり古代に於て良將ハンニバルが兵を扱きて羅馬を掩撃し來りし時此の山脈を越え又た那翁一世が伊太利を侵す時も間行此を越えて不意に敵の背後を擣きたる等にて歴史に有名なる故跡となり居るとなり人力能く天工を制する第十九世紀の今日に生れたる我々の左したる苦勞も無く安々と此の巍峨たる山脈を越すことなから以前の定めて一の大難所たりしに相違なしと思ゆる余の佛境より瀛車に乗り夜を冒して此を越え翌朝伊國のトリノと云へる地に着し

たり佛境の方なる山麓にかよりし夜八九時の頃なりしが伊境にて平野に降りしに拂曉なりし最も瀛車の此の山脈の低き所を彼方此方と辿り廻りて行く上に此の山脈の厚さの非常に厚さが故にもあれと兎に角斯く時間費すの以て此の山の大きさを察するに足るへし山嶺なる伊佛兩國の税關にて荷物を改めえの夜半十二時の頃なりと覺ゆ時方さに四月の初なりしが山上にての處々に積雪の皚々と積り居るを見たり昔レハンニバルが阿非利加より數多の戦象を率ゐ來りしに此を越る時寒氣に堪へずして象の多く斃れたりしと云へるも虚説にのめらずと思ひたり日本の島國の故にや國內の山脈の大抵馬の背を立てたる如く下り下りの急なるも山脈の厚さの甚だ薄し左れ日本の諸山脈より推想せる考にてアルプスの高山の其の斜面も定めて急ならんと思ひ居たりしに左の無くて山腹の非常に厚く山嶺に至る迄左程險しとも思ひぬ程に其勾排甚だ緩かなり又谷々の勾排も頗る緩にして饅頭の如き圓山を上りて下り下りて上りする内に最高の嶺に達する如く覺ゆ左れ谷と云ふて日本の如く狹隘峻削

遂軒曰東田
舍景况同
西亦界同

嶽々居之土
日工藝之
以想像足

なる者に非らずして實に陵夷なるものなり成程流石に大陸の山脈の氣
象の斯る者なるへしと始めて思ひ當れり同じ高山大嶺と云ふも大陸の者
の薄ペラの急なる者に非ざるなり
扱山嶺より山麓に至る迄に處處に陵夷なる地面あり概して森林少く藪
山と云ふも可なり民家も其間に散點せるか何れも山中の事なれり二階家
の少なく恰も日本の一軒立の平屋の百姓家に髣髴たりき唯だ旅客の眼に
異体に見ゆるの民家の屋根瓦なり此邊の一体に煉瓦瓦を用ゐず薄き石片
を以て不規則に屋根の上に積み重ね居れり其の石片の薄くへゲたる三四
尺許りの色々の形の者なり此邊の山中に斯る石片多しと見ゆ此の瓦の
外の都べて伊佛の民家に異なる箇條なし
佛境より山嶺迄も随分洞道多しと思しが山嶺より伊國の山麓迄の又一層
洞道のみにて忽ち明忽ち暗出しかと思へば入り入りしかと思へば出て、麓
の方七八合迄の處の幾と唯だ洞道續きなる心地せり
既にして瀛車山下に來り彌望空濶の郊野に出てたり地圖を案すれの伊國



伊國山嶺

の西北境の都て此アルプスの山脈に抱擁され又少く西南の方に至れり直ちにヘランスの山脈あり此兩山脈の間に左程の餘地あり共思ひざりしに實際此に來り見れり平原蒼々沃野千里と云ふ可き地形にて岫嶽相接し原野相聯り處々に桑樹多く村落所在に散點せり斯の如く空濶坦遠なる地形の恐く日本に曾て見ると能ひざるべし流石に舊國程ありて原野杯の開け盡したる有様人力の加はり居る有様の又た一ト入に眺めらる伊國か二三十年を出てすして早く強國の間に列するに至りしも決して偶然に非ず亦其國本の在る所を想ふへし

◎問 倫敦の氣候は如何

○答 倫敦の位置の日本の函館札幌よりも尙一層北の方角にあるとなれば其寒氣も亦た非常に強かるべき筈なり然るに其寒氣の東京より稍々少しく寒しと云ふ位のをよて別に甚しき相違ありとも思はず昨冬の如きの五十年來未曾有の寒氣なりしと彼地の人の云ひしなれども左まで堪へ難き程との思ひざりし又一昨年冬の寒氣の東京よりも稍々經き方に覺る